
R P G始めました

空雲雛太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPG始めました

【Nコード】

N4821W

【作者名】

空雲雛太

【あらすじ】

新しい妹が増えた。

感情の読めない表情で、彼女はこう言った。

「初めましてマスター。私に名前をください」

これは、風車に戦いを挑んだ滑稽な道化の喜劇を、面白おかしく綴った物語。

プロローグ

この物語は活劇ではなく喜劇だ。

春風 薫（はるかぜかおる）は俺の通う暁高校の有名人だ。もっとも、それは頭がいいとか運動ができるとかではない。

春風 薫という女生徒はその性格が有名なのだ。

重度のお人好しにして、極度のお節介。

それが入学からたったの1週間で名を馳せた春風 薫のキャラクターだ。

通りすがりのおばあちゃんの荷物を持つとか、家無き人に仕事を紹介したとか、自分を殺そうとした殺人未遂犯の裁判に弁護側で出席したとか。

そして、そんな噂（百歩譲って二番目はともかく、さすがに三番目は嘘だろう）に真実味をもたらす、彼女の親切への執着。

誰にでも分け隔てなく、誰であれ優しく接するという彼女の逸脱ぶりは、もはや校内に知らない者はいなかった。

とはいえ、本人の前で困ったりしなければ実に無害であつたし、頼めば掃除当番、黒板消し、ゴミ捨てにプリント運びと、皆が嫌がる雑用でも嬉々としてやってくれるので、教員を含めた全員に重宝されていた（彼女の乱用を防ぐための委員会が設立されたほどだ）。

そんな彼女の前である日、不覚にも俺は困ってしまった。

そのせいで俺は、荒唐無稽な事件に巻き込まれていくことになる。いや、この言い方はきつと正しくない。

発端は俺の間抜けな失敗だし、巻き込まれたというより勝手に首を突っ込んだと言ったほうが正しいと思う。

そもそも事件など最初から起きていないとさえ言えるだろう。

だからこれは、きっと風車に戦いを挑んだ、滑稽な道化を描いた喜劇なのだ。

昆布を食べるとハゲにならないって本当？

「あれ？おっかしいな…」

「うん？どうしたの淋漓（りんり）？早くお昼ご飯食べようよ」
「いや、その昼メシがねーんだよ」

楽しくて仕方がなかった4時間目の現国の授業が終わり、さあ昼メシにしようとした矢先のことだった。何度も鞆の中を確認しても、やっぱり弁当が見当たらない。

俺はまたかと小さくため息をつき、白状しろという意味を込めて最有力容疑者を睨み付ける。と、容疑者もそのことに気付いたらしく、2つに結んだ髪を揺らしながら大袈裟に反応した。

「むむ！？にーちゃんから疑いの眼差しを感じる！！」

「お前には前科があるからな」

「まったくひどいなア1週間に1回のペースで盗み食いしてたからって…。」

そんだけの前科があれば容疑で済ませている俺は優しいほうだと思っ。

「クロちゃんも何か言ってやってヨ」

そう言って妹のぐみは、俺の向かいに座っている男子生徒に同意を求める。

「そんだけ前科があつたら疑われても仕方ないんじゃないかな…」

「まさかの四面素麺！？」

「夏場なんかは良さげだな」

四面楚歌と言いたいのだろう。

頭の悪い妹は少し唸ったあと、勢いよく右手を上げた。

「異議あり！今回の現場は明らかにこれまでと手口が違っであります隊長！」

「裁判官が隊長なのか」

なかなかシニールな絵だ。

しかし、確かにぐみ（漢字があるのだがダルいのでひらがな表記で統一）の言い分にも一理ある。これまでの《強欲な捕食者》（↑食事ときのぐみはこう名乗る）の手口は『人の弁当を無断で半分近く喰い漁る』というものだったが、今回のケースは弁当箱そのものがないのだ。

つまり、普通に俺の過失である可能性がある。

「いやーあたしも盗み食いしようとしたらお弁当がなくなっってびっくりしたよー」

「…お前よく自分の無罪を主張できたな」

「だーって食べてないもーん」

「…午後 0 時 37 分、盗み食い未遂で逮捕ー」

「オナカガスイテツイ…ハンセイシテイマス」

俺がテキトーな罪状を読み上げ、ぐみが変な声（おそらくボイスチェンジャーを表現していると思われる）で謝罪する。

半ば恒例となったやり取りを終え、いつもならこのままいただきますのだけれど、今日はそのいただく弁当がない。

「はーあ…どーすっかなー」

「購買は？ご飯がないんじゃ、仕方ないよ」

今日の昼飯に思いを馳せていると、俺の正面に座っている男子生徒がそんな提案をする。まあ、もっと早く気付いていたならそうしたんだが…

「いやでもよ…腹が減ったぐらいじゃ食べねーだろあれは」

「あー…まあ、そうかも」

苦笑いを浮かべ、俺に同意する黒兎（こくと）。

うちの高校は購買部の利用者が多く、まともなメニューは昼休み開始から 5 分で消える。

では残ったメニューはまともじゃないのかといえはその通りだ。

我が校の購買部は実に開拓者精神に溢れており、通常メニュー完

売後は蠍（さそり）サンドとかエスカルゴのおにぎりとかカブトムシスティックとかいった不思議の国のキテレツメニューがずらりと並ぶ。果敢に挑戦したやつのは証言を信じるのなら「キテレツなのは見た目だけ」とのことだが（まあそうでなければ何のための購買だという話だが）、俺は遭難でもしない限り食べたいとは思えなかった。

ちなみにうちの高校に食堂はない。

「となると、兄ちゃんはお昼抜き？」

弁当を頬張りながら、小首を傾げてそんなことを言う我が妹。日頃俺の弁当を盗み食いしていることへの罪悪感は何もないようだ。

「お前いつも俺の弁当盗み食いしてるんだから、今日ぐらい俺に譲れ」

「なぜ盗み食いをするのか…。それはこれじゃ足りないからなのさっ！」

前半はかつこつけ風に喋っていたが後半は飽きたのかかつこつけていたのを忘れたのかいつものテンションだ。

たぶん両方だろう。

「じゃあ僕のお弁当分けてあげるよ」

そう言っ、自分の弁当を差し出す黒兎。気持ち自体は素直に嬉しいんだけど…

「お前の弁当食うぐらいなら購買行く」

「僕のお弁当カブトムシスティック以下！？」

すくびつくりしている。

俺に言わせれば、ここでびつくりするお前がびつくりだ。

「たまには食べてみてよ！きっとキテレツなのは見た目だけだよ！」

そう言っ彼——弁天財（べんてんざい）黒兎は自分の弁当を差し出してくる。しかし…

「僅かな可能性に賭けて聞くけど、弁当全体を塗り潰すようにかかっているこれは何だ？」

「チョコレートだけど？」

「どうしてここで『何を当たり前のことを』みたいな顔が出来るんだ！！」

ソースなら！

せめてソースなら受け入れられるのに！

「どうしたの？何か困りごと？」

黒兎のチョコ弁当かキテレツ大百科な購買かで悩む俺に、誰かが声をかけてきた。

その声に。

校内の『この声に子守唄を歌ってほしいランキング』（一体誰だこんな馬鹿なランキングつけたやつ）ベスト1に輝いたらしいその声に、俺は戦慄した。

この学校で平穩に過ごすためには、その声の持ち主の前で困った素振りを見せてはいけないのだ。

「ありや、緑野（みどりの）くんのお弁当が見当たらないねえ。もしかして忘れちゃった？」

「…うん、まあ…」

「おけーい、ならば私のお弁当を分けてあげましょーう！」

そう言つて。

学校1のお節介、春風 薫は、春の日差しのような笑顔を俺に向けた。

俺はそれに対し、抵抗しようという心を追い出すように息をはいて、自分の間抜けを恨むとともに口を開く。

「…ありがと。で、今度は何だ？キテレッツ大百科、チョコラー弁当ときて、次は箱ごとシュガーコーティングか？」

春風の恐ろしさは、その親切を受け取り拒否させてもらえないところにある。

だからつまり、春風が弁当を分けると言った以上、それがどんなに突拍子もない弁当でも、俺が受け取るまで彼女は決して引いてくれないのだ。

しかしどうやら、今回は俺の戦慄は杞憂に終わりそうだった。

「何の話かわからないけど…私のお弁当は、とっても普通だよ？」

「自分のことを普通だとか言うやつに限って普通じゃないんだよ」

「…緑野くん、初めて話す人が相手でも容赦ないんだねえ」

まあでも、裏表なさそうでいい人っぽいね。

そう言うってから、春風は自分が普通だと思っ根拠を述べた。

「だって、ケチャップとかマヨネーズとかをどびゅーっ！とかけたりしてるわけじゃないし、中身はスーパ〜とかで普通に買えるやつだし！」

「…マジ？」

「マジマジ」

「…んじゃ、少しもらっていい？」

「まいどあり〜っ！なんちゃって」

てれれってれ〜！

べんとうばこをてにいれた！

「…ってまるごと一箱！？」

「…中身はちゃんとあるよ？」

「いや別に『実は空の弁当渡したんじゃない？』みたいに疑ったわけじゃなくてだな！」

こいつ本気で言ってるのか！？

他人にまると一箱の弁当を渡すということは、自分の昼メシが無くなるということだぞ！？

「ああ、そのこと？心配してくれてありがと！でも大丈夫だよ」

そう言っただけで春風は、何ともうひとつ弁当を取り出して見せた。

「こんなこともあるのかと、お弁当はいつも2つ！持ち歩いているのです！」

「あそう」

何というかもう…脱帽だ。

親切の親切さ加減が非現実的だ。

狂っているとかえ——言えるかもしれない。

「であであ！またね、緑野くん！」

春風はそう言っただけで、あの春の日差しのような笑顔で戻っていった。満足したらしい。

友達の輪の中に戻り、昼食を再開した春風を視界の端に見ながら、俺はぼんやりともらった弁当を眺めた。

桜に雪解け、入学式。

春は始まりの季節。

しかし、始まるのは何も希望だけじゃない。

毒蛇毒草、熊だつて。

春の日差しは——危険な生き物も目覚めさせる。

春風 薫。

彼女はあの笑顔のしたに何を潜ませているのだろう。
何を…隠しているのだろう。

「……………」

とか。

そんな益体のないことを考えながら弁当を開けると、そこには深い緑色の野原が広がっていた。

ていうか昆布しか入ってなかった。

主食からおかずに至るまで全部乾燥昆布（しかも戻してない）で統一されている。

「…なあ可愛い我が妹よ」

「なんだい可愛い我が兄ちゃん！」

兄に向かって可愛いとか言うな。

それは俺と黒兎の前じゃ禁句だぜ。

「…弁当、やるよ」

「ごめん！あたしも無理っ！」

「……………」

視界の端で、春風の友達が苦笑いを浮かべているのが見えた。

天井を仰ぎ見ると、どこからか「御愁傷様」というセリフが聞こえた気がした。

妹持ちに妹萌えはいないって話はよく聞くけど、妹持ちに妹燃えはいないって話

半ば拷問のような昼休みから2時間が経ち、俺とぐみは自宅に続く道を歩いていった。

あの弁当を頑張って完食したせいで、いまだに口の中が昆布一色だ。

「情けないぞ兄ちゃん！あれきしのお弁当に負けるなんて！」

「…んじゃ今度のお前の弁当は乾燥昆布の詰め合わせな」

「お、お代官様！何とぞお目こぼしを！」

「…ならん！儂を怒らせたらどうなるか思い知らせてくれようぞ！」

「あーれー！」

そう言いながらその場でくると回り始めるぐみ。

俺の名誉のために断っておくが、決して俺が回したわけじゃない。

「けど完食したんだ、負けじゃないだろう」

「そーだけどその後ダウンしたんだから、勝ってもいないのさ！」

「しかしそうは言っても乾燥昆布だぞ？あの文字通り山のような量の乾燥昆布を飲み物無しで食いきった根性は評価してくれよ」

「甘いね！その根性論で同情を誘う手法はクロちゃんのチョコ弁より甘いよ！」

「マジでか」

「マジだよー昆布だって工夫次第でレパートリーが増えるからねー。あそこで調理という選択肢を選らばなかった兄ちゃんの負けはやはり揺るがないのだよ！」

「でもそれってポリウムも増えないか？」
「というか。」

昼休みに調理の選択肢を選ぶのもそれはそれでどうだろう。

「そこであえて本格中華にチャレンジすることで読者に自己アピールするんだよ！兄ちゃんはただでさえ平凡だからねー積極的にアピールできないと忘れられちゃうよ！」

「ほつとけや！」

「つか、そろそろ止めようぜ。」

「思い出したら気分悪くなってきた……。」

「行けるとこまで行こうよ、なかなかないよ。こんな機会」

「これ以上この話題を続けるなら俺は不登校になるぞ……。」

「それは困るねえ、困っちゃうねえ」

「盗み食い出来なくなるからか」

「ターゲットがチョコ弁一択になっちゃうからね」

「せいっ」

「ひっぱたいだ。」

「少し加減してひっぱたいだ。」

「滅多にないといえさあ」

「今までのやり取りをなかったことにしたみたいに話題を切り替えるぐみ。」

「心なしか、少し顔が赤い。」

「……そろそろ、生まれそうなの」

「……ほお」

「驚いたな……こいつにこんな器用な真似ができるとは思わなかった。意外な切り札を持つてるじゃないか。」

「辺りを見回し、誰もいないことを確認する。」

「ふむ……奥の手を見せてもらったお礼だ。構ってやるか。」

「生まれるってまさか……!?」

「……ん」

「頷きながら愛おしそうにお腹に手を当てるぐみ。」

「当然そこには誰もいないことを、一応断っておこう。」

「……新しい家族。今朝からずっと、もしかしたらって思ってたんだ」

けど…」

「マジかよ…相手は誰だ!？」

「相手は…実は兄ちゃんなのだー!」

「な、なんだってー!」

「そんなことより、帰ったらモンハンやるモンハン!」

「新しい家族が『そんなこと』!？」

もう飽きたらしい。仔犬みたいな妹だった。

「で?どれが化けるんだ?」

「うーん…具体的にはわからないけど、たぶん兄ちゃんが身につけてるやつのだれかだと思う」

「そうか…。制服とかだったら困るな」

「着るときは戻ってもらえばいいじゃん!」

言ってぐみは、にかつと笑ってみせる。

九十九神。

器物百年を経て化して、精霊を得てより人の心をたぶらかす…の、九十九神だ。

今の会話はつまり、俺の持ち物のどれかに九十九神が生まれるという意味だ。

俺の隣で能天気には笑っているぐみも九十九神なので（元々は俺が子供の頃大事にしていた本だ）、同族の誕生にいち早く気付いていたようだ。

もっとも、ぐみにしろ俺の持ち物にしろ、本当に百年ものなわけではない。

この世界は20年前、妖怪変化起きやすくなった事件が起きたからこそ短時間で命を得たのだ。

「まあ、とりあえず名前だな。家帰ってなんか考えるか」

そう言って、気持ち早めに俺は歩き出す。

20年前、怪異の存在が公に認められ、人と妖は手を取りあって生活するようになった。

多くの苦勞があつたらしい。

今でも災害指定が解除されていない人を殺す怪異というのはいりし、相手の存在を受け入れられない者もたくさんいる。

人間の側にも怪異の側にも。

俺の通う暁高校は世界初の人魔共学の学校として、人と妖怪の間の差別や溝をなくすための活動をしている。だからクラスメイトの中には、当然人間じゃないものもいる（ちなみに春風は人間だし、ぐみの持ち込みが許されているのだ。

閑話休題。

とにかくそんな世の中だから、怪異の類いや妖怪変化が現れやすくなっている。

怪異に遭うと怪異に引かれる。

怪異がある日常では日常的に、雨が降るように風が吹くように朝に起床し夜に就寝するように――怪異は生まれるのだ。

……いやまあ、怪しく異なると書くだけあって、発生にはある程度条件が揃わないとならないのだが。

雨や風より台風のほうが近いかもしれない。「ただいまー」

うちの両親は共働きのため、家にはいない。

しかしどうやらうちは九十九神が生まれやすい環境らしく、家に帰ると両親の持ち物が出迎えてくれる。

「お帰りなさいませ坊っちゃん！ご飯になさいますかおやつになさいますかそれともお夜食ですか！？」

「メシ以外の選択肢はねえのか！」

うちの九十九神は食い気ばかりだ。

「……おや？今朝が感じた九十九神の気配が強くなっていますな」

「ああ、やっぱりそうなんだ…。」

ぐみの観測ミスとかではないらしい。

「いやあめでたい！男の子でしょうか女の子でしょうか…」

「…いや、九十九神って器物に命が宿ったものだろ？ジークやぐみみたいに人の姿を持つのは異例であり特例なんじゃないのか？」

子供の頃——それこそぐみが生まれる前は今話しているジークフリート（シャツの九十九神で、命名したのは母さんだ。ちなみにぐみは父さんの命名）を見て育っていたから、九十九神になった物は人の姿になるとばかり思っていたけど。

「その『思っていた』が重要なポイントですね。怪異は元々物語や伝承の中にしかない空想の産物です。いると思えばいるしいないと思えばいない。器物に命が宿ると認識すればそうなるし、器物が人になると認識すればそうなります。百鬼夜行の総大将ぬらりひょんも、最初は『人の家に勝手に上がり込む』という設定さえなかったのですよ」

けっこういい加減なんですよ、我々は。

ジークは自嘲気味にそう呟くと気持ちを切り替えるようにパンツ！と手を叩いた。

ジークの長い説明に船を漕いでいたぐみがびっくりしたように背を伸ばす。

「では今日の晩御飯は赤飯ですね！新たに生まれる九十九神の登録準備もしないといけませんし、忙しくなりますねえ」

ジークはどことなく嬉しそうにそう言くと、台所に姿を消した。

親がいない間は家事の一切をジークが仕切ってくれている。なので、料理は母さんが作るのよりもうまい。

小さい頃、すっかり母さんの前でそう言ったら泣かせてしまった。感受性が大豊作な緑野家の母である。

「兄ちゃん！早くモンハンやるーぜー！」

「あのなあ…先に新しい家族の名前を考えなきゃならないだろうが」

「うん？何で？」

「……………」

何でと来たか。

我が妹は新しい家族が心底どうでもいいようだ。

「いやさ、そうじゃなくて。あたしやジークみたく、お父さんかお母さんにつけてもらえばいいんじゃない？」

そんなことより遊ぼうよー、とか。

ぐみの中では『新しい家族＜俺と遊ぶ＞』の図式らしい。

悪い気はしないが、いつ戻ってくるかわからない両親に丸投げするわけにもいかない（連絡がつかないことさえある）。

どうやって説得したものかと頭をひねっていると、2階に上がる階段の上からぐみが話しかけてきた。

「兄ちゃんはおたしとその子、どっちが大事なの！？」

「お前は俺の何なんだよ……」

下校中にもやっただろ。マッハで飽きたくせにまたやるのか。

ぐみは元が本であるせいか、よくこういうごっこ遊びをせがんでくる。

小さい頃はロリコン役だのシスコン役だのと、俺が意味を知らなかったのをいいことにそういう役をやらされていた（俺の名誉のために断っておくが、そういう性癖があったわけじゃない）が、最近では下校中や今のこれみたいに、おそらくは夫婦や恋人のような役を要求されている。

…まあロリコン役やシスコン役よりマシだが、さすがにこの歳でごっこ遊びは精神的にきつい。

適当に流して話を進めるかと思った俺だが、ぐみの迫真の演技がそれを思い留まらせる。

「ひどいよ……あたしはただの遊びだったの！？」

「……………」
「ふむ」

なるほど…今回はどうやらぐみ演じる伴侶（詳細は不明）に俺の演じる役（彼氏役か夫役かはやっぱりわからないけれど）が浮気の嫌疑をかけられているシーンか。

しかし…いつの間にか演技のレパートリーが増えたなあ。馬鹿だ馬鹿だと思っていたけど、いつまでも馬鹿のままじゃないんだな…。妹の成長は嬉しいやら寂しいやらで、兄としては少し複雑だ。

よし……腹アくくったぜ。

こうしてぐみと遊べるのもいつかできなくなってしまうんだ。後悔のないよう、全力で遊んでやろうじゃないか！

意を決して階段をのぼり、ぐみに近づく。

ぐみは少し拗ねたような顔をして、上目遣いに俺を睨んでいる…って俺のセリフ待ちか。

しかしあれだな…恋愛経験がないから、こういうとき何て言ったらいいのかわからないぞ。とりあえず何か言わないと話が進まないし、ええと…！

「そんなわけないだろ？俺の一番はいつだってお前だよ」

…なんか浮気の常習犯みたいなセリフになってしまった。しかも若干鼻につく。

もし俺の前でこんなこと言ってるやつがいたら、俺は全力でそいつのことブン殴るぞ。

「……………っ」

ぐみも同じように思ったらしく、顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。

相当お怒りのようだ。

「…そんなの嘘だもん…。兄ちゃんはそもそも、あたしを女の子扱いしてくれないんだし…」

声が小さくて聞こえないが、ボソボソと何かを呟くぐみ。
…そうか。

呪いの呪文を口にするほど腹がたったか。

「ごっこ遊びとはいえ、自分の亭主があんなセリフを言うのはそんなに許せなかったのか…仕方ない。

ぐみの機嫌取りもかねて、少し路線を変えてみるとしよう。今度是不器用な口下手キャラっぽく、言葉ではなく行動で示す方向でいってみた。

具体的には、ぐみに抱きついた。

「~~~~~ッ!!!!!!」

腕の中でぐみの体が緊張に支配されたのが伝わってくる。…やっぱりいきなり抱きつくのはびっくりさせちゃったか？親しき仲にも礼儀あり』の教えに背いてしまった…。

とりあえず、まずはぐみを落ち着かせないといけないな…頭を撫でれば大丈夫か？

「~~~~~……っ」

今度のぐみは全身から力が抜け、腕の中から落ちそうになる。

いやいや、落ち着き過ぎだろ……。子供の頃は、こうするとどんなにぐずっても泣き止んでいたから、もしかしたら機嫌を直してくれるかと思ったのだが…予想以上の効果だった。

力が抜けてうまく立てないのだろう、ぐみは俺の背中に腕をまわして抱きついてきて、弱々しく口を開く。

「…大好きだよ、兄ちゃん」

………え？

こいつ………今、何て言った？

弱々し過ぎて聞こえなかったんだけど。

まあ今回のごっこ遊びは『浮気亭主とその妻』みたいなお題だったはずだから、たぶん『もう浮気しちゃだめだよ』的なことを言ったのだろう。

ならば俺の返答は、これが正解なはずだ。

「…ああ、分かってるよ」

「…んっ、なら良し！」

そう言っただけで離れるぐみはまだ機嫌が直りきってないのか、赤みが抜けきっていない。しかし表情は願いが叶ったかのような笑顔なので、一応は及第点だったようだ。

「じゃあ（ごっこ遊びも終わったし）新しい家族の名前を考えるか」

「うん？あたしも一緒に？」

「当たり前だろ、家族なんだから」

「あたしはいいよー面倒くさいし。それよりPSP貸してー！」

「貸すかつ！人の尻ポケットをまさぐるな！」

さすが我が妹。

俺がどこに何をしまっているかを完璧に把握している！

「あたしもだてに兄ちゃんの妹やってないよー！兄ちゃんのこととはホクロの数さえ知ってるよ！」

「……………」

…それはそれで怖いんだが。どうやって知ってんの？

しかしそれを言うなら妹よ、俺だっただてにお前の兄ちゃんやってないぜ！お前を釣るくらい、生まれたての子鹿に勝つと同じくらい容易いことだ！

ホクロの数はさすがに知らねーけどな。

「手伝ってくれたらゼリーやるから」

「……むう……」

「……あれ？おかしいな……」。

いつもならコンマゼロで飛びつく（文字通り俺に飛びついてくる）のに、今日はリアクションが薄い。調子が悪いのか？

「だって……新しく生まれる子が女の子だったら、倍率が上がったちゃうし……」

「倍率？何の話だ？」

狙ってる学校が女子大とかなんだろうか。

それでも1人くらいじゃ大して変わらないと思うし、何より名付けを拒む理由にならないよな？

「だって、持ち主に名前をもらえるなんてずるいよ……。あたしはお父さんだつたのに不公平だよ……」

「ぐみ、何を言っているのかよく聞こえん。気に入らないことがあるならはつきり言え」

「兄ちゃんが名前をつけるのが気に入らない！」

「……ええー」。

何それ、俺のネーミングセンス全否定？

そうか……俺の考える名前はダサイのか……

「兄ちゃん……何でそんなに落ち込むの……？そんなに名前を付けたがるってことは、やっぱりあたしよりも新しい子のほうが大切なの！？」

また泣きそうな顔になるぐみ。

「……泣くほど俺のネーミングセンスはひどいッスか。それなら仕方ない……」

「名前はぐみに任せるよ」

「……あたし？」

目に涙を貯めながら不思議そうな顔をするぐみ。少し子供の頃を思い出す。

「俺が名前をつけるのが嫌なんだろう？だから、ぐみに任せる。いい名前を付けてやって「その手があったか!!」「どの手が？」

というか何に對して？

「ふふふ…そうだよそうだよそうなんだよ！あたしが兄ちゃんより先に名前を付けちゃえば新しい子はあたしと同じく兄ちゃんからは名前がもらえないんだよ！いい名前？まっかせてちょーだい、兄ちゃんはPSPとかやって待っててねー！」

…早口過ぎて聞こえなかったが、何やら不思議な理由でぐみのテンションが上がった気がする。

名前がどうか言ってたような…あいつも姉として、新しい兄弟に名前をあげたかったのか？なら何で最初は嫌がってたんだろう…。よくわからん。

しかしここで本当にPSPとかやったら、妹に仕事を押し付けて遊ぶ兄みたいで精神衛生上よろしくない。1階に行って、ジークの手伝いでもしようかと考えたその瞬間だった。

俺はホタルにジョブチェンジした！

……混乱を落ち着けるためと思って事態を文章化したら、余計混乱した。え？何これ、どーいう状況！？

「ちよっ…何だコレエエエ!？」

「どうした兄ちゃ…っ!?兄ちゃんがホタルにジョブチェンジしたあああ!!」

だよねやつぱそうだよねこれ！

「いや待て慌てるな一旦落ち着こう!!まずは原因の究明だぐみ二等兵！」

「りやりゆりよ了解しました兄ちゃん隊長!!」

ポンコツと化した兄妹の調査の結果、『ホタルにジョブチェンジ』

の正体は、さつきぐみがまさぐった俺の尻ポケットが光っていただけだった。……いや、どっちにしろ『だけ』で済む問題ではないけれど。

「これ…PSP…？」

ぐみが俺の尻ポケットから取り出したPSPを眺めて呟く。
発光していたのは、PSPだった。そこから光とともに数字の1と0の羅列が溢れ出ている。

この様子は——ぐみが生まれたときによく似ている。

そう思うのと同時に視界を覆い尽くすほどの光が溢れ出る。

やがてそれが少しずつ収まると、薄れゆく光の中に人影が見えてきた。

身長はぐみと同じくらいの——少女。

溢れ出る光と1や0とともに宙を踊る髪は、澄んだ昼間の空のような青。

ゆつくりと開かれた瞳はそれとは対照的に、夜が明ける頃の海のように深い青色を称えている。

光が完全に収まると、生まれたての九十九神は感情の見えない人形みたいな顔を俺に向け、抑揚のない…それでも生まれた喜びを感じさせる声で、俺に語りかけてきた。

「初めましてマスター。私に名前をください」

別に見ていたんじゃない。たまたま視線がそこに向いただけだ

「…どうしたの緑野くん？何だかお疲れみたいだけど…」

「ああ…春風か…」

疲れた人も親切のターゲットなんだな、とか言いながら、机に伏していた顔を持ち上げる。

春風は「そのセリフだと私が殺し屋みたいだねえ」と苦笑いしたあと、自分の主張を声に出す。

「だって昨日と比べて、明らかに元気がないんだもの。何かあったのかなーって、心配になるでしょう？普通」

「…どうだろうな」

たったそれだけのことで、俺はほとんど関わりのない誰かに声はかけない。

大阪の人ならやりそうなイメージあるけど。人情の街っていうし。でも、春風のそれは少し違う気がする。

何ていうか、親切であることを自分に強いてるみたいなの——。

「それで、何かあったの？」

「……………」

話を戻された。

何かあったことを白状するまで、彼女は納得してくれないらしい。まあ、別に隠すようなことでもないしな。

「昨日、九十九神が生まれたんだよ」

「わあ、そうだったんだー。おめでとう」

言って、にぱつと無邪気に笑う春風。その春の日差しのように暖かな笑顔は、新たな命の誕生を自分のことのように喜んでいる。

「いいな、九十九神。私もねえ、お気に入りのお人形さんが喋ってくれたらいいなーって、いつも思うもん。やっぱりその子も、ぐみちゃんみたいに女の子なの？」

「まあそうだけど…」

なぜ女の子一択なんだ。

男の子の可能性は全否定か。

「いやあ、私もそんなに詳しくないからね。九十九神が人の姿をとる場合は女の子なのかなーって、勘違いしてただけ」

要するにさっきのセリフは『新しい九十九神も人型なの？』という意味だったらしい。

まったく、それならそうと言ってくれればいいのに。『人型』のほうが一文字お得だぜ？

「うん？でも、どうしてそれで、緑野くんが疲れるの？」

「……いやあ」

隠すようなことではないとはいえ、ほとんど愚痴だからなあ……。聞いてもおもしろくねーぞ？

「私だっておもしろい話なんか求めてないよ……。私はただ、それが私に背負える荷なら分けてほしいだけ」

1人で背負うより2人で背負ったほうが、楽だから。

春風はそう言った。

「ぐみと新しい九十九神が、名前で揉めたんだ」

「名前で揉めたって？」

「名付け親が誰になるかでひと悶着あったってだけ」

「初めましてマスター。私に名前をください」

彼女が生まれて最初に要求したのは、自分の名前だった。とはいえ、過去にも同じように要求された経験を持つ俺は特に慌てることなく、その要求に応えようと努力する。

「そうだな…お前の名前は…」

「あたしが考えるっ！」

元氣よく右手を挙げるぐみ。

それを受けて彼女は表情を変えず、しかし不満そうに抗議する。

「私はマスターにお願いしました。姉さんは休んでください」

「おうおうおう、あたしの名前が受け取れねえってのかい!？」

酔っぱらいかよお前は…。

「はい、受け取れません」

容赦ねえ!!

「…にいやーん…」

お前も妹に泣かされんなよ!! いや気持ちは分かるけどさあ、もちよい頑張れないか!？」

「…姉さんも九十九神なら分かるでしょう。持ち主から名前をもらうということが、私達九十九神にとってどれほど幸せなことか」

妹の幸せを、姉さんは邪魔するのですか。

感情のこもらない声で、彼女はそう言った。

ていうか幸せって…。

そこまで言うか。

「そこまで言うよ! あたしたちはねえ、持ち主に名前を呼んでもらいたいから生まれてくるんだよ!! その名前が他の誰かにつけられるあの絶望を、兄ちゃんには知らないんだよ!!」

「…そうなのか？」

「まあ、おおむねそんな感じです」

マジかよ。

そうだったのか…あの時はネーミングセンスに自信がないからって父さんに任せただけ、かえって悪いことしたかな。

「あたしはにーちゃんからもらえなかったのに、名も無き妹はにーちゃんに名付けてもらえるなんて不公平だよ…! そんなこと、ゼッタイさせないもん!」

「いいでしょう…マスターから名前を頂くためなら、姉の屍も乗り越えてみせます」

「乗り越えんな!」

名前がどれだけ大事か知らねーけど、家族の屍越えてまでもらうほどの名前なんざ用意できねーぞ!

「食らえ哀しみの必殺、ぐみチョップー！」

「痛っ」

降り下ろされたぐみの手刀を避けきれず、肩に直撃を食らい、わずかながら顔を歪める新しい妹。

「マジでやりやがった。まだじゃれあいのレベルだけど、兄妹喧嘩って（他の家はどうか知らないが）こういうことから発展して始まるしな…」

「…この威力、ただの手刀ではありませんね」

「ふっふーん、ごめーさつ！あたしは絵本の九十九神だからね、普通のチョップよりちよつと痛いチョップが放てるのだ！名付けて、えーと…《本の背表紙は地味に痛い》！」

ルビはブックカバーだよ！とか、まな板みたいな胸を張って得意げに痛々「にーちゃん今すぐく失礼なこと考えてなかった！？」「地の文に割り込むな！」何でわかったんだ。

ていうかいくらシヨボくても妹とのじゃれあいで九十九神の能力を使うなよ…」

そういうことから喧嘩に高度成長するんだろうが。

「困りました…。私の能力は戦闘向きじゃないし、そもそも怪異が相手では力を発揮できない…」

表情はやはりほとんど変わらないが、全身から悔しさを滲ませる新しい妹。…っかさっさと名前付けてーんだけど。

毎回『新しい妹』とか呼ぶの、いい加減面倒になってきた。

「しかも生まれたての体じゃ、素早い動きもそれに対応することもないもんねえ…。あたしも経験があるからよく分かるさあ…」

…んなもん生まれたてのバンビにバタフライナイフ持って挑むよ。うなもんじゃねえか。

よくそんなどや顔ができるな。

「…しかし、私は諦めません。必ず姉さんを倒し、マスターから名前をもらうんです」

「ふっ、よくぞ言っただわ！それでこそあたしの妹よ！」

お前それ言いたかっただけだろ。

しかしそろそろ止めないと、マジでマジ喧嘩に発展途上だな。なんかこいつら無駄にノリノリだし。

「いきますよ、姉さん」

「くるがいい！あたしの《本の背表紙は地味に痛い》の餌食にしてくれるわー！」

「お前らいい加減に……」

「……これは何の騒ぎです？」

声の主はジークだった。

騒ぎを聞きつけてやってきたらしいジークは、少し呆れたような顔をしながら階段を登ってくる。

「おや、彼女が我々の新しい家族ですか？」

「ああ……だけど名前がどうかで喧嘩し始めてさ……」

「……事情は分かりました」

俺の説明を聞いて、露骨に呆れた顔をしたジークは、若干マジ喧嘩に突入しつつある2人に向けて、たった一言。

「『伶俐』」

そう、告げた。

「……？『れーり』って何？『れつつ ぱーりー！』の略？」

頭の悪い妹が、頭の悪い質問をしながら小首をかしげる。

そんなぐみのナチュラルボンボケをスルーして、ジークは発言の意図を語る。

「『頭がよく、りこうなこと』（岩波国語辞典）』という意味の単語ですが、今回は彼女の名前です」

言いながらジークは、生まれたばかりの九十九神を指し示す。

瞬間——伶俐と名付けられた少女は、無表情をほんの少し驚愕

に染めた。あるいは、伶俐を包む空気が全部絶望に沈んだと言った
ほうが正確か？

まあ何にせよ、その場が（ジーク以外）凍った。

「全く、生まれたなら早く報告してもらわないと、書類が作成できないじゃないですか。ピュアブラックと生活するにはきちんと手続きをしないと違法行為で捕まるんですからね、遊んでないで迅速に……」

途中からは説教ではなく独り言だったのだろう、ぶつぶつ言いながら階段を降りて行くジーク。

なかなか堂に入った母親ぶりである。

さすがは母さんより長く母親をやってるだけあるな、口が裂けても言えないけど。言ったら母さんが対抗心を燃やして、結果我が家は台風が通りすぎたみたいな惨状になるからな。いやー家のどこかに盗聴機が仕掛けてあるらしいから、うっかり口を滑らせたら一家総出（母さん除く）で大掃除大会決勝戦だからねH A H A H A。

「……………」

「……………」

「……………」

……そろそろこの空気を無視出来なくなってきた……

2人とも時間が止まったみたいに微動だにしない。

何だここ……ダッシュで逃げたい。

正しいのはジークなのだが、筋違いとわかっていても恨んでしま
う。

空気読めよ……何か九十九神にとって譲れない戦いだったらしいぜ
？お前も九十九神なんだからその辺汲んでやれよ……

どのくらい固まっていたかはわからないがしばらくして、伶俐が
力なく崩れ落ちる。

それを合図にぐみが駆け寄り、伶俐の体を支える。

かなり心配そうだ。なんだかねで、誰かを憎んだり妬んだりが
できないやつなのだ。

「お姉ちゃん…」

あれ？伶俐さん、なんだかキャラ変わってません？あなた、お姉ちゃんとか言う人でしたっけ。

いやまあ、人じゃなくて怪異なんだけど。

「うん」

「…うう…うわあああ…っ」

「…よしよし、辛かったね」

「…う…っ、うう…！」

「今は…泣いてもいいんだよ…『伶俐』」

「うう…！うわああああん！」

…しかし、ここまでシリアスになるほどのことなのか？伶俐って名前、俺は結構いいと思うけど…そういうこっちゃねーんだろうな。これ以上ここに居ても（雰囲気の）邪魔しか出来なさそうだし、下行って麦茶でも飲むか。

そんなことを考えて階段を降りようとすると、むんずと右足首を掴まれた。

見ると、ぐみがジト目で俺を睨めつけながら足首を拘束している。

「何してんだ？」

というか何をするつもりだ。

「…にーちゃんは泣いてる女の子をほっぽってどっか行っちゃような甲斐性無しなの？」

…その後、俺は2時間に渡って2人の愚痴に付き合わされた。

「それは何というか…災難だったねえ」

苦笑いで同意してくれる春風。

1人で背負うより2人…か。確かに春風の同意のおかげでだいぶ楽になった。

そうか…あいつらはこの感じが欲しかったんだな。

これ以上この話を続けると、今度は俺の愚痴が止まらなそうなので、話題を変えることにする。

「しかしすごいよな春風。普通、他人の愚痴なんか聞きたくもねえだろうに」

「そんなことないよ。私は、普通。私だって、見返りがほしいから愚痴を聞いてるんだよ?」

「見返りって…。んじゃ俺は何を要求されるんだ?」

聞いたら、春風はすいっと顔を近づけてきた。

どのくらい近くかというと、ちょうどおでこがくつつくくらいの距離。

この女子に人付き合いの距離感は無いのだろうか。

心臓がお祭り騒ぎだ。

「緑野くんは、私が愚痴を聞いて、どうなった?」

「…楽に———なった」

荷を2人で———分けたから。

「おけーい! だったら私の望みは叶いました!」

元の位置に戻り、笑顔を咲かせる春風。

少し残念に思った自分はスルーする。

「俺が楽になることが、望み?」

「最初に言ったでしょう? 私に背負える荷なら、分けてほしいって」

私はねえ、友達の幸せが大好きなのですよ! と言って、胸を張る春風。いつの間にか友達になってた…。

しかしぐみは妹だし胸はまな板だから何とも思わなかったが(机の上の絵本が抗議してきた。ちなみにぐみは、春風が声をかけてきたあたりから元の姿に戻っている)、さっきあんなに顔を近づけた女子がたおやかな胸を張っていると、何というか…うん。

巨乳というわけではないのだけど貧乳というわけでもない。いやらしく感じない、健全な色気を醸しだしている胸とでも言えば伝わ「何か私の胸にいやらしい視線を感じるんだけど…」「おやおや、この教室にはずいぶんとぶしつけなやつがいるんだなあ」ってしま

った春風さんのほうに。

女子が視線に敏感って本当だったんだな…春風さんと我が妹のジト目が痛い…（ぐみは絵本に戻ってるからどんな目してるか分からないけど、何か刺々しいオーラを放っている）。

しばらく2人のジト目に冷や汗をかいてしていると、仕切り直すように春風がため息をつく。

「…まあ、緑野くんもお年頃だもんねえ。女の子に興味を持ってる当たり前か…」

「え、見ていいの？」

「言ってますん」

またジト目。

「その話は流して、えーと伶俐ちゃん？はどこにいるの？」
流された…。

『置いて』とかだったら食い下がれたのに…。

「…緑野くんがやたら悔しそうにしてるんだけど…。男子の友達はいないから知らなかったけど、男の子ってこんなにも女の子の胸が見たいものなの…？」

…うん、冷静になってみると我ながらドン引きだ。第二の阿良々木暦でも目指すつもりだろうか。

「…アララギって、誰？」

化物語ネタが通じなかった。いや、通じたら通じたで、今度は妹へのセクハラを勘ぐられたかもしれないけど。

「…あれ、何の話だったっけ？」

「いやだからさ、伶俐ちゃんは今日来てないの？って」

お願いだから話を聞いてよ…と、疲れたようにぼやく春風。…悪ノリが過ぎたか。ちよつと反省。

「てか来るわけないだろ、生まれたてなんだから」

「……………？何で生まれたてだと来ないの？人間の赤ちゃんみたいに、まだ歩けなかったり喋れなかったりするわけじゃないでしょう？」

「…学校の授業で何を聞いてたんだ？」

こんなん基本中の基本だぞ。

「…実は、勉強ってあんまり得意じゃないんだよ」

恥ずかしそうに笑いながら、消え入るように呟く春風。どっちかっていえばこれ、常識の部類なんだが…。

まあ俺の場合、九十九神と日常生活送ってるから、妖怪学は体感で学んでるようなもんだからな。

妖学は俺の数少ない得意科目だ。

「…えーと、じゃあ、怪異の種類は2つに分けられるのは知ってるよな？」

首を横に振る春風さん。

「いや、さすがにそれはヤバくないか？」

こっちは普通に常識だぞ…。

「怪異は大きく分けて2種類いる。純血のピュアブラックと、混血のトワイライトだ」

まあ、怪異に血統なんてほとんどないけど。分かりやすさ優先だ。「で、中でもピュアブラックは、人間と暮らすには何かと障害が多いんだ。人を襲う怪異ならまずその設定をどうにかしないとないし、心への耐性をつけないとならない」

ここで区切り春風の反応を見てみたら、目が泳ぎはじめていた。

「まさかもう限界なのか？」

「こ…心への耐性ってなに？」

「怪異が有する様々な能力と同じで、心ってのは人間の持つ『互いを紡ぎ、事象を超越する能力』…簡単に言えば、誰かと仲良くなれて、奇跡を起こすチカラなんだ」

そしてこの力は、怪異にとって毒と変わらない。

「耐性無しで人間の中に放り込めば、心は怪異の存在を喰ってしまふ」

「喰うって…。心ってそんな乱暴なものなの？」

「いや、だから言っただろ？本来は『繋がる力』なんだよ」

怪異には、それが出来ないというだけで。繋がるための心が、無

いというだけで。

「一方的な繋がりには、相手の存在を喰ってしまうんだ。例えば虐待を受けた子どもは、それを虐待だと認識しないことがあったり、虐待した親と似たような人を好きになったりするだろ？それは存在が喰われて、自由度が下がるからなんだ」

人間なら、それでも命があるから——それが果たして幸せなことかは別にして——存在し続けられるけれど、怪異はそうはいかない。

人間の心から、身を守らなければならない。

「じゃあつまり伶俐ちゃんは、心耐性をつけるための修行に行ってるの？」

「修行ってほど大層なもんじゃないけど……九十九神は例外的に心耐性がある怪異だから、事故防止の講習がメインだな」

ちなみにこの講習も役所への申請同様、法律で義務づけられている。

車の免許を取るのと同じで、怪異は日常生活を送るのにも免許がいるのだ。

人の心が怪異に有害なように、怪異の存在もまた、人には有毒だから。

最近では交通事故より発生率の高い事故——妖怪変化。

闇にあてられた人間が怪異化する現象だ。特に心が弱っていて、精神的に弱い人ほど遭いやすい。

人と怪異の共生に伴うマイナスとして、反体制派の演説に頻出する単語だ。

「そっかー。妖怪と一緒に暮らすって、大変なんだね」

勉強になったよ、と言って、手を降りながら席に戻る春風。

話に飽きたのかと思った直後、いつの間にか来ていた先生が号令をかけていた。

あわてて起立する俺をよそに、ぐみは絵本のまま沈黙していた。

祭りは始まる前が楽しいと言いますが、ゲームも起動するまでが楽しいのかもー

なんだか寄り道ばかりしている感があるが、どうでもいいことに時間を使い過ぎている感是否めないが、もう少し我慢してほしい。

大丈夫、ゆっくりではあるが、確かに物語は始まりつつある。

もっともこの話の始まりをどこと定義するかは、意見の分かれるところだと思う。

事を中心である（彼女からすれば勝手に中心に据えられたという感じだろうが）春風 薫が体験した何かを始まりとするなら、遅すぎる開幕だ。どんだけ予告ダイジェストを流していたんだという話である。

俺が春風に声をかけられたときや怜悧が生まれた瞬間が始まりだとしても前振りが長すぎるだろう。

では今この瞬間を。

春風の下駄箱から溢れ出た大量の手紙（俺みたいなもんから見たら、5通は大量の部類だ）を発見したこの瞬間を始まりとしてならどうだろう。

「……………」

正直、リアクションに困った。

ていうか何だこれ。

春風に人気があることは知っていたけど、5通って。

どう見ても18歳以下にしか見えない青少年ぐらいはいるだろうけど（決してロリコンなわけではない、テレビと教室で実際に見たことがあるだけだ）、一周回ってもはやギャグみたいにモテるやつまで実在するとは…。

そもそもなぜ俺がこんな場面に立ち合っているかといえば、それはついさっきの出来事に起因する。

どういうわけだか、春風が「一緒に帰ろー！」とか言い出した。そしてさらにどういうわけか、これにぐみが猛反発したのだ。

「だーめー！！にーちゃんはあたしと一緒に帰るのー！」

「3人で一緒に帰るっていう選択肢もあると思うんだけど…それもだめなの？」

「だめだめだめー！！にーちゃんも何か言ってよ！」

「別に俺は構わないけど…何がそんなに嫌なんだ？」

そんな一幕を経て、ぐみは絵本バージョンで俺の制服の中に潜りこんでしまった。

仕方がないから、そのまま春風と下駄箱に向かって今に至るというわけだ。

しかしそこはギャグみたいにモテる女、春風 薫さんである。

俺がリアクションに困っている間にも、慣れた動作で手紙（ていうかぶつちやけラブレターだろう）を取り出し、慣れた運動でゴミ箱に向かい、慣れた動きで…って！

「ちよつと待てエエエー！！」

流れるような動作でラブレターを捨てやがった！

誰にでも優しいキャラはどこ行った！

「うん？どうかしたの緑野くん」

さっきまでと変わらない調子で、そう返す春風。

「どうって…今の、は…」

「あはは。心配してくれるの？優しいね、ありがとー。でも大丈夫

だよ」

…いや、前言撤回だ。

春風の様子がおかしい…どこを見ているのかわからない。

まるで、俺ではない誰かを見るような、今ではない昔を見るような。

「これは罰で、わたしが背負うべき罪なんだよ。だからへいき。」
今度こそ、わたしがたすけるからね。

輝きを失った焦点の合わない目に俺ではない誰かをうつした春風は、それだけ言って帰ってしまった。

まさかあれはいじめの一環なのかと思い、捨てられた手紙を開封してみてすぐ後悔した。

「…なんか電波全開だったねあの人」

「そーいうことはせめて本人の前で言え」

「言うのはいいんだ…」

捨てられた手紙の執筆者に、勝手に読んだことを心の中で謝りつつ、いつの間にか人間フォームになっていたぐみに発言の訂正を促す。

この瞬間を物語の始まりだとするなら、それはあまりにも唐突な始まりだった。

「へえー。この子が淋漓の言ってた新しい妹さん？」「緑野 伶俐と申します。以後お見知りおきを」

春風がラブレターをダストシュートした日の3日後、教室では研修を終えた伶俐が黒兎と挨拶をしていた。伶俐は相変わらず感情の読めない無表情で、黒兎も相変わらず小学生にしか見えなかった。

「いつもの小学生扱いはともかく、相変わらずって単語が出るほど離れてないでしょ」

「そうなんだけど、なんか久しぶりな感じがするんだよな」

まあ2話しか間は空いてないのだけれど、いつそ懐かしくさえ思う。

「おはよー黒兎くん緑野くん！あつ、この子が伶俐ちゃん？初めまして、春風です！」

黒兎と談笑していると、いつもの春風が会話に参戦してきた。

しかし3日前の春風を見て以来、俺にはその普段通りな様子さえ異常に見えてくる。

「…初めまして、伶俐です。失礼ですが、マスターとはどういったご関係ですか？」

「本当に失礼だな！」

うちの妹陣は悪くも悪しくも遠慮が無さすぎる。

ただ、その遠慮の無さのおかげで春風が質問攻めにあっているの
で、この隙に黒兎に、春風の裏の顔…3日前の言動について聞いてみる。家業柄そうなのか、黒兎は学校の噂にやたら詳しいのだ。

「ああ、その話なら結構有名だよ。少なくとも、告白のために軽く下調べするだけで耳に入るくらいには」

「…じゃああのラブレターはなんだったんだ？」

嫌いだとわかった上で送るなんて、やっぱりいじめ…？

「いやほら、世の中には少し普通じゃない趣味を持つてる人がいるから。そういう人たちが、春風さんが自分の書いた手紙を捨てるのを見て喜ぶための手紙だったんだと思うよ」

「……………」

やっぱりいじめじゃないだろうか。

「だからたぶん、そのあと勝手に手紙を見た淋漓も支持率が上がつてると思うよ」

「……………」

やっぱりいじめじゃねーか。

「いきなりそんなこと聞いてどうしたの？まさかとは思っけど、淋
漓も告白するつもりなの？」

「いや、そーいうわけじゃねーけど…」

そこから先は続けられなかった。九十九神シスターズに飛び掛か
られたからである。

「にーちゃん！今のはどーいうこと！？ちょっと聞き捨てならない
よ！」

「彼女の優れた点と私たち姉妹の劣っている点を具体的に教えてく
ださい。1週間もあればマスターにご満足して頂ける仕上がりにな
ってみせますから」

「何でもかんでも恋愛に結びつけるな！俺はそういう安易な発想が
大嫌いだ！」

結局、飛び掛かってきた愚妹どもを引き剥がす作業のせいで黒兎
との会話は打ち止めになった。

妹×2を引き剥がすのに今までの倍以上時間を消費したことを除
けば、実にいつも通りな朝だった。

「しかしマスター。真面目な話、彼女は止めておいたほうがいいで
す」

「うん、あたしも怜悧とおんなじ考えだよ」

「真面目であれ不真面目であれ、その話はもう終わっただろうが。
今さら蒸し返すな」

昼休み。

新たに加わった怜悧によりぐみの盗み食いは阻止され、久々に落
ち着いた食事ができる（ぐみが生まれて以来だ）と思って迎え
た昼休みは、怜悧のそんな一言から始まった。

「まあそう言わずに聞いてください。彼女は人間ですが、どうい
うわけか微かに妖気を感じるのです」

「それ…！妖怪変化の前兆じゃないか！」

伶俐のセリフに、弾かれたように黒兎が反応する。

黒兎は陰陽師の家系で、その仕事は妖怪変化を代表とする怪異関連の事故の対処だ（他にも怪異が起こした事件を解決する仕事があるが、同じ陰陽師でも事件と事故では、いわば部署が違っらしい）。

「しっかしいくら伶俐が怪異だからって、素人に先越されんのはプロとしてどうなんだよ」

「う…そうなんだけど…。っそれより、早く対処してこないと！」

「ち…逃げたか」

まあ、確かに早く対処しないとまずいのだが。

妖怪変化って、深みにはまると滅するしか（説明するまでもないと思うが、殺すということだ）なくなるらしいし。

黒兎の対処を待つこと3分、一仕事終えたみたいな顔をして、黒兎が戻ってきた。

「よー、おかえり。どうだった？」

「何事もなく終わったよ。春風さんも協力的だったし」

達成感に満ちた黒兎の報告に伶俐が首を傾げる。

「…その口ぶりだと、対処に非協力的な人がいるみたいに聞こえます」

「うん、たまにあるんだよ。自分が怪異になりかかっているっていうことが受け入れられなくて、結果的に怪異化が加速しちゃうパターンが」

「そうなのですか？」

「ジジツから目を反らしたダイショーってことだね！」

ぐみがもつともらしい横やりを入れる。

構ってほしかったのか？

「まあ厳しい言い方をするとそうなるのかな。他にも、対処後に悪化するパターンとかもあるんだよ」

「え、マジで？」

それは知らなかった…というより、それは対処が甘かったってことじゃないのか？

「いや、このパターンは対処の出来に関係なく、対処をしたことが悪化の原因になるんだよ」

「えー？対処って、大丈夫な状態にすることじゃないの？」

「そうなんだけど、手術は大きかりなほど当人への負担が大きいのと同じだよ。妖怪変化っていうのは、人間が暗い感情を溜め込んだときに、その感情を苗床に怪異化することを言うんだけど、これに対処を施すと、抱えた感情が大きいほど心に負担がかかるんだ」

だいぶややこしい話になってきたせいか、ぐみはすでに舟を漕いでいる。

伶俐はそれとは対照的に早く続きをと黒兎を急かす。…兄弟は年下のほうがしっかりした子になりやすいと聞くけど、ここまで顕著なものなのか？

「いくら対処を施しても、一度芽生えた感情は無かったことにはできない。ちょっとしたきっかけで再燃し、対処を施されて弱った心を一飲みにしてしまう」

結局は、ぐみちゃんの言った通りなのかもね——と。

黒兎は怪談を締めくくるように、妖しく笑ってそう言った。

結局、その日の昼休みの話題は、黒兎の妖怪豆知識に終始した。

まあ、これから先は賢明な読者の皆さまの予想通りだ。

もうバレていると思うので先に言ってしまうが、あの後春風は闇に飲まれ、俺たちは春風が助かるために頑張った。

オチの分かりきった物語を読むのは退屈だろうが、先に述べた通りこの話は喜劇だ。

意気込んで風車に挑む空回りな道化を笑ってくれれば重畳だ。

では、物語を再開しよう。

黒兎と妖怪雑学を語り合い、家に帰ってから初めて兄妹3人で買い物に行つたあの日から。

「…あのなぐみ、お前子どもの頃ならまだしもこの歳になつてまで兄の腕にぶら下がるな。重いし歩きにくい」

「…え？だめなのですか？」

「ちよつと待て伶俐、何でお前まで空いてるほうの腕を猛禽類のような目で狙っているんだ」

日もすっかり落ち、太陽に変わつて街灯が道を照らす時間。

なぜこんな時間に妹を両腕にぶら下げるといふ一風変わったスポ根な場面が出来上がっているのかといえば、ジークが倒れたからだ。

ジークはTシャツの九十九神で、その能力《過剰な重ね着》（

『ルビはアンダーウェアだ』と母さんが得意げに言っていた。ぐみがああなったのは確実に母さんのせいだ）は、着用者として登録した人のダメージを肩代わりするというものだが、家に帰ったらそのジークが文字通りボロ雑巾と化していた。

俺たちはそんな酷い怪我を負う機会はなかったので父さんか母さんか、あるいは両親のダメージを肩代わりした結果なのだろう（あまりのダメージ量に、ジークが人の姿を保てなくなっていた。…俺が車に轢かれたときでもこれほどではなかった）。

大慌てで陰陽師に一報を入れた（存在が危うくなった怪異をつなぎ止めるのも彼らの仕事だ）俺たちは、そんな理由から自力で食料を調達しなくてはならなくなったのだ。

とはいえこのパーティーには料理ができる奴がいなかったので、予算の都合からコンビ二弁当を買うことになったというわけだ。

「…しかしジークさん、あんなときでも家の心配をするんですね」

「運ばれる直前まで、洗剤の分量とかご飯代のある場所とかをにーちゃんに教えてたもんねえ…」

「本当にどこまでお母さんなんだよ…」

そんなことを道々話しながら歩いていたら、突然何かが降ってきた。

「うわぁっ!？」

「……………っ!！」

「んなっ…何だぁ!？」

地面はコンクリートで舗装されていたし、それは地面を砕くほどの勢いで降ってきたというわけでもない。

視界は良好だし、街灯だっについている…だから。
だからそれが何なのかを、俺は視認できていた。

しかし、それが何なのかを理解する前に、それは俺に狙いを定めて襲いかかる。

「——ッ!！」

俺が無傷で絶句できたのは秘めた力が解放されて超人的な回避をしたからとかではなく、ぐみが俺に飛び付いて横っ飛びしてくれたからだ。

情けねー兄貴である。

「何こいつ…災害型怪異!？」

「姉さん、落ち着いてよく見てください。でないと私は姉さんをダメな子呼ばわりしなくてはなりません」

「…なんか妹からの風あたりが厳しい気がするよう…」

「この不安定な妖気、闇を纏った人のような姿…妖怪変化の症状と酷似しています。つまり…」

「あー、なるほど!この人春風さんか!」

やっぱり、と。

俺は、最初にそう思ってしまった。

こいつの目が、下駄箱のところで見た春風の目によく似ていたから。

どこを見ているのか分からない——目。

「何でその結論に達したのか興味の尽きないところですが、つまりこれは元人間であり、そして……」

「何でつてそりゃ、あれだけ露骨に伏線張ってたら誰でもわかるよ」

「お前そんな根拠どころか違和感とさえ言えないようなことであいつの正体を断定したのか!？」

俺の同意を返せ!

それとも妹のスペックの低さを考慮しなかった俺が悪いのだろうか……。

余談だが、この楽しいおしゃべりには妖怪変化も暴力棒で参加している。

堕ちたばかりなせいで体が馴染んでないのだろう、実はそんなに速くない妖怪変化の攻撃は、真人間の没個性な俺でも避けられる。

「そんなバカな根拠で人の話を折らないでくださいダメ姉さん」「ダメ姉さん!?! 伶俐今あたしのことダメ姉さんって言った!?!」

「そんなことはどうでもいいんです。重要なのは、マスターが協力してくだされば、この……人?を人間に戻すことができるということです」

「……………」

は?

「俺が！？何だそのラノベ展開！？」

「事実は小説より奇なり、ということですよ」

「ということですよーねーよー！せめて納得のいく説明をしろ！」

「この場にいる人間がマスターだけだからです」

この妖怪変化を助けるにあたって、心の能力が必要なのです――と。

怜悯は、その理由を話しはじめた。

「ざっくり説明しますと、私の能力でマスターをあの……人でいいですよ、あの人の心の中に送り込むことができます。そうしたらあとは、妖怪変化の原因を直に処理することが可能です」

「マジでか！？」

「マジです」

対妖怪変化を生業とする黒兎から見たら反則みたいな能力だ。

と、そのとき。

「う……うう……っ！」

「お！？喋った！春風さんが喋ったぞにーちゃん！」

「だからダメ姉さん、漫画脳な根拠であの人を春風さんと断定しないでくだ……」

「ああああアアアああアアア！！」

「ついけません……闇が馴染んできています。このままでは陰陽師に通報して滅してもらうしかなくなります！マスター！」

「おう、任せろ！」

こいつが春風であれ見知らぬ誰かであれ、助けられるやつを見捨てるつもりはさすがにない。心の中……行ってやろうじゃないか！

「ではまず、マスターはラインを繋いでください！」

「……………へ？」

ラインって何？

「心には互いを紡ぐ能力があるでしょう？あれであの人の心を繋いでください！」

「いやいやいや無茶を言うなアアア！！心にそういう能力があるとは言っても使い方がわかんねーんだよ！！」

閃きつて自分の意思で起こせる現象じゃねーだろ？それと同じだよ！

「だって自分の心でしょー！？にーちゃん何で使えないのさー！」

「うわっ！？さっきより速ええ！」

右、左、また右。

襲ってくる妖怪変化の攻撃が鋭さを増し、ラインどころか会話さえ難しくなってきた…！

「《本の背表紙つて地味に痛い》！」

妖怪変化と俺の間に入り、技名を叫んで一閃する。

しかししよせん本の背表紙で殴った程度のダメージしかないので、相手は全く怯まない。

妖怪変化がぐみとバトルパートに入り、ここぞとばかりに声をあげる伶俐。

「今ですマスター！ラインを繋いでください！」

「だから無理だって！繋ぎかたがわかんねーんだよ！！人間は訓練しなきゃ何もできねーんだ！！生まれた直後に二足歩行して白米を食す赤ん坊がいるか！？」

俺は寡聞にして聞いたことねーぞそんな気色悪い赤ん坊！

「けど、春風さんは友達でしょう？一度ラインを繋いだことがある相手なら、もう一度同じことをすれば…」

「あいつが春風かどうかなんてわからないだろうが！」

ぐみのギャグのせいだなあなあになつてたけど、あいつが春風だと決定付けるものは何もないからな！？

「大体友達っつーのも春風が勝手に言ってるだけ…」

…ん？

ちょっと待て…一度繋いだことが、ある？

要するにラインってのは、相手との繋がりのことなのか？
そういうことなら…そしてあいつが春風なら。

ど素人の俺にも、ラインを繋げる方法があるかもしれない！

「…失敗しても、がっかりするなよ？」

「私と姉さんは、どんなマスターも大好きです」

「…例えば、実は人殺しな過去を持っていたら？」

「それでも大好きです」

「そこは嫌いになってもらいたいんだが…」

リスキーな妹だ。

そして、そういうリスキーな妹の兄であれたことは、とても幸せだ。

「それにマスターがそんな殺伐とした人なら、私のダメ姉さんはあんなにふわふわしていません」

「…そーだな」

その通りだ。

俺は大きく息を吸い込み、自分の考えが間違っていないを考える。

重度のお人好しにして、極度のおせっかい。

春風 薫と繋がる方法はこれで間違っていないかを考えて――

吸い込んだ息を、喉を震わせるために吐き出す。

力強く。

「春風！！今困ってたんだ、助けてくれ！！」

瞬間。

俺とあいつの間に、光が弾けた。

「…ありがとうございますマスター。ラインを確保致しました。次は私の番ですね」

伶俐の髪が踊りだす。

それは風が吹き上げるように舞い、やがては光と戯れる。

光の中に1と0の羅列が浮かぶ頃、輝きが強さを増して視界を塗りつづす。

「——ゲーム、スタート」

物語がいつ始まったかはわからない。

けれど、俺が事件と呼んだ喜劇は、この瞬間に始まった。

ワールドマップへウィンフィール

あまりの眩さに両目を覆う。

光の世界に生きているはずの人間が輝きに目を閉ざすのなら、闇の世界に生きる怪異にも目をこらす暗闇があるのかな、なんて益体のないことを考えていたら、視界を包む光が弱まってきたのでそれに合わせて少しずつ目をあける。

そこには、どこまでも続くただっ広い野原があった。

「…なんだこりゃあ…。ここが春風の心の中なのか？」

『いえ、厳密には少し違います』

俺の疑問に、大気が震えて答える。

それは怜悧の声だったけれど、当の本人がどこにも見当たらない。「怜悧か？どこにいるんだ？それにここが春風の心じゃないって…じゃあここはどこだ？」

ここは春風の心じゃない…でも。

あの妖怪変化は、間違いなく春風だった。あんな状態になってまで俺の「助けてくれ」発言を真に受けて、力になろうとする馬鹿なんて——春風しかない。

自分を省みないというか何というか…自分の命さえ、平気で他人のために使ってしまうやつなんだ。

この分だと、あるいは自分のことを殺そうとしたやつの特護をしたという噂も嘘じゃないのかもしれない。

『はい、ここは春風さんとマスターの命を基盤に春風さんの心で創り上げた私の能力空間です』

「人の命をなんだと思っているんだ!!」

俺の命を勝手に使うなや! いや春風のもだけど!

あいつのことも言えない…俺が他人のために命を使うやつになってしまった。

『私の能力は本来、対象を私の中に捕らえるだけの能力です。鏡の怪異に多い能力ですね。そしてこの能力は、応用すればこの通り、人を心の中に侵入させることが出来ます』

そんな怜悯の説明に続くように、空間に淡く輝く文字が浮かび上がる。

脱出条件

ラスボスの撃破

死亡条件

敵に殺される

「死亡条件って何だアアア!! え!? 敵って何!? しかも殺しにくるの!? おまけにラスボスってお前、これじゃあただのRPGじゃねーか!」

『はい、これはマスターを主人公としたRPGです』

まさかの正解だった!

「いや待てエエエ!! 俺は喧嘩さえしたことがねーんだぞ! それがいきなりRPGでファンタジーな冒険できるワケねーだろ! サファリパークにハムスターを放り出したようなもんだよ!」

『大丈夫です。戦闘時は私のプログラムを使用すればマスターの動きを最適化しますので、通常の3倍のステータスで行動できます』

…ロボットアニメの金字塔で有名なワードだけど、どこで覚えたんだ?

俺は教えてねーぞ。

「ちなみに、そのプログラムってどうやって使うんだ?」

『それは…』

『はいはい! あたしあたし! あたしがコマンド入力すると発動するってゆってたよー!』

空の一部を切り取ったような窓から、ぐみが笑顔を覗かせながら、

そんな風にはしゃいでいた。

「デッドエンド確定じゃねーか！ー！ご愛読ありがとうございましたー！」

『何であたしがプレイヤーだとデッドエンドなの！？大丈夫だよ、俺たちの冒険はこれからだー！だよ！』

「それただの打ち切りイイ！ー！おい伶俐大丈夫なのかこれ！？俺生きて帰れんのか！？」

『正直私も不安なのですが、私はゲーム機本体ですのでプレイヤーにはなれません。他に誰もいないので、申し訳ありませんが我慢してください』

『うう……にーちゃんと妹がいじめるよう……』

俺の後ろの大きな窓（おそらく伶俐改めPSPの画面なのだろう）から見えるぐみがいじけた。

それは置いといて、何故かさつきから体が微動だにしないんだけど……これどーいうこと？

『……申し訳ありません。マスターは今、いわばフリーズした状態なのです。心の中に別の心が侵入してくることは受け入れ難いものらしく、今現在もすごい力で拒絶されています。例えて言うなら、ここは台風の暴風域のようなもので、この空間に存在し続けること自体が難しいんです』

「……………」

よく分からんけど、めっちゃ嫌われているらしいということは分かった。

人の心に不法侵入しているのだから当たり前なのだけれど、軽くショックだ……。

『なのでマスターの命は基盤に使用し、心は私……つまりゲーム機本体のプログラムと癒着させることでマスターの存在をこの世界に縛り、外部入力でなら動けるように設定しました』

「なるほどね……」

うまい例えは見つからないけど、話を聞く限りかなり無理矢理侵

入っているらしい。

「話をまとめると、この世界はつまりお前がロードしたゲームで、俺が主人公、ぐみがプレイヤー。メインの素材は春風の心だから、俺たちがゲームをクリアすれば春風は元に戻る…そういうことだな？」

『その通りです』

ふむ。そしてプレイヤーの協力無しにはクリアできないと。もどかしいな…RPGの主人公はこんな気分なのだろうか。

となると、今やるべきことはぐみの機嫌をとってゲームをやってもらうことが。

さてどうするかと考え始めた頃。

↓てきがあらわれた！

「はアアア！？何でエエエ！？まだ一步も動いてねーぞ！？」

『まあ、便宜上ゲームに例えましたが、ここは春風さんの心の中ですからね。体内に雑菌が侵入すれば、白血球が群がるのは当然です』

「俺は雑菌ですかそうですか！！」

この妹は兄が嫌いなのだろうか。

泣き出したい衝動を抑え、ぐみに協力を要請する。

「ぐみイイイ！！にーちゃんがピンチだ！助けてくれエエエ！！」

情けないとか気にならない、こっちは切実に命が危ないんだ！いや正確には心が危ないか？どっちも変わらん分らないなら一度誰かに襲われてみる！

『もう、いじめない？』

若干幼児退行した様子のぐみが、涙目で聞いてくる。

俺としては襲われる恐怖でいっぱいいっぱいなので、ぐみの発言をよく聞きもしないで全肯定する！

「ああいじめない！だから助けてくれ！」

『…ぐみのこと、あいしてる？』

「あああいしてる！だから助けてくれ！」

『…全部終わったら、ちゅーしてくれる？』

「ああちゅーしてやる！だから助け…」

…あれ？何か今、俺結構アウトなこと言っちゃったような？

『わーい！えへへっ、約束だよ！』

切羽詰まっていたから自分が何を言ったか覚えてないが、どうやらぐみの機嫌はなおったようだ。代わりに倫理観を失った気がするが、たぶん気のせいだろう。

『…マスター、私にはして頂けないのですか？』

「へ？何を？」

『とばけないでください。私だって春風さん救出に貢献しているのに、姉さんにだけご褒美があるなんてずるいです。対等の報酬を要求します』

「報酬って…」

まあ覚えてないとはいえ、ぐみには何かご褒美を約束してしまったらしいし、あの春風さえ自分の親切に見返りを求めるんだ。

報酬の要求は正当な権利か。

「いいよ、わかった。対等って言ってたけど、ぐみと同じ内容でいいか？」

約束の中身を覚えてないから、何が対等か分からないし。

『いえむしろそれをお願いします。絶対ですよ約束ですよ』

「わかったって」

どんだけ念を押すんだよ。反故にされる恐れのある願いつてわけでもなかるうに。

とにかく、何故か法律を敵に回した気がするけどぐみが復帰した。これで戦える！

「……………」

↓ 昆布大好きAがあらわれた！

↓ 昆布大好きBがあらわれた！

『わー、かーいいねー。デフォルメ春風さんが美味しそうに昆布食べてるー!』

「戦えるかアアア!!」

無理無理無理! 俺にはあんな幸せそうな顔で昆布を楽しむデフォルメ春風を俺は攻撃できない!

『ふっふっふっ、何も知らずに呑気なものよう…。あたしのーちゃんの力、とくと見よー!』

「見せなくていいよ! 伶俐、お前からも何か言ってやってくれ!」

『マスターは姉さんだけのものじゃありません』

「そこじゃね…」

↓たたかう

まほう

どろく

にげる

「ってまさかのコマンドバトル!？」

『? だって、コマンド入力しないとプログラム発動しないし』

『姉さんのレベルに合わせて、私が簡略化したんです』

『…にいちやーん、伶俐がいじめるよう…』

「そんなことより、まさかこれ選ばれたコマンドの行動以外出来ないとか、そーいうタイプか!？」

ぐみはけっこう好戦的な性格なので、もしそうなら俺はあいつらと戦わされるはめになる…!

『いえ、最適化されないというだけで、他の行動をとることも可能ですよ』

と、伶俐が言い終わった瞬間、俺はダッシュで戦線離脱を図る! 強いとか弱いとかじゃない、あれを攻撃できるやつは人間じゃない!!

↓てきにまわりこまれた！

「って思いの他速ええ！」

こうなったら、ぐみに頼み込んで『にげる』コマンドを選んでもらうしかない！

『…………ヤダ』

くっ、まあいいそこは予想の範囲内だ！
ここからはお菓子を餌に交渉を進めて…

『…そんなことってゆった』

「……………は？」

『あたしがさつき怜悧にいじめられたとき、にーちゃん』そんなことより』ってゆった！ぐみのこといじめないって言ってたのに、』
そんなことより』ってゆった！』

めんどくせエエエエエ！

そついやエンカウントしたときにそんなこと言ったけど…』そんなことより』もいじめたうちに入るのか！？

『……………』

窓から見えるのは、涙目で俺をニラむぐみの顔。

どうやら、いじめたうちに入るらしい。

「分かったよ、悪かった。お詫びに何か一つ、言うこと聞いてやるよ」

『…ホント？』

「ああ、ホントホント」

俺がそう言つと、ぐみは涙を拭ってニッコリと笑う。

よし…ひとまず機嫌は直ったみたいだ。これでちゃんと交渉ができる！

↓たたかう っピッ

まほう

どうぐ

にげる

『…えへへ。じゃあね、ぐみの選んだコマンドに絶対服従で!』

「ぎゃあああああ!」

やられたアア!

あいつまさかこれを狙っていたのか!?

↓昆布大好きAは美味しそうに昆布を食べている!

↓昆布大好きBは幸せそうに昆布を楽しんでいる!

「嘘だろ!俺これからあんな無垢なやつを攻撃するの!?マジで!

」?

『いけーっにーちゃん!』

↓りんりのこうげき!

——がつつ!

「生々しい!殴った感触がすごく生々しい!」

↓昆布大好きBに43のダメージ!

↓昆布大好きBをたおした!

「昆布大好きBイイ!」

罪悪感で死ねそうだ!

↓昆布大好きAはげんじつにおいつけないでいる!

「反応がリアルなんだけど!これ端から見たら俺離見沢症候群の発症者じゃねーか!」

『ひあーっいごー!』

↓たたかう っピッ

まほう

どうぐ

にげる

「あれを見た上でのたたかうコマンド！？お前は鬼か！！」

『違うよー！あたしは、九十九神だよっ！』

「嘘だツツツツ！！！！」

『またひぐらしですかマスター』

↓ 昆布大好きAは昆布大好きBのからだをゆすった！

↓ へんじがない…ただのしかばねのようだ。

「やめるオオオ！！そんなリアルな反応をするなアアア！！殺人鬼になったような錯覚を覚えるだろうが！！」

↓ りんりのこうげき！

——がつんっ！

↓ クリティカルヒット！

昆布大好きAに57のダメージ！

↓ 昆布大好きAをたおした！

「昆布大好きAエエエ！！」

『やった勝ったー！！』

「あれに勝って嬉しいかチクショー！」

昆布大好き（ちなみに敵の名前だ）たちを殴った感触が生々しく両手にまわりつく。

ゲームをクリアするまで、人間でいられる自信がなくなってきた…。

「怜悯…あれは本当に俺に追い出しにきた白血球なのか…？」

『そうは言っても春風さんの感情ですからね、彼女たちは。戦闘の概念自体がないのかもしれない』

「ちよつと待てエエエ！！え！？あれ春風の感情！？」

じゃあ俺は、春風の昆布が大好きという感情を殺したということか…！？

シヤレにならねーぞそれ！

『大丈夫です。感情はそんなに簡単には死にません。心のない私たち怪異にさえあるものですし、眠ることはあっても死ぬことはないです』

「お前が言つと信憑性が薄れるな…」
いつも無表情だし。

けどまあ、妹の言うことを疑う兄ではない。伶俐の話を信じよう。
…べ、別にあの2人は眠っているだけだと信じたいわけじゃないからな！

『おー！やったー！アイテムだー！経験値少なかったけど、アイテムくれたから許す！』

「許す許さないはお前が決めることじゃねーだろ」

どちらかといえば被害者が加害者に対して言うセリフだ。

「じゃあ、先を急ごうぜ。あんなのと戦ってたら心がいくつあつても足らねーよ」

『ふう…我が兄ながら情けないにーちゃんだぜ』

「いっぺん無実の人間を虐殺してから言いやがれ」

『本当は一度でもやってはいけませんけれどね』

「お前が俺を放り込んだんでしようが！」

春風を戻すためには仕方がなかったとはいえ、やつぱり不満は拭えない。だって、あいつらに罪はなかったじゃないか！

『あ！』

「あ？」

↓てきがあらわれた！

「出たアアアアア！！」

『いよおっし！かかつてこーい！』

「逃げろお前らアアア！！殺されるぞー！！」

↓お人好しAがあらわれた！
↓お人好しBがあらわれた！

「これ普通に春風じゃねーか！服装がファンタジー仕様なこと以外何の違和感もなく春風だよ！」

『う…確かにこれを攻撃するのは気が引けるねえ…』

「そうだろ！？悪いことは言わねえ、今すぐ逃げよう！」

よかった…！ぐみにも知り合いへの攻撃を躊躇う程度の良識が残っていたことも含めて！

↓たたかう っピッ

まほう

どうぐ

にげる

『悲しいけど…これ、戦争なのよね』

「こんな場面でお前が言うなアアア！！」

さっきまでの俺の感動を返せ！

↓お人好しAはニコニコと笑っている！

↓お人好しBは興味津々のようだ！

↓りんりのこうげき！

——がつっ！

↓お人好しAに45のダメージ！

↓お人好しAをたおした！

「お人好しAエエエ！！」

↓お人好しBのひょうじょうがきょうふにそまる！

ちきしょう…またなのか！？また俺は同じ過ちを繰り返すのかよ！運命の袋小路からは逃れられないっていうのか！？

『マスター、ひぐらしネタ使いすぎじゃないですか？』

うるさいだまれ何でひぐらし知ってんだよ。

『マスターが私を机の上に放置して熟読していたマンガですから』

「……………」

『姉さんがいないときとかは、たまに音読もしてましたよね』

「今言わなくてもいいだろ!？」

↓たたかう へピッ

まほう

どうぐ

にげる

『…あたし以外の書物を音読した兄ちゃんが悪いんだよ』

「何で音読が浮気みたいな扱いになってんの!？」

書物（絵本）の九十九神だからか!？書物（絵本）の九十九神の世界観では音読が浮気なのか!誰が妹と付き合うかボケエエエ!!

↓お人好しBはなにかをけつした!

↓お人好しBはほほえみ、りょううでをひろげた!

「ん?何だありゃあ…」

『もしやカウンター攻撃では…?マスター、気をつけてください』

「カウンター…。ははっ、そうか、ようやく戦う気になってくれたか…」

『相手に攻撃されて安心しないでください』

「そりや安心もするだろ。ファンタジー春風が戦ってくれるおかげで、俺の罪悪感が和らぐんだ」

ただ、なぜだろう…ひぐらしファンの第六感が警報を打ち鳴らしている…。

↓りんりのこうげき!

↓カウンターはつどう!

「いよっしゃキターー！」

『攻撃されて喜ばないでよ…』

↓お人好しBはやさしくほほえみセリフをはなった！

「へ…セリフ？」

お人好しBは、俺の攻撃を避けようとせず、両腕を広げたまま優しい微笑みを俺に向けて

『だいじょうぶ。わたしはあなたをいじめないよ』

——がつつ。

「アレンジ入ってるううう！！」

絶望した！

あんなに優しい女子を殴って開口一番が「アレンジ」な自分に絶望した！

てか春風もひぐらし知ってるのかな…元に戻ったら聞いてみよう。

↓お人好しBに49のダメージ！

↓お人好しBをたおした！

「もう…涙も枯れ果てたぜ」

『にーちゃん、ちよつと見ないうちに影が似合うようになったねー』
テキトーなことを言うな。

誰のせいだと思ってやがる。

『んー、やっぱり経験値が少ないな…。あと何体倒せばレベル上がるんだろ』

「ちよつと待て！お前まさか俺のレベルなんかのために、無垢で無実な春風を無慈悲にも殺すつもりか！？」

『だって、レベル低いとあとの戦闘がめんどいし…』

RPGってそういうものだと思うんだけど…とか。

「いやっ…低レベルクリアっっーチャレンジもあるだろう!？」

『めんどいからヤダー』

「それ言ったら、あいつらだってたいした経験値くれないんだろ!？
？だったら先に進んでそこでレベル上げすれば…」

↓てきがあらわれた！

「ぐぎやアアアアア!!」

『なんだか、マスターのほうがモンスターっぽくなってきましたね』

「ほっとけチキショー!!」

とか。

そんな感じで一通り修羅の道を歩いた後、俺たちは最初の町に訪れた。

町の名前は、ペルソナタウン。

最初の町へペルソナタウンへ ↓ 異常の中の異変

『いやあーでも面白いよねえー…この町の人って、1人残らず春風さんなんだよ!』

「仮面の町…か」

『春風さんの表層…私たちもよく知る、普段の春風さんの部分ですね』

『無視しないでよー!泣いちゃうよー!?!』

「ネーミングがあざといつつーか、露骨だよな。」

『そうですね』

『あたし的には、2人の無視のほうが露骨だよ…』

町に入り、教会に行つて懺悔をした後、春風だらけの町でなぜかテンションがうなぎ登りのぐみをなだめた後、宿屋で一息ついたところで、俺と怜悧はそんなことを話した。

俺たちと話していた春風は、どこまでが建前だったのだろう…。

そんなことを勝手に考え、勝手にテンションを下げているところだった。

『まーそんなこと考えても仕方ないよ!それより、装備を整えに行きよ!ここから先の敵も攻撃してこないとも限らないし!』

「それもそうだが…」

このまま戦い続けていたら、いつか本当に人間味を失いそうで怖い。

さつきはギャグで流されたけど、無抵抗の敵…敵でさえない相手を一方的に傷付けるのは、かなり気分が悪い。

だからだろう、心が少しずつ鈍くなっている。

何かを感じることを——放棄しつつある。

『…あたしのせい?』

画面越しに、不安そうな瞳を向けてくるぐみ。心配してくれているのか、一応は自分が悪いと思っっているのか。なんて、言うまでも

なく両方だろう。

「いや…お前は、まあそんなに悪くない。俺が、お前の選んだコマンドに従わなければよかったんだから」

あのコマンドは、選んだ行動が最適化されるというだけで、選んだコマンド以外の行動ができなくなるわけじゃない。

戦闘中は、基本的には自由なのだ。

「だったら何で攻撃したの？」

「あの戦闘においてマスターの行動が、最適化された《たたかう》コマンドでも後攻だったことを覚えていますか？」

「えーと…そうだったかも」

「つまり、素早さにおいて絶対的にこちらが遅れをとっているのです、素早さだけに。最適化されたコマンドでそれなのに、選ばれていない《にげる》コマンドの行動をしても…」

逃げられない。

戦闘は終わらない。

「だから弱らせたなら逃げてくれるかもって思ったんだが、そうすると今度は俺があいつらより圧倒的に強い。相対的に、あいつらが弱いとも言えるが…」

「その両方でしょうね。彼女らは、戦闘を前提としていなかったようですし…」

「…そうだったんだ…わかったよ」

「？わかったって何が…」

「次の戦闘からは…《まほう》コマンドを選ぶことにする！」

「本当に何が『わかった』んだ！？」

「だって《たたかう》だとにーちゃんが強すぎるんだよね？だったら他のコマンドを選ばにーちゃんは弱体化して、あの子たちが生き残れるかもしれない」

「戦わずに逃げるという選択肢はないんだな…」

意地でも戦うつもりか。

「それでもし相手が逃げなかったら《たたかう》でいいよねっ！」

「戦わずに逃げろ！！俺がどうなってもいいのか！！」

人類史上なかなか類を見ない、自分を人質に要求を通すというチャレンジをするRPGの主人公だった。

いや俺なんだけど。

さすがにこれは冗談だが（他人事みたいに『お好きなように』と言われて終わりだろう）、彼女らと戦いたくないのは本気の本音だ。ここはゼリー辺りをエサに『にーちゃんが人質じゃ仕方ないね…』「要求が通ったと!？」する必要はなかったらしい。

うちの妹は春風の次くらいに優しい心の持ち主だった。怪異だから簡易タイプの心だけど。

俺を氣遣える心があるなら何であの時たかうのコマンドを選んだんだ…。

しばらくネチネチと恨むからな。

『まあでも、装備は整えておこうよ。さっきも言ったけど、会う敵みんながあの子たちみたいに大人しいわけじゃないだろうし』

「確かにそうだな」

いくら何でもボスまであんなんじゃないやダメだろう。

ゲーム的っつーか、人間的に。

優しさ以外の感情が無いようでは、それはもう感情自体が無いの
と大差ない。

『さすがに言い過ぎだと思いますが、概ねその通りだと私も思います』

『話はまとまったね！それじゃまず武器屋に行こっか！』

「戦う気満々か！」

効果音が《がつんっ！》から《ざくっ！》に変わることになるみたいだ。

『もちろん防具も買うよー！レベル上げのときにいっぱいお金もたまったし！』

「……………」

俺はこれからどうやら、再び自分の良心と戦わねばならぬらしい。

『いやー買った買った！バリバリ買った！アクセサリまで買ったやつたよー！』

「代わりに俺の良識がごりごりすり減ったけどなあ！」

諸君らに伝わっているだろうか…抵抗も対抗も出来ずに、無垢だったあいつらを一方的にぶちのめしてぶんどった金で買い物をするこの罪悪感が。

かつあげどころか傷害強盗だ。

『装備品からしてそんな感じですしね…。姉さん、何でこの装備を選んだんですか？』

『え？かつこよくない？』

「……………」

武器↓釘バット

頭防具↓ニット帽

足防具↓スニーカー

アクセサリ1↓グラス

アクセサリ2↓マスク

……………。

「ただの不審者キットじゃねーかアアア！！」

『コーディネートに悪意を感じますね…。姉さん、分かっててやってません？』

『はてさてナンノコトヤラ？』

「……………」

ぜってーわざとだ。

何か日頃の恨み的なオーラを感じるけど、心当たりがない。

『あとは道具屋に行って終わりだね』

「嫌だ」

『もー！まだごーとーしょーがいがどーとか言ってるの！？これは

ただのRPGなんだよ!」

「無論あいつらからぶんどったお金を使うのも嫌だけど、何よりアイテムを買うのが嫌なんだよ」

「しかし、マスターは現在回復系の魔法を習得していません。舞台が敵との連戦が前提のRPGである以上、回復アイテムはそれなりに所持しておくべきかと」

「その回復アイテムが嫌なんだろうが!」

皆さんは覚えているだろうか…。昆布大好きと最初に戦ったとき、彼女らがアイテムを落としていた(正しく言えば「ぶんどった」のだらうけれど)ことを。

後で確認してみたら、それは回復アイテムだったのだ。

名称は乾燥昆布。

…だから何で春風は何にでも昆布を持ち出すんだよ。こっちはもう見たくもねーんだよ。

昆布弁当のせいで、あれ以来若干トラウマなんだよね。

「そんなぜーたく、言ってられないでしょう!? にーちゃんはゲームオーバーと昆布祭り、どっちが嫌なの!?!」

「そりゃゲームオーバーだけど…って待て!! 祭りって何だ!?! 場合によっては俺はゲームオーバーの方を選ぶぞ!」

「んじゃ! 話もまとまったところで、ひあーういごー!」

「くっ…足が勝手に…! だから祭りって何だアアア!」

俺の叫びを無視するように、マップ移動の主導権を握るぐみは道具屋に向けてアナログパッドを傾ける。

ホント、それぞれの主導権が逆だったら良かったのに。

「商人タイプの春風さんって、何だかハキハキしてるっていうかサバサバしてるっていうか…イメージがだいぶ違うよねえ」

「マジかよ…店頭に昆布弁当とか並んでやがったぞ…!? てことは

つまり、先に進めば進むほどにあの悪夢は再現されていくのか!？」
『…姉さん、貴女があんなに昆…回復アイテムを買い込んだせいで、マスターのトラウマがフラッシュバックしているみたいなのですが』
『さって！準備もできたし、次は次の目的地をこの町で調べるんだろうけど…』

『無視ですか。さっきのコーディネートのことといい、姉さんは本当にマスターが好きなのですか?』

「いや待て…回復アイテムってことは、終盤はダメージを受ける度にあの昆布弁当を…!?だとしたらこれはもう悪夢どころの騒ぎじゃねえ…！世界を滅ぼす災厄、カラストロフだアアア…！」

『にーちゃん、あんまうるさいと今すぐ昆布使っよ?』

「

……………」

『姉さん、実はマスターのこと嫌いなんじゃない?』

『…怜悧もそのうち分かるよ…。何を言ってもごっこ遊びとして処理される無念がどれほどの…』

『…こういうときは何と言って慰めればいいのでしょうか…。私が同じ人のことをお慕いしている以上、この問題は他人事ではありませんせん…』

「……………ん?どうした2人とも。何かあったのか?」

トラウマスイッチから生還したら、妹2人がお通夜みたいな空気に沈んでいた。俺が昆布に怯えている間に何があったんだ。

『『別に』』

「……………」

すげえ目で睨まれた。

まるで、事の張本人が無自覚なことを責めるかのような目付きである（怜悧の目は無論わからないが、そんな感じの雰囲気か辺りに立ち込めている）。

俺に心当たりは無いので、もちろん比喩だが。

「それで、買っ物の次はどうするんだ?俺は正直、この町に長居し

たくないんだが…」

『この世界はゲームと同じようにプログラムしてあります。なのでこの町のどこかに、ストーリーを進行させるイベントがあるはずですので…』

『つまり、片っぱしから話しかけたらいいんだね!』

「嫌だ」

『もー、にーちゃんは嫌って言うてばかりじゃない!好き嫌いする子は、大きくなれませんか!』

『何ですかその母親キャラ』

「だってお前、町人全員春風だぞ!? 軒先で日向ぼっこしてるじいちゃんも道で遊ぶ子供たちも! 老若男女1人残らず春風なんだぞ! さすがに気持ち悪いんだよ!」

春風の顔立ちが悪くない。むしろ整った顔立ちをしている。黒兎が言っていたようなアブノーマルではない、普通のファンのほうが多いのだ(だからこそ俺は、あの目下駄箱に入っていたラブレターにあんな歪んだ願望が込められていたことが分からなかった…) といつか知らなかったのだ。

しかし同じ顔が町単位で群がっていれば、どんなに良い顔立ちであろつと気味が悪い。

服装ぐらいいしか違いがねーもん。性別を分けるのも体つきの違いではなく、ズボンかスカートかの違いなんだぜ?

春風がつてわけじゃなく、この町がキモい。

『そうは言っても、見分けがつかないからこそ、手当たり次第くらいしか手段がありません。早くこの町から出るためにも、どうか…』
「くっ…仕方がない、か…」

でもなあ…不気味なんだよなあ…。

ゲームの世界って設定だからか、みんな動きが機械的だし。

…考えちゃいけないのは分かっているし実行に移すつもりもないけど、道行く春風のスカートを捲ったりとかって『やったらにーちゃんのこと発情期って呼ぶ』『そういうことは私たちでやってくだ

さい』『地の文を読むな！冗談だよ仕方ないだろ男ならみんな考えるんだってやらねーよ！』出来たとしてもやったら社会的に殺されるみたいなので忘れよう、そうしよう。

「…気を取り直して、手始めに村長の家みたいのを探るか。町だから町長とか王様か？」

『逃げられましたか、まあいいでしょう、取り直してあげます。私も、マスターの仰る辺りが妥当かと思っています』

『…次からは許さないからね。じゃあまず、それっぽい建物を探そうか』

そう言つてぐみがアナログパッドを傾けたとき。

「…待てぐみ。予定変更だ、何も探さなくていい」

『何で？…まさか』

「ああ…間違いねえ」

『ストーリーの進行とか丸投げにしてセクハラの限りを尽くすつもり！？』

『そうなのですかマスター！？』

「違エエエよ！おかしなモンを見つけたんだよ！」

お前らは自分たちの兄貴を何だと思つてるんだ！

普通にへこむだろうが！

『おかしなもの、ですか？』

「ん、ああ…。春風以外の誰かだ」

そいつは。

春風の2倍はあるロングの髪をなびかせ、そこにたたずんでいた。

最初の町へペルソナタウンへ ↓ 無力なる者の懺悔

春風の親切さを異常と評するなら、彼女はその存在が超常的だった。

達観したような穏やかな目に、膝裏のあたりにまで伸びた髪。

俺と同じくらいの身長は、春風の町の中では一際高く見える（頭の高さが均一なもの、この町の気持ち悪さの要因だ。工場で生産された人間を見てる気分になる）。

彼女がこの世界の何かであることが分かっているのに、俺は声をかけることを躊躇してしまう。

見るもの全てを圧倒するような儂い美しさを、彼女の横顔は湛えていた。

…まあ、いくら俺が圧倒されようと、マップ上での主導権はぐみにあるわけで、結果として俺は何の躊躇も躊躇いもなく声をかけたのだけど。

「あつ、えーつと…」

しかし口を開くのは俺であり、何を話すか決めるのも俺の仕事だ。心の準備もないままに話しかけたので、何を話せばいいのかわからない。

自慢じゃないが、女子に自分から声をかけた回数なんて、片手があればカウント出来るくらいだからな！

「いやあああああ！？」

「痛あああああ！？」

殴られた。

凄く速さで殴られた。

「な…何こいつ…まさか、この訳の分からない世界の親玉！？」

しかも盛大に壮大な勘違いをされた。

てか訳の分からない世界って。お前このゲームのキャラじゃねーのかよ。

「とりあえず、まずは手足を千切って…」

「とりあえずで他人の手足を千切るな!!」

誰だこいつのことを「儚い美しさを湛えた少女」と評した奴は！
野生の動物より猟奇的じゃねーか!!

「待てって、別にラスボスでも不審者でもねーよ」

「……………」

めっちゃ白い目で見られた。

明らかに疑っている。

今にも「その格好でよくそんな白々しいことが言えるよね」とか
言い「その格好でよくそんな白々しいことが言えるよね」やがった
しかも一字一句全く違わずに。

「おいおいそいつは聞き捨てならねーな。俺の格好のどこが不審者
なんだよ」

「ニット帽を被ってマスクとサングラスを着けた人が釘バットを装
備していたら、それは不審者と言っていていいと思うけど…」

「……………」

仰る通りで。

そついや、ぐみの悪意あるコーディネートで、俺は今不審
者なんだった…。

背面の窓を睨み付ける。

ぐみは目を反らし、吹けもしない口笛を吹いて知らん顔をしてい
る。

…後で覚えてろよてめー。

「ちよつと！空を仰ぎ見て誤魔化さないでよ。結局、あなたは何な
の?」

「え? いや、空じゃなくて画面の向こうの妹をだな…」

「……………」

今度は「この人あれだ、頭怪我しちゃった人だ…」みたいな目で
見「この人あれだ、頭怪我しちゃった人だ…」るだけではあきたら
ず直接声に出しやがった。

止めるよ、傷付くじゃねーか。

「まあそれはさておき、道を聞きたいんだ」

「よくこの流れで道が聞けるわね……」

見知らぬ誰かは大きく溜め息をついた後、「それで、どこに行きたいの?」と聞き返してくれる。

ありがたいけどあれだな、この女子からは苦労人の気配がするな。
「この近くに洞窟とか森とかない? 最近様子がおかしいとかって話があるとなお良いんだけど」

「それなら町の大通りを真っ直ぐ行くと洞窟があるわよ。そこに関して様子がおかしいって話は聞かないけど、そこに関して話す町の人様はおかしいわね。どうもあの洞窟、『なかったこと』にされてる感じがするっていうか……」

……教えてもらっておいで何だけど、さっきまで不審者と呼んでいた奴を相手にこうも色々と喋っていいのだろうか。

相談相手には不向きだな。

「……しかし、なるほど」

おそらくその洞窟で当たりだろう。

この町で『なかったこと』にされているということは、俺たちの知っている春風が『なかったこと』にした何かが、その洞窟にはあるはずだ。

「でも、あんなところに何しに行くの? それにあそこ、町の人が入り口を固めてて中には入れないよ?」

「……マジ?」

「マジマジ」

またぞろバトル展開かあ……。

嫌だなあ……。今の俺がバトったら完璧にアンダーグラウンドの間入りだよ(ビジュアル的に)。

「まあ、大した用じゃねーよ。うん、ホント何でもねーから。じゃ、道教えてくれてありがとな!」

「……………」

「だから何でもねーってばよ」

「その格好で『てばよ』とか言わないで、
すげえ目で睨まれた。」

ナルトが好きなのか…？ つか何でゲームのキャラにそんなプロフ
イルがあるんだよ。

このゲームは春風の心が素材なんだから、春風が好きだってこと
かな。

「町で『なかったこと』にされた洞窟に不審者がやってくるなんて、
事件の匂いがするじゃない」

「うーん…」

不審者がやってきたんじゃないかって、やってきて不審者になったん
だけだなあ…。結果だけ見れば、怪しまれて当然か。

「あんたが洞窟に訪れる正当な理由を教えてくれたら、私もあんた
に構わないのだけれど」

「…理由ねえ…」

言っても納得しねえだろうなあ…。

ゲームのキャラでなくても「現実の知り合いの妖怪変化をどうに
かするための手掛かりがあるかもしれないから」とか言われたら、
最初を感じるのは憐憫だろう。

また頭の痛い子扱いされるのは嫌だ。

と、いうわけで。

「囚われの女子を助「ダウト」速えーよせめて最後まで言わせろ！
！」

まさかの支持率0%だった。

くそう、一体なぜ信用してもらえないんだ。

「まあ、仮に女の子を助けに行くっていうのが本当だったとして、
その格好の男の子に助けられる身にもなりなさいよ…。不審者が恩

人とか、不登校確定もののトラウマよ」

「…そこまで酷い？」

「それぐらい酷い」 マジか…。

何だよ良いこと一つもねーじゃん不審者装備。

「むしろどんなメリットがあると思っていたのよ…」

「しゃーねーな…。おーいぐみ！防具類だけでも元に戻してくれねーか？」

『ふゆー』

…いや、だから吹けねーなら止めるよ。正直見ていて痛々しいんだよ。

つーかお前、今のが今回最初のセリフじゃね？

初セリフが『ふゆー』ってどーよ。

『…ところでマスター』

「ん？ああ、そういや…うん、何でもねーや、どうした伶俐？」

『何でもなくないですよね今完全に私のこと忘れてましたよね』

「えーと、それよりどうしたんだよ、ところで何なんだ？」

『流さないでください逸らさないでください今はそっちよりこっちのほうで優先事項です』

「…いや冗談だよ、落ち着け。悪かったよ俺が悪かった」

『ではマスターにお詫びを要求してもいいですか？』

「良心的な範囲ならいいけど…それよりお前、俺に何か伝えたいことがあったんじゃないのか？」

『いえ、別に見知らぬ誰かが「うわ…電波系って初めて見た…」みたいな目でマスターを見ていたというだけです。そんなことより、お詫びというなら今度の日曜日に、買い物に付き合っして下さいませんか？』

『あーっ伶俐ばっかりずるいよ！じゃああたしその次ねー！』

「……………」

「……………」

見知らぬ誰かが物凄く悲しそうな目で俺を見ている…。

そついやこの女子には画面窓が見えてねーんだから、そこに向かつて話しかけたら完全に電波系として認識されてしまうことくらい、少し考えたら分かりそうなもののなに…。

「いや…待て、これはその…！」

慌てて弁解を試みる俺だが、見知らぬ誰かの人差し指が、それを遮る。

そして彼女は、聖母のように優しい微笑を浮かべ、まるで子供をあやす母親のように暖かな眼差しを俺に向け、口を開く。

「大丈夫。それでも私は、あなたの味方だよ」

「何一つ大丈夫じゃねエエエ…！」

その後、とりあえず伶俐に2人と会話するための専用回線を繋いでもらった。

「この洞窟には入れません。お引き取りください」

「ほら、だから言ったでしょう？この洞窟には入れないって。ねえ、聞いているの？」

もちろん聞いている。

しかし、残念ながらそれどころではない。

今文字通り俺の目の前には、文字通り2つの選択肢が提示されているのだ。

『にーちゃん、どっちにするか早く決めてよー』

『この選択肢は時間制限付きのようです。あまりゆっくりとは考えられませんよ？』

わかってる、早く決めなければ時間切れになることくらい。ただ、どうだろう。この選択肢は、案外その時間切れが正しい回答のような気がするのだ。

だって。

「この洞窟には入れません。お引き取りください」

↓・邪魔をするなら容赦し ないぞ

・お望みとあらば靴の裏 も舐めます

「選択肢に悪意を感じるううう!!」

「……………」

見知らぬ誰かに「また発作か…」みた「また発作か…」いつて早えーよそして何で毎回一語一句同じなんだよ。実はこいつ俺の心を読んでんじゃねーだろうな…。

そっぴい、この女子の名前まだ聞いてねーや。

『もー! 決めないならあたしが決めちゃうよ!』

「ちよっ」

↓・邪魔をするなら容赦し ないぞ っぴッ

ぎゃああああ!!

やりやがったぐみのやつ!! どんだけバーサーカーなんだよ!

「ねえ、どうするの?」

ヤバい、この格好であんなセリフを言ってしまったら、今度こそこの名も知らぬ女子に犯罪者のレッテルを張られてしまう!

しかもあの選択肢には何らかの強制力があるらしく、いくら口を閉ざそうとしても、俺の意志とは関係なく言葉を紡ごうとするのだ。

「……………ッ!」

しかし全く抵抗できないというわけでもなさそうだ。

マップ移動時ほどの強制力ではないらしく、例えばセリフの内容は俺が決められるようなのだ。ただし、ここでも時間制限があり、それを過ぎるとは自動的にあの選択肢のセリフを喋らされるみたいだ。…曖昧な表現ばかりで申し訳ない限りだが、俺も初体験なので勘弁してほしい。

とにかく俺がやるべきことはどうやら、時間内に選択肢のセリフをソフトな言い回しに変えて話すことらしい。

バトルパートに入るのもやむを得ないと思わせるセリフ回しを考え出さないと、俺が何でも暴力で解決しようとするやつみたいになる…。

この格好でそのキャラは致命的過ぎだ。どうせゲームの中だし、気にすることねーじゃんと思う人もいるかもしれないけど、当人的にはそうもいかないのだ。

自分がそういうキャラだと思い込んでしまうと、そういう行動を取るようになってしまう。

怪異のキャラクターが、人間の認識に左右されるのと同じだ。あるいはその逆というべきか。

だから俺は考えた。

俺が犯罪者にならない言い回しを、RPGの主人公に足るセリフ回しを。

そして、浮かんだ1つのセリフ。

俺はそれを、主人公らしく、明るく、元気に、声に出す。

「レッツパーリイイ!!」

「見知らぬ不審者が狂気の犯罪者にジョブチェンジした!？」

見知らぬ女子が引いていた。

実に実に。

どうやら俺は、セリフのチョイスを間違えたらしい。

↓拒絶Aがあらわれた!

↓拒絶Bがあらわれた!

「まーた露骨なネーミングだな…」

「てか何で私もこのバトルに参加してるの?」

「共犯だと思われてんじゃないね?」

「不名誉極まりない!!」

うん、ごめんね巻き込んで。

『どうしようにーちゃん、逃げるのコマンドが選べない!!』

『てことはボス戦なんだろう？だったら仕方ねーさ』

つーか、一応約束を守ろうとしてくれたんだな。

まさか俺が人質としてここまでの力を持っていたというのか？

いやいやまさかねえ。

ブラコンじゃあるまいし。

『いいの!?!いいんだね!?!後で「あんときたたかうコマンド選んだからご褒美は無し」とか言わない!?!』

『言わねーよ!見知らぬ女子のほうは仕方ないにしても、何でお前からの支持率も0%なんだよ!』

伶俐もそうだったけど、こいつらはどんだけ俺がそのご褒美とやらを撤回することを危惧しているんだ。

内容がキスをするとかならまだしも、約束した以上は撤回なんかしねーよ。

↓たたかう ひっ

まほう

どうぐ

にげる

ぐみがコマンドを選び、それによって俺の動きが最適化される。最初に動いたのは俺。

どうやら《拒絶》は《お人好し》ほど速さがないらしい。

がつんっ!

↓拒絶Aに55のダメージ!

「……………うわ」

「リアルに引かないでくれよ!傷付くじゃねーか!」

「…釘バットで女の子を殴ったんだから、傷付いておきなさい」

そう言っただけ彼女は、自らの武器を構え、攻撃的な目をした春風――

――《拒絶》に銃口を向けて、引き金を引く。

ドンッ！

↓拒絶Aに48のダメージ！

「あれ？まだ死なないんだ…。面倒くさいなあ」

「俺以上に反省点満載じゃねーか！」

「まだ死なないんだ」って言ったぞ！自分が銃撃した相手が立ち上がったのを見て「面倒くさい」とか言ったぞこの女子！

「えー？戦闘中にそういうこと気にするー？器が小さいなあ」

「拳銃で女の子を狙撃したんだから、少しは傷付きなさい！」

「私はいいのよ！あんたと違って可愛いから！」

「お前絶対女子の友達いないだろ」

「何で知ってるの！？」

「誰でもわかるわ！！」

自分の容姿を理由に好き勝手やるやつが同性からの反感を買うのは、あらゆる作品で使い古されたパターンだ。

人のこと言えねーじゃねーか。

『…うん？今のにーちゃんの言い分、妖怪変化の正体を見破ったあたしの論理とほとんど同じなような…？』

「さーて気を引き締めろ、あいつらの攻撃がくるぞ！」

「え？あ、うん…どうしたの急に。何かを誤魔化すみたいな口調になってるよ？」

↓拒絶Aのこうげき！

「……………っ！」

『にーちゃん！大丈夫！？』

『っああ、平気だ…っ』

↓りんりに16のダメージ！↓拒絶Bのこうげき！

↓りんりに14のダメージ！『マスター！』

『大丈夫だつて、体力はまだ 3/4 近くある！』

不本意ながら、この町に入る前にレベル上げをしていたおかげで、ダメージはそんなにない。このペースなら、敗北の心配はほとんどないだろう。

「だとしても、結局攻撃を食らっちゃうのは変わらないでしょう？ あんたがボコられる分にはいいけど、私が攻撃されたら嫌だし…」

「自己中の見本みたいな女だなお前は！」

「いやあそれほどでも…」

「誉めてねーよ！懐かしいなそのセリフ！」

『にーちゃん、楽しいお喋りもけっこーだけど、今は戦闘中なんだからね！』

『ん？ああ、わかってるけど…』

どうしたんだ？何かピリピリしてるような…。

「それよりさ、あんた何か大きいダメージが期待できるスキル持ってるない？」

「スキル？そーういやレベル上げのときに何か覚えてたな…」

ステータス画面を呼び出し、魔法の項を確認する。

・まほう

フルスイング

……………。

いやいやいや。

とりあえず、魔法じゃねーじゃん。

『ん？魔法使うの？りょーかい、任せてー！』

たたかう

↓まほう

↓フルスイング っピッ

どうぐ

にげる

「ちょっと待てエエエ！この格好でそのスキルはだめだろうー！この小説年齢制限かけてねーんだぞ！」

今はまだ戦闘中の描写に関する苦情みたいなものはきてないけど、

さすがにこれは…

「でもあんた、さつきも釘バットであの子を殴ってたわけだし、そんなの今更じゃない？」

「お前あんとき引いてたじゃん！何で肯定側みたいなスタンスなんだよ！」

「この世界で生き残るためにはね…綺麗なままじゃ、いられないのよ」

「騙されない！そんな風にそれっぽいことを言っても、俺は騙されないぞ！」

「それにこういうのって、血がドバーツとかブシャーツとかならなければ大丈夫なんでしょう？コロコロコミックのギャグ漫画には、キャラクターが車に轢かれて死ぬとかが日常茶飯事な漫画があるわよ」

「現実と漫画を一緒にするな！あれはギャグだからまだ許されてるんだよ！」

「でんじゃらすじーさんとか、あれ普通に大量の吐血をしてるじゃない」

「実名を出すな！あれはだからあくまでギャグタッチだから許されてるんだって！」

…でも確かあの漫画って、シリアスな長編もやってたよな…。だとすれば、何か他の基準があるのかもしれない。

素人がいい加減なことを言っちゃいけないよな。

「とーにーかーくー！血が出るわけでも相手が生々しく大怪我するわけでもないんだから、サクツと殺っちゃいなさい！」

「殺るかアアア！！殺ってたまるかアアア！！そこは越えちゃなら「ええいうるさい黙れさつさと殺らないなら私があんたを殺る」見知らぬ女子が劇的ビフォーアフター！！」

最初に不審者ルックの俺に引いてたお前はどこに行ったんだ！？まああのキャラが戻ってきててもひたすら引かれるだけだから「帰ってこい」とは言わないけどね！

「く…っ！負けるかよ！そんな安っぽい脅迫に、俺は屈しな…」
「かちやつ。」

「仰せのままに、マドモアゼル」

…いや、待て。まず言い訳をさせてくれ。

だつてあれ、返事があと少し遅かったら発砲してたぜあいつ！目が据わつてたもの！有言実行の信念がピリピリ伝わってきたもの！仕方ないじゃないか、殺らなきゃ俺が殺られるんだ！

↓りんりのこうげき！

↓りんりはまほう、フルスイングをつかった！

ごっ！！

↓拒絶Bに 101のダメージ！

「拒絶Bイイイイイ！！」

許してくれ…！弱くて弱々しくて弱つちい俺をどうか許してくれ

…！

「なかなかやるじゃない！これならまとめて倒せるわ！」

↓謎の少女のこうげき！

↓謎の少女は機関銃を掃射 した！

ズガガガガガガ！！

↓拒絶Aと拒絶Bはまとめ てデスった！

「デスったって何イイイ！？」

「死んだってことでしょ？」

「わかつてる！わかつてるけどよ…！！」

わざわざ面白く言う必要ないじゃん！これじゃあの2人は、あのギヤグ1つのために命を奪われたようなもんじゃないか！！

『繰り返すようですがマスター、彼女らは感情ですので、命なんて最初から持っていない。この世界での戦闘はいわば心の葛藤と同意です。感情を押さえ込むなんて、誰でもやっていることではない？』

『…にーちゃんにとっては、そういう問題じゃないみたいだね…』

「ほらほら、何を放心してんの？私たちの冒険は、まだまだこれから

らよ!」

「俺は…なんて無力なんだ…」
こうして。

打ち切りされた漫画の主人公みたいなセリフを言う女子に曳かれて。

俺は春風が『なかったこと』にした、心の奥へと足を踏み入れた。

最初のダンジョンへエントランス・トゥ・ハート」 ↓ 無責任な覚悟

ダンジョンに足を踏み入れると、エフェクトとともにステージ名が眼前に浮かび上がる。

《エントランス・トゥ・ハート》

それが、このダンジョンの名前らしい。

「仮面の町に続いて心の入り口か…。分かりやすいというか、露骨過ぎるというか…」

「ハイハイ、帰っておいで。キミの住む世界はそこじゃないよー」
「……………」

さっきの戦闘で不審者認定は解除された（うやむやになったと言ったほうが正しいかもしれない）が、電波認識はそのままらしい。

「つか、今のダンジョン名も見えてなかったのか？」

ゲームのキャラなんだし、もうちょいメタ視点に対応してくれてもいいのに…。あるいは、ゲームのキャラだからメタ視点に対応してないのか？ならなぜナルト好きなんでプロフィールがあつたり、でんじやらすじーさんを知っていたりするんだ…。

わけが分かん。

俺よりよっぽど電波だ。

「で？ここからどうするの？」

「へ？どうするって、何の話だ？」

「…囚われの女の子を助けに来たんじゃないの？」

「…ああー」

あれ、信じてたんだ…。

思った以上に純真無垢なやつだな。

「何よ今の間は…。まさかあんた、私を騙したの！？」

「いや、そうじゃねーよ。大丈夫、もう忘れねー」

「忘れてたの！？なんか囚われの女の子、扱いがぞんざい過ぎない！？」

「また忘れたのですかマスター！？私はマスターにとってそんなにどうでもいい存在なのですか！？」

『オメーじゃねーよ！！春風のほう！！』

愚妹・s専用回線を通じて怜悧に突っ込む。この回線のおかげで電波扱いされる機会はめつきり減ったけど、あれ以来怜悧が『忘れる』という単語に過剰かつ過敏に反応するようになってしまった。

…悪いことしたなあ…買い物、今度の日曜日だっけ。お詫びついでに、パフェでも食わしてやろう。

「…本当に、私を騙したわけじゃないのね？」

あ、疑心暗鬼になってる。

まずいな…ここで信用を失えば、こいつはパーティーから離脱してしまうかもしれない。

ここから先の春風は、さっきの《拒絶》との戦闘を見る限り、今までのワールドマップのようなゆるい感じじゃないだろう。攻撃してくるようになった春風達を、俺1人では到底さばけない。

ここでこいつの信用を失うのは望ましくない。

誠心誠意を込めて、電波扱いされない程度に俺の現状を説明しよう。

ひぐらしのなく前に、疑心暗鬼を解いておこう。

「助けに来たってのは、本当だ。ただ、あいつが囚われてる（と）いうことにしておこう。この辺は説明が難しい（場所がここかと聞かれたら、自信を持って答えることはできない）」

「…じゃあ何でここに来たの？」

まだジト目。

なんとなく、預かった子どもの警戒心を飴で解きほぐそうとしている人の気分。

「ほとんど成り行きだけど、決め手はお前の話かな。『なかったこ

とにされてる洞窟』ってところで、もしかしたらって思ったんだよ」
さて、預かった子どもの様子は…？

「…なぜかバカにされてる気がするんだけど…」
侮れねーな子どもの勘。

「おいおい、人が誠心誠意を込めた説明をつかまえてバカにしてる
はないだろう」

「…うん、そうなんだけど…そうだよ、ごめんなさい」
謝った！

突っ込まれるのを待つ…予想してただけに意外だ。

こんな素直でいい子に嘘をついてしまった…。

ちよつと罪悪感。

「それじゃ、その女の子を探しに行こつか。きっとその子も、助け
が来るのを待ってるよ」

「えーと…でも、いいのか？この洞窟全部を探しても見つからない
かもしれないんだぞ？」

巻き込んだ俺が言うことじゃないけど。

「まあ、タイトルに『最初のダンジョン』ってついてるし、その辺
は覚悟してるつもりよ」

「お前どういう立ち位置のキャラなんだよ！！」

何でこのゲームに対するメタ視点がないのに、読者的なメタ視点
が語れるんだ！

「男の子が細かいこと気にしないの！ほらほら急ぐわよー！」

「…なんでいきなり協力的になつたんだ？」

囚われの女の子を助けなければという義務感とかだろうか。まあ、
困ってる人がいたら助けたいと思うのは当たり前か。あんまり思わ
せ振りの伏線を張つといて、実は何でもありませんでしたじゃ格好
つかねーしな。変に突っ掛かるのは止めとこう。

益体のない思考を打ち切り、謎多き電波女を追いかけようとした
けど失敗した。

マップ移動の主導権は、ぐみにあるんだった。

いくら喜劇と前置きしておいたとはいえ、これではあまりにも喜劇過ぎやしないか？読者もいい加減飽きて、魔法科高校の劣等生とか読んでいるんじゃないだろうか。

まあ、それなら幸いだ。

ここから先の俺は、ただひたすらに情けないから。

そんな自分を語るのは忸怩たる思いがあつたので、喜劇と銘打って照れ隠しをしてみたりした俺だから、正直ホツとしている。

情けない自分に失望されるより、いつまでも続きそうなマンネリ気味のゆるふわギャグに飽きてもらつたほうが、本人としては気が楽だ。

こんな弱音を吐く時点でかなり情けない気がして、自分の小ささが嫌になるけれど、まあいいか。

きつともう、誰も見ていないだろうから。

読者からの支持率も、0%だろうから。

だからこのままなああで終わらせても問題ないとは思うけれど、けじめは必要だ。

語った者の責任として、最後まで語ろう。

先伸ばしにして誤魔化すのも、もう限界だから。

観念して、開き直って、自分の醜態を晒そう。

もし、いまだ俺の語りに耳を傾けてくれている奇特な人がいるのなら、前置きを1つ追加しておこう。

ここから先は、ただの愚痴だ。

主人公になれなかった道化のやつかみだ。

上条 当麻のような心を打つ名言なんか言わないし、吉井 明久のような諦めずに戦う姿なんかどこにもない。

他の読者にならって、気になっている他の小説をチェックすることをおすすめする。

春風じゃないんだ。

人の愚痴なんて、聞いても楽しくないだろう？

「ねえ、もしかしてあれじゃない？」

未だに名前を知らない少女が何かを見つけ、それに続いて俺も、少女が見つけたそれを認識する。

それは牢屋のようなものだった。ていうか牢屋だ。

洞窟の一角に鉄格子がはめてあって、中に人が…みすばらしい格好をした春風が閉じ込められているから、牢屋と称するべきだろう。あるいは地下牢か？

何でも同じだ。

俺は、春風を助けに来たんだから。

「最初のダンジョンって表記は、フェイントだったんだねえ…」

「ここからは面白い話は抜きだぜ。シリアスパートに入るために、わざわざ自虐的な地の文を挿入したんだからな」

「ああー、あの根暗な感じの独白はそういうことだったんだ」

「何でお前が俺の独白を知ってるんだよ！！本当にどういうポジションにいるんだお前！」

面白い話は抜きだって今言っただろうが！

ギャグパートで飽きてもらったほうが気が楽だとは言ったけれど、別に見放されたいわけじゃないんだよ！前言撤回なんかさせんな！「だって、しみりした感じって好きじゃないんだもん。お葬式とかだって、みんなでしみりするより、みんなで盆踊りとかしたほうが、送られる人も楽しくない？」

「それ普通に不謹慎なだけじゃねーか…？」

あれだけ中2臭い前置きをしておいて恥ずかしい限りだが、そんな感じで楽しくお喋りをしながら、牢屋に近づいて行く。

自分がこれからやろうとしていることの、意味も知らずに。

「よー春か…」

「きゃああああああ！？」

檻の中の春風は俺を見るなり悲鳴を上げて、牢屋の奥に逃げてしまった。

まあ、奥なんて形容詞が使えるほど広くないから、牢屋の隅に逃げたと言ったほうが正しいのかもしれないけれど。今はそういうの、どうでもいいや。

女子が自分の姿を見るなり悲鳴をあげるって、ここまでキツいんだ…。

《拒絶》の攻撃より効いた。

『えっと…ごめんね、にーちゃん』

『えっと…元気を出してくださいマスター』

「えっと…まあ、その格好じゃあ仕方ないわよ」

3人がそれぞれ慰めてくれた…いや、最後のは微妙だったけど。

そうだった…名前を知らない少女とあまりにも普通にお喋りしていたから忘れていたけど、俺は今不審者の格好をしているんだ…。

いつまでもへこんでいても仕方がないので、マスクとサングラスを外して素顔を晒す。今までそれをしなかったのは、どうも装備品は自分の意思では付け替えられないものらしく、まるで体の一部になっているみたいの外せなかったからなのだが…どうして今は外せただろう。

『牢屋の前についたあたりからイベントが始まっているからですね。発生したイベント内での言動は、基本的に主人公であるマスターの自由です』

『解説してくれてありがとう。ただ何でお前らは当たり前のように人の地の文を読んでんだ！』

あるいは、あいつらが俺の心を読んでいるのではなく、俺の心があいつらから見たら見え透いているのか？

そんなにわかりやすいのかな俺って…。

閑話休題。

「ほら、俺だよ春風。お前を助けにきた」

「え…？緑野くん？」

俺の素顔を目の当たりにして、恐怖に染まっていた表情が困惑のそれに塗り替わる。

まあ、普通ならあり得ない来客だもんな。

「え？あれ？どうして？何で、緑野くんがこんなところに？」

「お前が妖怪変化に遭ったから、助けに来たんだろうが」

「私が…？」

「何だよ、覚えてねーのか？」

人は意識を失う直前の記憶を失うことがあるっていうのは聞き覚えがあるけれど。

妖怪変化の際も起こりうるのか？

「あ…そうじゃなくて。私は、緑野くんが助けに来てくれた春風薫じゃないの」

「へ？春風じゃない？」

何言ってるんだ？外見こそみすばらしいが、その笑顔には見覚えが…。

そこで、はたと気付く。

目の前の春風は、俺のそんな様子にくすくすと笑ってから、ちょっとだけ得意げに種明かしを始める。

「ここに来るまでに、私以外にもたくさん春風 薫に出会ったでしょう？私も、あの子たちと同じ。緑野くんが春風と呼ぶ女の子の感情の1つだよ」

…完璧に騙された。

いや、目の前の春風からすれば、俺が勝手に勘違いをしたというだけのことだろうし、それが真実だと思うけど。

それにしただって…。

「じゃあ何で閉じ込められてんだよ、紛らわしいな。こんなところに入っていたら、誰だって間違え…」

そこまで言って、やっと気付いた。

違和感。

目の前の牢屋の、異質さに。

「何でって…それは、あの子が私という感情の存在を許してくれないからよ」

「……………」

質問に対する感情の答えは曖昧で、だから俺は彼女に再び問うべきだったのだろうけど。

俺はそれをしなかった。

俺の目が、俺の意識が、牢屋の床に敷き詰められたそれに、奪われていたから。

「…正直未だに世界観がよくわからないけれど。とりあえず、存在が許されてないって、どういうこと？」

いつまでも質問をしない俺に痺れを切らしたのか、名前のわからない少女が、牢屋の中の感情に問いかける。

しかし返ってきたのは、またも要領を得ない回答だった。

少なくとも、俺が名前を知らない少女にとっては。

「その説明を分かりやすくするために名乗るなら、私の名前は《幸》。春風 薫の、自分の幸せを求める感情」

——ああ。

それで納得がいった。

こいつがあのだで『なかったこと』にされた理由も、あの日の春風の言動も、牢屋の床をそれが埋め尽くしている理由も。

「あの子は昔、誰かに酷いことをしたんだって。だから私はいちゃいけないんだって、だから私は幸せになっちゃだめなんだって…。そう、言っていたよ」

あの日。

下駄箱のところで見たと、虚ろな春風は、誰かに酷いことをした自分を思い出していたんだろう。

牢屋の中に何かへの手紙が敷き詰めてあるのは、きっと《幸》が

投獄されているのと同じ理由だ。親切の権化みたいな春風からすれば、誰かに酷いことをしたという記憶は耐え難い苦痛だろう。

なんだよ。

あの日下駄箱に入っていた手紙は、やっぱりいじめなんじゃないか！

「ふざけないで！何をしたか知らないけど、幸せになっちゃいけない命なんかない、そんなの認めない！待ってなさい、こんな檻なんかすぐにぶち破って……！」

「だめ！そんなことをしたら、あの子はあなたたちに依存しちゃうよ！」

「はあ？私たちに依存？その何がいけない？」

俺が名前を知らない少女は、かなり憤っているらしく、その危険性に気が付いていない。あるいは、《幸》の言葉の意味をわかった上で、そのリスクを『大したことじゃない』としているのか。

「……あなたが私を肯定すれば、それはあの子にとって、あなたたちは自分が幸せになっていいという唯一の証明になる。あなたたちの存在を、心の拠り所……どこか、自分の心の一部のように見るかもしれない。そうなったら、あなたたちは一生、あの子に付きまといわれちゃうんだよ？」

《幸》はそう言って、困ったように微笑む。

俺が名前を知らない少女が《幸》の話聞いて口をつぐんだのは、春風に一生付きまといることが嫌だからではないだろう。

少女が躊躇したのは、おそらく《幸》が意図的に伏せたであろうもう1つのデメリットに気付いたからだ。

春風が俺たちに依存し、俺たちを自分が幸せになっていい根拠とすれば、それは俺たちのどちらかが欠けただけで、春風は自分の幸せを否定してしまうということだ。

再び《幸》を、この牢屋に閉じ込めてしまうということだ。

俺が名前を知らない少女はこのゲームのキャラであり、実在の人物、団体とは一切関係ない。

だからつまり、俺がこのゲームをクリアした瞬間に、俺たちが《幸》を助けた意味がなくなってしまうのだ。

「心配してくれてありがとう。でも私は大丈夫だよ」

そう言っ《幸》は、たぶん俺たちを安心させるために、しかし結果として、俺たちの心を抉るような優しい笑顔を…春の日差しのような微笑みを、俺たちに向ける。

「これは、私たちが悩めばいい問題だから」

閑話↓とある少女の追憶手記

彼女に出会ったのは、土の中の虫さんたちが眼を覚ます頃のことだった。

…こう言ったら、るかちゃんはまた、私を変な子みたいに言うのかな。

私は普通だよ！

あの日の私は、新たな環境への期待よりも、新たな生活への憂鬱さのほうが大きかった。

ひねた小学生だったと、自分でも思う。まだ入学式の前だったから、厳密には小学生じゃなかったのかもだけど。

小学校への入学を控えた子どもって言うのが1番正確かな。

えっと、とにかくそんな感じのときに、私は彼女と出会ったんです。

後に親友と慕い、多くの時間を共に過ごすことになる女の子と。

後に裏切り、とても悲しいお別れをすることになる女の子と。

るかちゃん。

私たちは、何のために出会ったのかな。私たちの出会いは、あのバッドエンドの前振りでしか、なかったのかな。

…ごめんね、変なことを言っただけ。

私たちの出会いが何であれ、るかちゃんはきっと、私と出会ったことを後悔はしていないよね。

私も同じだよ。

あの出会いがバッドエンドの前振りだとしても、私はるかちゃんに会えて良かったって、やっぱりそう思う。

久しぶりに、あの頃を思い出してみよう。

最初のダンジョンへエントランス・トゥ・ハート」 ↓ 後ろ向きな決意

「甲斐性無し」

牢屋から離れ、しばらく歩いたあと。

ずっと口を閉ざしていた名前のわからない少女（俺と同世代くらいだから、少女と呼ぶのがはたして正しいのかも俺にはわからない）は、開口一番にそう言った。

「根性無し。意気地無し。みつともなし！」

「…みつともなしってなんだよ」

無理矢理「なし」で繋げんな。

「冷静になって考えてみたら、あの檻、あんたが壊せば良かったんじゃない！そうすれば、『あの子』は私じゃなくて、あんたに依存するんでしょ？」

「そんなことしたって、問題は解決しねーよ。他人に依存するってことは、存在の自由度が下がっているってことなんだから」

虐待を受けた子供のようにな。

あの檻を破壊すれば、春風の未来に存在する、多くの可能性も壊してしまう。

「だったら、破壊した可能性の分だけ幸せにしてあげたらいいじゃん！それくらいのこととも言えないからタマナシって呼ばれるのよ！」
「女の子がタマナシとかってシャウトすんなや！」

「っ！か呼ばれてねーし。」

呼ばれてたまるか。

「根拠の無い安請け合いは、助けないことより酷い暴力だと思うけどな」

「それはっ…これから頑張ればいい話でしょう！？」

「頑張らないやつの常套句だな」

そんな無責任な計画で他人の人生を背負えるほど、俺は純真無垢でも厚顔無恥でもない。

「……………」

「納得したか？したなら早く準備を整えろよ。この部屋には、今までの敵とは比べ物にならない…」

「納得なんかしてない。あんたはなんだか賢そうな理屈を並べてるけど、要するにあの子を見捨てるってことでしょ？」

「…助け合い励まし合いの精神はそりや大事だろうけど、本来は自分の力で助かるべきなんだ。本人が助かるうとしなければ周りが何をしても無意味だし、当人が助けを当てにしていたら、何度助けても無価値だ。人の手を借りて助かった野生動物は、借りた分だけ野生に帰れなくなる。人は結局、勝手に助「うるさいうるさいうるさい！！言い訳なんか聞きたくない！！」

俺の言葉が終わる前に、彼女の憤怒が、活火山のように噴火する。堪えきれなかった想いが、傷口から溢れる血液のように、やりきれない痛みを訴える。

「あんた、あの子が何て言ったか覚えてる？『私は昔酷いことをした、だから私はいちゃいけない』って、そう言ったのよ！私たちのことを気遣って、『助けるな』って警告したのよ！？他人にあれだけ優しくなれるくせに、その優しさが一つも自分に向いてないのよ！？」

よほど腹に据えかねたのだろう。俺の言葉を押さえ込み、情けない言い訳を呑み込んで、彼女の感情の波が打ち付けられる。《幸》の境遇への怒りが、みつともない俺への憤りが、荒波の如くぶつかってくる。

「あの子が何をしたかなんて知らないし、何かをされた人からすれば、確かにあの子は幸せになっちゃいけないのかもしれない。だけど、私はそんなの認めない！幸せになっちゃいけない命があるなんて、私は信じない！自分からさえ『幸せになっちゃいけない』なんて言われてるなら周りが助けてあげなきゃダメじゃない！私たちが、手を差し伸べてあげなきゃウソじゃない！」

あの子はあんなに——優しいんだから。

彼女はそう言って、俺を見た。

なぞだか鈍いとぐみに言われる俺だけど、さすがに今、彼女が何を求めているかは分かる。

謝罪。肯定。同意。

自分の間違いを認め、ごめんなさいと謝り、少女の意見に従うこと。そんな未来を願っている。サンタクロースの正体を知ってなお、その存在を信じようとする子供のよう。

だから俺は答えた。

「悪いな。俺はあいつを助けない」

「え——？」

自分の、偽りない本音を。

期待には応えられない分、誠実に答えた。

俺はあいつを助けない。だって——

「私は助ける」

…力なく、輝きなく。

蠟燭に揺らめく火みたいに弱々しかったが、それでも彼女はそう言った。

間違っているのは俺のほうだと、主張した。

「私1人で助ける…。1人でも助ける！ そうだよ、檻を壊せないなら、壊さずに助ける方法を見つけたらいいんだもん！」

そんなものあるはずが無い。ここは春風の心の中なのだ。

自分で自分を否定している以上、自分が助かる方法なんて用意してあるはずがない。

本人が助かるうとしない限り… 周りの助けは無力だ。

「見てなさいよ！ どんな命も、助ければ助かるって、証明してやる

んだから！」

そのことに気付いていないのか、あるいは気付いてなお、そう主張しているのか。

いずれにしろ、彼女はそう叫んで走り去った。

俺の行く手には「この部屋から強い気配を感じる…」のメッセージ。

ボス戦の直前に、俺はまた1人になった。

「…どうしますマスター？彼女を追いますか？」

「いや…このまま行く。あいつを追ったら、《幸》を助けることになるし」

俺は助けない。だって、助けるってことは、また失う可能性を生むってことだから。

「…そうですか」

「情けない兄貴で悪かったな。嫌いになったか？」

「私は、どんなマスターでも大好きです」

「あー！伶俐が抜け駆けしたー！あたしだって、にーちゃんのこと大好きだよ！」

「…そこは嫌いになってももらわないと困るんだけどな」

俺の情けなさを——肯定して欲しくなかった。

どこまでも自分勝手だな…俺は。

「…っし、んじゃよろしく頼むぜマイシスターズ」

「はいはい！」

「お任せ下さい」

とにかく今は、春風の妖怪変化を止めることを考えよう。

あとのことは、その時頑張ればいい。

最初のダンジョンへエントランス・トゥ・ハート」 ↓ 《強迫観念》

神々しい。

それが、かつて建物だったらしきこの場所の第一印象だ。

左右に立ち並ぶ石柱も、遙か頭上を覆う天井もぼろぼろだけれど、場を支配する威厳のようなものは、全く朽ちていない。

ただここに在るだけで人を跪かせるような存在感。

朽ちてなお、他を圧倒する威厳。

およそ春風のキャラクターからは連想できない空気を、この場所は内包している。

「…ここは、どこだ？」

誰に聞くでもなく、そんな間抜けな疑問を呟く。

誰に問うでもなく呟いたその質問に、しかし誰かが答えた。

「幸せの成れの果て…美しき思い出の残骸だよ」

「ッ！」

この場所の中央に目を向ける。

そこには――

「はる…かぜ…？」

「どうしたの、緑野くん？そんなおぞましい者でも見るような目をしていないでよ、傷ついちゃうよ？」

「え…あ、悪い…」

謝ってしまった。

読者の皆さんから「おいおい何を謝っているんだ、そこは否定するところだろう？謝ったらおぞましい者でも見るような目をしていたと認めるようなものじゃあないか」などと怒られてしまいそうだが、1つ言い訳をさせてほしい。情けないついでにみつともなく言い訳をさせてほしい。

蜘蛛。

春風の下半身が、蜘蛛のそれになっていたのだ。

ケンタウロスのあの馬の部分が、そのままそのもの蜘蛛のそれになっていると言えば伝わるだろうか。それでいて上半身はピンク色でひらひらした感じの（フリルっていうんだったかな？）服に、伊達 政宗が着けてそうな眼帯を両目に装着している。

今年度のミスマツチ大賞ぶっちぎりの第一位だ。

独眼竜ならぬ零眼蜘蛛とでも呼ぼうか。

「…その呼び方は止めてほしいかも」

普通に『春風』でいいよ、と返す『春風』。

眼帯のせいで目は見えないが、困ったような笑顔を浮かべているのを見ると、こいつも春風の一部なんだと実感する。

一步。足を出す。

一步。春風に向かって歩み寄る。

足音が残響することなく端的に響き、場の静けさを際立たせる。崩れた天井から差し込む光が描く円の中に踏み入り、春風と点対称の位置についたあたりで、俺は足を止めた。

「まず、何で緑野くんがここにいいのかを聞いてもいいかな？」

春風の質問が、静寂に変化を与える。

何が戦いの引き金になるかわからない緊張に冷や汗を流しながら、俺は慎重に答える。

「お前の…春風の妖怪変化を止めにきた」

「妖怪変化？」

意外、といったようなリアクションを見せる春風。

そういえば、『幸』も似たようなリアクションをしてたけど…

「まさか、知らなかったのか？」

「うん、知らなかった。このあたりはまだ落ちてないし、私はほら、見ての通りマイナス感情だからさ。そういうマイナス変化には鈍いんだよ」

「マイナス感情ね…」

外見で相手を判断するのは良くないが、それでも『やっぱり』という感じた。

下半身が蜘蛛のプラス感情があつてたまるか。

「じゃあ、緑野くんは私の…薫の最心部に行くつもりなんだね？」

「……………ああ」

バトルパート突入な流れになつてきたので、警戒を強めながら答える。

「最心部なら、この奥にある出口から出てすぐだよ」 そんな俺を見て、マイナス感情は軽く微笑みながら道を教えると――

「薫のこと、よろしくお願いね」

……………。

「へ？」

「…え？助けに来てくれたんだよね？」

「いや、まあ…そうなんだけど」

「じゃあ、薫のことお願いしていいんだよね？」

「いや、まあ…そうなんだけど」

どうやら、戦う意思は無いらしい。

少し…というか、かなり拍子抜けだ。

「…じゃあ、素通りしていいのか？」

「通せんぼする理由がないよ…」

呆れたような調子で返される。

…いや何でお前が呆れる側なんだよ。なぜ俺のほうがおかしいみたいな感じになつているんだ？

釈然としないものを感じつつも、とりあえず蜘蛛春風の後ろにあるらしい出口を目指して歩いてみる。

…本当に妨害しねーよこいつ。むしろ微笑みながら手を振って見送つてらっしゃるよ。

ただのイベントキャラってオチかな…。

「あ、そうだ蜘蛛春風」

「…その呼ばれ方すつごく嫌だよ…。同じ春風なんだし、普通にいつも通り呼んでよ…」

こいつがイベントキャラならあるいは…

「この洞窟にある牢「開けちゃ駄目」

すんごい早さで拒否られた…。

『牢屋』の『ろ』が言い終わるころにはもう内容にアタリをつけてたみたいな早さだ。

高校生クイズ甲子園の解答者かよ。

「開けちゃ駄目」「それは駄目」「それだけは駄目」「絶対に駄目」「殺しても駄目」

機械的に、無機質に。

ただひたすら『駄目』を連ねる蜘蛛春風。

あの日下駄箱のところで見たのと同じ…いや、剥き出しのマイナス感情であるこいつは、それ以上の暗い輝きを放っている。

「…何で駄目なんだよ？せめて理由を教えてくれよ」

目の前のマイナス感情に気圧されながらも、それだけは訊ねた。訊ねたかった。

「なら殺す」

「……………は？」

ちよつと待て。

今人類の会話に必要なステップが丸々省略されて、英語の教科書もびつくりの不自然なセンテンスが歪に形成されなかったか？

「なら殺す」「それなら殺す」「残さず殺す」「骨まで殺す」「死ぬまで殺す」「死んでも殺す」

「一回殺せば充分だろ！？」

って違う！落ち着け俺、正気を取り戻せ！どう考えたって、論点はそのじゃない！

目の前のマイナスは今！躊躇うことなく俺の殺害を決定しやがった！

「ちょ…待て春風。一旦落ち着「私は許されちゃ駄目なんだ」「人の話を聞けよ！」

ダメだ…完全に自分の世界にトリップしてる！！

『…なんか意外な形でバトルパートに入ってたねえ…』

「呑気でいいなアプレイヤー様はよオ！！」

もう俺に電波の容疑をかけるものはいないので、おもいつきりシヤウトする。

そう、いない。

この狂気のマイナスを、俺一人で相手にしなければならぬ――
――！

「どちくしょー！！！」

「買い続けなければ…私は許してもらえないんだ！！」

彼女の服が、瞬く間に黒く染まる。

明らかに本編とは関係ないところで、俺の命懸けの戦いが始まった。

閑話↓とある少女の幸福回顧

憂鬱で仕方がなかったはずの新たな生活を、しかし私は満喫していた。

理由は簡単、友達が出来たから。

「るかちゃん、おはよー！」

「うん、おはよー！」

教室に入っつてすぐ、友達のかちゃんに挨拶をする。そのあとは先生がくるまでおしゃべりして、休み時間には一緒に遊んで、放課後にはたまにるかちゃん家で遊ぶ。

ありふれた幸せだったかもだけど、私は楽しかったし、るかちゃんも満喫してたと思う。

「にしても『るかちゃん』って呼び方になれちゃうなんて…。私も普通じゃなくなってきたのかなあ…」

「あはは、その言い方だとまるで私が変な人って言われてるみたいだねー！」

「…そう言っただけだ…」

「……………」

「……………」

「あはは、その言い方だとまるで私が変な人って言われてるみたいだねー」

「丸々そういう意味だよ！？」

リテイク失敗。

真っ向から包み隠さず言われちゃった。

そんなに变かなあ…私は普通だよな？

「自分で普通って言ってる人ほど普通じゃないらしいよ？」

「…るかちゃんひどい…」

若干泣きそうなのをこらえて非難する。でもるかちゃんはそんなのお構い無しに、お胸を張って『まあ、私は普通だけだね』みたい

な得意顔。

… 涙は女の武器だつて聞いたことがあるけど、同じ女の子には効果がないみたい…。

「まあ、私は普通だけだね！」

「… あれ？るかちゃん的主張と行動が噛み合っていないような？」

「……………？そうかな？気のせいだと思うけど…」

「… 気のせいかな？」

「気のせいだよ！」

「気のせいかー」

こんな感じのおしゃべりをして過ごすかちゃんとの毎日に、暖かくって幸せだった。

教室のどこから、私たちに向けられた悪意に、気付けないほどに。

「うおわああああ!!」

蜘蛛春風が打ち出した黒い光球（変な言葉だ）を体が文字通り勝手に回避し、右手に釘バットが召喚される。

「一応仮にもこのゲームの主人公なのに、武器が釘バットってどうなんだろう。しかもまだに不審者ルツクのままだし。」

「大丈夫ですマスター。かの有名な主人公、クラウドⅡストラトフの装備品にだって釘バットがありましたから」

「その手のセリフを聞くたびに疑問に思うんだが、お前そういう知識をどこから持ってきてんだ？」

つい先日生まれたばかりの伶俐に、そういうものに触れる時間はなかったはずだけだ。

「人間との共同生活のための講習で教わりました」

「国は税金を何に使ってんだ!!」

ガラでもない体制批判をしてしまった。

何で共同生活の講習でそんなコアなことを学んだ…。

「おりよ？ 伶俐ー、なんかバトル画面が今までと違うんだけど？」
バトル画面が違う？

どういうことだろう…キングダムハーツRe:コーデットのボス戦みたい、横スクロールになったりシューティングになったりしているのだろうか。

「いえ、コマンドバトル方式はいまいち盛り上がり欠けるので、FF12方式に変更しました」

「んな打ち切り寸前漫画のテコ入れみたいな理由でシステム変えんな!!」

つい長々とした突っ込みになってしまったけれど、そんな理由で振り回される現場の身にもなってほしい。こっちは実際に命懸けで戦っているのだ。

『大丈夫ですよマスター。別に負けても死んだりはしません』

「え、マジで？」

『ええ、そこはゲーム世界にして、私の支配空間です。セーブさえしておけば、私の支配者特権でその戦闘をなかったことにして、セーブした地点からやり直せます』

「え、マジで！？じゃあ俺、ほとんど無敵じゃん！」

そうか、ゲームだもんな。セーブしておけばセーブ地点からやり直せるなんて、考えなくてもわかりそうなんだ。紹介ページにチートのキーワード入れんの忘れてたぜ、あっはっはっは。

『あ、セーブするの忘れてた』

「ガッデエエム！！」

キーワードなんかより忘れちゃいけないものを忘れていた。

そうだった！プレイヤーはミス・残念の称号をほしいままにする我が妹『ミス・残念』って何！？呼ばれたことないよそんなの！』、緑野 ぐみその人『黙ってゲームを続けなさいダメ姉さん』『ダメ姉さん』って言うなー！！』だったんだ』って跳んだー！蜘蛛跳んだー！！』…え？

『ダメ姉さん、×ボタン！』

『こんな時でもそう呼ぶの！？』

「ぎいやあああああ！！」

頭上に落ちてきた蜘蛛（タランチュラみたいに毛むくじゃらなタイプ）から逃げるべくダッシュしようとした矢先、体が勝手に前転した。

前転。

回避行動の王道とも言えるアクション。

『おおー！にーちゃんがぐるりんちょ！』

『…なんだかダメ姉さんの精神年齢が徐々に下がってきているよう…』

「それは俺も感じ…うおあっ！？」

再び蜘蛛春風が黒い光球を放つ。

向こうの会話BGMに、こっちのバトルは激化の一途を辿る。

『とにかくぐみちゃん、画面左下を見てください』

『ぐみちゃん！？今ねーちゃんのことぐみちゃんって呼んだ！？』

『っと…！黒の光球は3連射か…』

『コマンド方式の時と同じように、4つのコマンドを用意しました。

《戦う》《防御》《回復》《ハズレ》のコマンドが見えまちゆか？』

『姉に対してまさかの赤ちゃん言葉！？伶俐にはあたしが何に見えるの！？』

『あぶねっ！！糸吐いて来やがった！』

『コマンドは十字ボタンの上下で。今はいませんが、他のキャラクターへの命令は十字ボタンの左右で切り替えます』

『それよりこの《ハズレ》コマンドって何？』

『何だこの紫の液体！？毒攻撃か！？』

『《ハズレ》コマンドは条件が整うまで使えません。他のコマンドについては、今までと変わりません』

『コマンドに対応した能力が最適化されるってこと？FF12っていうよりディシディアのコマンドバトル方式みたいだね』

『マジかよ…！？蜘蛛の脚にそんな使い方があったと！？』

『商品名を出さないでください。作者の偏りがバレてしまいます』

『その辺はもういくら気を使っても今更じゃない？』

『黒の光球を一カ所にチャージしてる！？アクセラレータが空気を圧縮したみたいになってる…！』

『大丈夫です。スクウェア・エニックスを知らない人にはまだバレていないはずですよ』

『でもスクエニ知らない人って少数派だと思うよ？FFとドラクエって、誰しも一度はやったことがあると言っても過言じゃないくらい世の中に浸透してるタイトルだし…』

『いい加減こっちに参加しろお前らアアア…！』

キレた。

さすがにキレた。

現場が前線で命のやり取りをやってる間に何の論争を繰り広げるだあいつらは…！

『いけません姉さん、私たちの最愛のマスターが大ピンチです！』

『ホントだ！あたしたちの大好きなーちゃんがピンチだ！』

「それがさっきまで完全に放置してた人間にかける言葉か！」

嘘っぱさがバブル時代だ。

嫌いなら嫌いと言ってくれたほうが気が楽なんだが…。

『よーし、行くよにーちゃん！』

「ああ、頼むぜホントに…」

ぐみがコマンドを選び、それに合わせてプログラムが俺を最適化する。

選ばれたコマンドは当然だ。たたかう

「よっしゃ、いくぜエエエー！」

戦う力を借り受け、力強く地面を蹴って相手の懐に潜り込む！

蜘蛛春風は、人間部分こそ原寸大だが、蜘蛛部分はそれ単体で俺よりでかい。

しかし最適化された俺の脚力は、二倍以上あるサイズの差を難なく塗りつぶし…春風のところまで、飛び上がる…！

「…………ツ!?」

『いつけえー！にーちゃん！』

息を飲む蜘蛛春風と、すでにとどめの一撃みたいなテンションになっっているぐみ。

蜘蛛春風が俺を迎撃しようとしてだろう、黒の光球を3つ生み出したが、もう遅い。

俺は大きく振りかぶった釘バットを、蜘蛛春風目掛けて――

「ぐああっ！」

『マスター!?』

『にーちゃん！？』

迷った。

釘バットで女子を殴ることについて考察した、その結果。

蜘蛛春風の光球が直撃し、俺はみつともなく地面を転がった。

『その議論は洞窟の入り口で終わっただんじやなかったの！？ていうかにーちゃんは、下が蜘蛛でも上が女の人なら構わないの！？』

「構わないってなんだよ！どういう視点からの突っ込みだそれ！」

『マスターの中での女性度は《妹<下半身蜘蛛の人》なのですかと
いうことです』

「んなワケあるかアアア！両方梓外だ！」

「…女の子なら誰でもいいってこと？」

「違うつつの！何でお前まで参加してくるんだよ！」

なぜか蜘蛛春風を含む全員から、よくわからない非難をされた。

…人間に限らず、命を傷つける行動を躊躇うのは、人として正しいことだと思っただが…。

まあ、確かにぐみの言う通り、これはもう終わった議論だ。それをいつまでもぐちぐち言っていたのだから、非難の1つもされて当然か。

「…よしっ、コンティニューだ。こっから先は、もう迷わない」

気持ちを切り替えるために、そう呟く。

おそらくは偶然そのタイミングで、蜘蛛春風が俺の頭上に飛び上がる。

自分よりもでかい蜘蛛（しかもタランチュラ）が降ってくるのは、何度見ても気持ちが悪い。

逃げるように回避し、反撃しようとする。

「って、また黒の光球かよ…！」

着地するとともに、蜘蛛春風は次の攻撃の準備を整えていた。

自分のふいにしたチャンスが如何に貴重だったか、遅まきながら理解する。

『あれもボールなんだし、こっ、かきーん！って打ち返せないの？』

「……………」

反射的に「馬鹿かお前は」と突っ込みそうになったが、確かにやってみる価値はあるかもしれない。

駄目で元々だし、成功すれば逆襲の足掛かりになる。

慣れないバット（釘付き）を構え、光球が飛んでくるのを待つ。今までの戦闘の中で、あれが一斉に飛んできたことはない。光球の数は3つ。

「きた…っ！」

第一球。は、空振り。

打てなかった光球が俺に命中する。

「く…そ…ッ！」

休む間もなく第二球。

釘バットに光球がミートし、前方に飛んでいくが…

「ハズレか…。ただ返しゃいいってわけじゃねーんだな」

しかし俺を狙って飛来する光球は、明らかにストライクゾーンから外れている。打つことさえ難しいあの球を正面に打ち返すなんて、それこそプログラムの助けでも無い限り俺には…

『…ねえ伶俐、さつきから画面に。とか×とかのボタンが出てくるんだけど、これってなんなの？』

「それだアアア！！」

『え！？え！？何が！？何の話！？』

「話の流れで分かれよ！画面にボタンが出てきたらそのボタンを押すんだよ！」

『…そんな話の流れ、なかったもん…』

子供のように反論をしながら、それでも一応ボタンを押した。

第三球、俺も釘バットを振る。

当たりはしたが、やはり俺を狙って放たれた光球なので、正面からは捉えられず、光球の横を叩くような形になった、が。

光球は放物線を描いて飛んでいき、蜘蛛春風に命中する。

「よっ「痛っ!？」しおー…」

春風と同じ顔したやつに春風と同じ声で悲鳴をあげられると、素直に喜べない…。

同級生の女子を苛めてるみたいな気がしてきた…。

『気に病むことはありませんマスター。あれはあれです、『涙は女の武器』と同じ理屈です』

「ちえっ、バレちゃった。緑野くん優しそうだから、つけ入れると思っただけだな…」

「お前実はそんなしたたかなやつだったのか!？」

俺の持つ春風のイメージがガリガリ変わっていく。今まで学校で見てきたのは、どうやら本当に表層でしかなかったらしい。

…しかし今の会話、なんか違和感があるんだが…気のせいかな?気のせいだよな。

下手に伏線を張るようなこととして、何でもありませんでしたじゃ格好つかねーし。

「でもこれじゃ跳ね返されちゃうんだね。だったら…」

そう言っただけ蜘蛛春風は、先ほどとは比較にならないほど大量の光球を召喚し、それらをそれぞれ五ヶ所に分けて集約し始めた。

「ぐみちゃんたちがお喋りしてるときに、緑野くんには見せたよね」

「あー、見た見た。あのアクセラレータみたいに圧縮して撃つレーザーのやつだろ?」

「あくせろりーた?誰それ?」

「お前が実はとある魔術の禁書目録知っているんじゃないかという疑いが急速に頭をもたげるような確な間違いかただが、本当に知らないのなら気にしないでいいよ」

1つ、また1つと、光球はそれぞれの箇所に吸い込まれ、そのたびに新たな光球が召喚される。

1つ、また1つと。

「そう…あのレーザーをこれだけ撃てば、打ち返せないよね?それとも、今度はバントとかを試してみる?」

「いやいや、バントって自分がアウトになるのが前提じゃん」
そして。

黒い閃光が、俺の視界を引き裂いた。

閑話↓とある少女の日常破綻

『きもい。学校来るな』

そんな内容の手紙が、私の下駄箱に入っていた。
五通ほど。

昨日、一昨日は三通だったのに、少し増えてる…。

本当のことを言えば、私には苛めを受ける心当たりが全く無い…のだけれど、こうして受けている以上、私の何かが彼女たちには気に入らなかつたのだと思う（クラスの男子は直接何かしてくるから、彼らのやったことではないはず）。

それが何なのか教えて欲しかったけど、もし他のクラスの人なら話しかけるのも怖いし、そもそもこの手紙には名前が書いてない。

どこにぶついたらいいのかわからない憤りを吐き出すように、手紙をくしゃくしゃにしてごみ箱に投げつけた。

人の手紙をぞんざいに扱うのは良くないけど、内容も良くなかつたから、おあいこだよな。

「うん？元氣ないねえ、どしたの？おはよー！」

「…何でもないよ。おはよう」

苛め（って呼んでも構わないよね、あれ）が起きてからしばらくして、やつとるかちゃんが異変に気付いた。

…もうちょつと早く気付いてほしかったというのが私の素直な気持ちだつたけれど、これは私が上手に取り繕っていた証だと、前向きに捉えることにする。

その後は他愛のない話をして、先生が来てからそれぞれの席に戻つた。

先生が配つたプリントを、すぐランドセルにしまう。

私の机はごみ箱じゃないのという不満を、呑み込みながら。

だからって何でランドセル？

ごみ箱なら教室の前のほうにあるのに…。

何で私なの…。

「あれ？お前何それ？」

そんなことを考えて泣きそうになっていたら、後ろから男子の声がした。

振り返って見てみると、いつも私に何かしてくる男子が立っていた。

クラスの女の子は、みんなこの子のことが好きらしいけど、私は嫌い。

だっていつも、私のリコーダーを奪い取ったりとか友達と一緒になって私をからかったりとか、私だけに意地悪するんだもん！

男子も女子も、私の何が気に入らないのよ…！

どうせまた、何か意地悪しに来たんだ。そう思ったけど、意地悪

男子は私の予想を裏切った。

「おいこれやったの誰だよ！出てきて謝れよ！」

「ちよっ…！？やめてよ、私平気だから！」

「いいわけねーだろ！隠れてこういうことするやつは最低だ！」

「ええっ…何これ！？そういえば最近元気なかったけど…まさかこれのせい！？」

騒ぎを聞きつけ、るかちゃんもやってくる。

心配かけないように黙ってたのに…！

「私は大丈夫だから、ほつといて！余計なことしないでよ！」

「余計ってなんだよ！犯人捕まえなきゃずっとこのままなんだぞ！？」

わかってたよ、それくらい。

でもね、結果として、それはやっぱり余計なことだった。
その騒ぎの2日後。

下駄箱の中の十通近い手紙の中に、るかちゃんの名前が書いてある封筒を見つけた。

信じられなかった。
信じたくなかった。
だから、私は。

その封筒を開封した。

最初のダンジョンへエントランス・トゥ・ハート」 ↓ 君の価値

「あの…私は本当に平気だからさ」

「うるさいっ！あんたが良くたって私が良くないのよ！」

懐かしい声が聞こえる。

あいつがパーティーから離脱したのはついさっきのことなのだから、懐かしいと言うほど離れてはいないのだけど。

「…あの」

「何よ！？」

多分（ というか確実に ）俺が蜘蛛春風と戦っている間に色々試し、そしてそれらが全て駄目だったのだろう。かなり苛立っているのが、遠目にも分かる。

「春風 薫の一部である私には、人のこと言えないんですけど、あなたはその…拘り過ぎていませんか？」 「……何に？」

「助けることに。あなたからは、私に似たものを感じるんですけど…」

「確かに似てるかもな」

「…っ！？」

自分たち以外の存在の乱入に息を呑む女子2人。

俺はそれに構わず、幸のいる牢屋の中に、先ほどの戦利品を投げ入れる。

「頑固なことか、そっくりだよ」

「…助けないんじゃないの？」

「助けねーよ？ただ、力を貸せそうだったから、貸しに來ただけだ」
人は1人で勝手に助かるだけ。

この言葉は、自分の臆病さや卑怯さを肯定できる。

助けない自分を、正当化できる。

だから俺は…この言葉を好んで使う。

「これハクちゃんの眼帯？」

「ハクちゃん？」

聞き慣れない新たな人名に、今度は俺と、名も知らぬ女子の声が重なる。

ハクちゃんてまさか…あの蜘蛛春風のことか？

「緑野くんはそう呼んでるんだ…。まあうん、そうだよ。《強迫観念》のハクちゃん」

《強迫観念》…なるほど。それであんなセリフを言ってたわけか。……あれ？そっぴやあのレーザー乱射されてからのこと、俺話したっけ？

話したような気がしてたけど…もし話してなかったら、読者はレーザー乱射からいきなり戦闘が終わったように見えるわけか。

じゃあ、ここらで一度しっかりと、あの時のことを振り返ろう。

俺の視界を、黒の閃光が引き裂いた。

かわせない———そう思った。

ロックマンエクゼで言えば、横二列をまとめてぶち抜くようなレーザーが、俺を中心に五本。

かわせないなら、凌ぐしかない。

俺は釘バットを正面に構え（当たり前だがバントの構えではなく、防御の構えだ）、レーザーを防ごうと試みる。

結果を報告すれば、防御は必要なかった。

むしろ邪魔だった。

理由は、誰かが盾になって、代わりにレーザーを受けてくれたからだ。

そして俺は、身代わりになってくれたためにレーザーが直撃し吹っ飛んできた誰かを、あるうことが釘バットで受け止めてしまったのだ。

「おい…！？大丈夫か！？」

正面からレーザー、背面から釘バットの直撃を受けて（改めて文字にしてみると酷い仕打ちだ）踞っているそいつに声をかける。話す順番が入れ替わったために、すでにネタバレしてしまったのは申し訳ない限りだが、当然こいつはあの名も知らぬ女子ではない。この頃のあいつはたぶん、何一つうまくいく方法がなくてイライラし始めたところだろう。

この物語に、決別した仲間が助けに来てくれるとか、それまで敵として戦っていた奴が仲間になってくれるとか、その手の美談はない。

この物語は喜劇であり、愚痴なのだ。

だから、レベル上げのときによく見た服を着て踞っているこの女子だって、敵でも味方でもなくて。

「うう…痛い…」。緑野くん、怪我はない？」

ただの——《お人好し》だ。

「何で…助けたんだよ？」「うん？何でって、何で？誰かがピンチだったら、助けるでしょ？普通」

確かに、『普通』ならそうかもしれないけれど。

俺にとって、お前は敵ではなかったけれど。

お前にとって——俺は仇じゃないのか？

お前の仲間を一方的に傷つけた、憎き敵じゃないのか？

それこそ『普通』なら——蜘蛛春風と一緒にあって、仲間の仇を討とうとするんじゃないのか？

俺の疑問に、俺の詰問に。お人好しはそれでも優しく微笑み、ゆっくり首を振ると、差し出すように両手を広げて、一言。

「大丈夫。私はあなたをいじめないよ」

この物語は、風車に戦いを挑んだ、滑稽な道化の空回りを描いた

喜劇であり、主人公になれなかった道化が居酒屋で溢す愚痴のような戯言だ。

だから道化は――。

終始、涙なんか見せないんだ。

「うわっ！？どうしたの緑野くん、どこか痛いの！？」

直撃を受けた自分よりも、情けない俺を優先してしまうような底無しの優しさに心を打たれたりしないし、これだけ優しい女子を見捨てようとした自分を悔いたりもしない。

「私、底いきれなかったかな！？他のビームが当たっちゃったかな！？」

ただ、それでも確信できる。

名も知らぬ女子の言うとおり、こんなのは嘘だ。

「もー！何してるのハクちゃん！私たちじゃない人に酷いこととして、ダメじゃない！」

他人にこれだけ優しくなれるやつが、幸せになっちゃいけないだなんて。

他人にこれだけ優しくなれるやつが、その優しさを欠片も自分に向けられないだなんて。

そんなの嘘だ。

そういうことにもしないと、あまりにも報われない。

「…伶俐」

『はい、何でしょうマスター』

「この場での会話を他人に伝える方法って、何かないのか？」
わかってる。

世の中には、優しいやつが報われない理不尽が、真面目なやつが損をする不条理が当たり前にある。

『会話…ですか？それはもちろん可能ですが…誰に何を伝えるのですか？』

頑張っても報われない。

努力しても実らない。

春風のこれだって、そんな数多ある理不尽の1つに過ぎない。だけど…。

そんな理不尽が目の前にあるんだ。

例え実らなくても、それを絶とうと努力するくらい、構わないだろう？だって――

「《幸》に…春風に。お前は幸せになっていいんだって、伝えたい」

だって――ここは、ゲームの中なのだから。

少しくらい、夢を見させろや。

『それでしたら、この場をしのいで口頭で伝えればよろしいかと』

「それじゃ伝わらねーと思ったから聞いてんだよ!!」

『ていうかマスター、寄り道し過ぎじゃないですか？読者の皆様も、いい加減話進めてさっさと終わって妹とイチヤイチャしてろみたいに思っているのではないでしょうか』

「途中までは本当にそう思われているんじゃないかと肝を冷やしたけれど、最後まで聞いてみると読者の代弁というよりお前が面倒くさくなっただけだよな!？」

『正直ぶつちやけますと、マスターが他の女性のために頑張ることがおもしろくありません』

「そりゃ娯楽性は無いかもしれないが…」

人を助け…人が助かる手伝いをするんだから、面白いかつまらないとかじゃないだろうに…。

この温度差は何なんだ…？

ままならねえなあ。

『…伶俐、しょうがないよ。にーちゃんは、こーいう人だから』

伶俐と俺の議論をまとめるように打ち切るぐみ。

その目は、どこか諦めたような、それでいて、こうなることを期待していたような…そんな目に見えた。

『あの蜘蛛は、身に着けているものも含めて1つの感情です。なので、彼女の所持品を1つ剥ぎ取れば、この場で起きたことの記憶を回収できます』

「剥ぎ取るって…。他に何か言い方はなかったのか？」

その言い方だと、俺が犯罪者みたいだ。

いや、どう取り繕っても、やることは完璧に強盗かひったくりのそれなのだけど。

『大義名分を得たからといって、彼女の服を剥ぐとか止めてくださいね』

「俺いつの間にそんな最低認識されてたんだ！？やらねーよそんなこと！」

少しは兄貴を信用してほしいものだ。

続いて俺はぐみを見る。

画面越しに、互いが互いの目を見て語り合う。

意思の疎通は完璧だが、それでもお互い、声に出す。

誤解を生まないために。

「春風を助けたい。力を貸してくれ」

『それでこそあたしのーちゃんさ！』

蜘蛛春風に向き合う。

と、足元からひょいと、昆布が生えてきた。

見てみると、いつの間にやら現れた《昆布大好き》が、俺に回復アイテムの昆布を差し出していた。

そいつを受け取り、頬張る。

今までのダメージが回復し、力がみなぎってくる。お人好しも同じように、昆布大好きからもらった昆布で回復していた。

「コンティニューだ。自分勝手に悪いけど、負けたくない理由が出

来た」

「ゼーんぜん構わないよ！そんなエモーショナルな変化だけでは、現実を変えられないもの！」

瞬間、始めのそれがただの遊びでしかなかったと思い知らされるような大量の光球を、蜘蛛春風は召喚した。

荘厳な空間が、やり場のない狂気で満たされ、それとともに、召喚された大量の光球がタ立みたいに降り注ぐ。

「——ッ！！」

全てを。

俺の体は、俺自身が認識できない速度で駆動し、降り注ぐ全ての光球を弾きとばした。

『えと…画面にボタンのマークが出たから反射的に押しちゃったけど…良かったのかな？』

「ああ、ファインプレーだ——！」

言いながら、地面を蹴って蜘蛛春風に飛びかかる。

「いつけエエエ！」

使用したスキル・フルスイングが空を切る。

釘バットを降りおろすその瞬間、蜘蛛春風がその場から消えたのだ。

『上です、マスター！』

伶俐の声を耳に捉え、俺は振り返るように上を見る。

蜘蛛春風は、比較的広いこの空間を所狭しと跳び上がり（頭なんか天井ですりおろしてんじゃないか？）、俺のはるか後方に着地した。

「あれは…！」

俺に向き直った蜘蛛春風は後ろの四本脚で立ち上がり、前の四本脚を俺に向ける。

そして、それぞれの脚に黒い光を灯すと、機関銃のように掃射する——！

「うおおおおおお！？」

伶俐の強化プログラムがぐみのコマンド入力（と言っても画面に表示されたボタンを押すだけだが）で発動し、俺の体が本人の意思とは無関係に黒い光球の雨をかくぐる。

「く……ああああああ！！」

数多の光球を避けながら進む俺に対し、これ以上の銃撃は無意味と判断したのだろう。前四本の脚の黒い光を、銃弾ではなく剣の形に放出する。

俺の身長のはらはあろうかという黒い光の大剣。それが四本、俺目掛けて降り下ろされる。

『させないよっ！』

前転。

体が勝手に回って四本の大剣を回避し、そのまま懷に潜り込む！

「残念だったわね、ここでゲームオーバーよ！」

「は……！？」

蜘蛛春風の怒涛のラッシュ、ラストを飾ったのは蜘蛛の糸だった。回避は、間に合わない。

左右に蜘蛛の脚、前に糸。

ここで後方に退いてもその場しのぎにさえならない。蜘蛛の糸が当たるのが、少し遅くなるだけだ。

だから、俺は……釘バットで、糸を巻き取った。

「な……っ！？」

扇風機に例えれば伝わるだろうか、釘バットを回転させ、飛来した蜘蛛の糸を巻き取る。

そのせいで釘バットは使えなくなってしまったが……。

「……くうっ！」

持ち上げていた前の四本脚を、おもいきり降りおろす蜘蛛春風だがその脚は俺を狙ったものではなかったらしく、むしろ警戒すべきは結果として脚とともに落ちてきた胴体のほうだった。

「うっ……おおお！？」

蜘蛛春風ののしかかりを食らって（ガルボキューブのCM風に

言うならモサツとぐにやつとしていて、かなり嫌な感触だった。地面に突っ伏していた俺の背中、何か巨大なものが飛び上がったかのような風が巻き起こる。

起き上がってみると、俺の上にいたはずの蜘蛛春風がない。

「危ない危ない。危うく嫁入り前の体に傷を付けられちゃうところだったよ」

頭の上から声が降ってくる。

見上げると、蜘蛛春風が天井のはじつこのほうにくっついていた。蜘蛛春風の身長（この場合は、地面から頭までの高さのことだ）は俺の倍。天井はそんな蜘蛛春風のさらに倍高いところをふさいでいる。

「これだけ高いところにいれば、緑野くんの攻撃も当たらないよね」

「確かに。最適化されている今の俺でも、そこまでは届かない」
1人なら、何をやっても届かない。

だけど2人、そして3人なら。

「お人好し！昆布！」

俺は助けに来てくれた2人の春風を呼ぶ。2人はなぜ呼ばれたのかわからないといった風だったが、蜘蛛春風には通じたようだ。

「そんなのさせないよ…！あんな2人、私なら簡単に消せちゃうんだから！」

「春風！！」

「いや、俺以外の全員が春風だから、この呼び方だと誰を呼んだかわからないのだけだ。」

だけど、反射的にそう叫んでしまった。

当然、蜘蛛春風はそんな叫びを意にも介さないし、2人に至っては俺が叫んだのかもわかってなさげだったけれど。

そんな2人に、無慈悲にも黒い光球が掃射される。

あの2人は、ゲーム開始直後の俺の攻撃さえかわせなかった。そんな2人に、先ほどの俺みたいに全て避けると言うのは、あまりにも酷だろう。つーか俺のあれだって、ドーピングの賜物だし。

被弾。

黒の光球が、2人に降り注がれる。2人はかわす素振りも見せず……悪意の雨に、呑み込まれた。

「……………っ！」

が、その直後。

俺は信じられない光景を目の当たりにした。

いやもう、本当に色んな意味で信じられない。

「避けられないんなら、当たるたびに回復すればいいんだよ！」と。

彼女たちの姿は、そう語っているようだった。

「「昆布食べながら走ってくる！？気持ち悪っ！！」」

俺と蜘蛛春風の意見が合った、唯一の場面である。

そう。

回復アイテム『昆布』。助けに来てくれた春風の1人、昆布大好きは、そのアイテムをどうやら無限に持っているらしく、お人好しと昆布を分け合いながら食べ合いながら、こちらに走って来ているのだ。

……うん、蜘蛛春風を倒すにあたって、確かにお前たちの力が必要だし、そんな俺の意図を知ってか知らずか、おそらく知らずに俺に呼ばれたというだけでそこまで頑張ってくれるというのは嬉しいけれど……ごめん、やっぱ気持ち悪い。

あまりの異様さに気圧されたのか、蜘蛛春風の攻撃が止む。その間に俺は2人と合流し、蜘蛛春風のところまで跳ぶのを手伝ってほしいと伝えた。

「じゃあまず最初に私がすーちゃんを踏み台に跳ぶから、緑野くんはその後同じように跳んで、さらに私を足場に飛び上がる！そんな感じでおっけー？」

「いやいやいや、よくねーだろ。俺はノーダメージだから構わないけど、お前ら踏まれるんだぞ？」

しかもすーちゃん（たぶん昆布大好きのことだと思う）なん

か自分の三倍ほどでかいやつらに二回踏まれる……てか踏み潰されるわけだし。

「んー……でも私たちの力じゃ緑野くんをあそこまで連れていけないし、私たちが行ってもダメージは与えられないし」

だから、よろしくね緑野くん。

お人好しがそう言ってこの議論を打ち切ると、すーちゃんは既にスタンバっていた。うーむ、潔い……。

「……よしっ！」

掛け声とともに、すーちゃんに向かって駆け出すお人好し。

そしてその2人を、再び蜘蛛春風の攻撃が覆う。

「く……っそお！」

お人好しに続き、俺も釘バットを捨てて走る。

蜘蛛の糸を巻き取るのに使ったため、もう武器としての役割を果たしそうにないし、走るにあたって邪魔だと判断したからだ。

女子をあんな銃弾の雨みたいな攻撃にさらしているという事実が俺を苛んだが、そんなことを言っている場合ではない。

他のことに気を取られて失敗しましたでは、それこそ申し訳なすぎる。

「よっしやーっ！」

威勢のいい掛け声とともに、まずはお人好しが。

その後、同じようにすーちゃんを踏んで、俺も飛び上がる。

そして――

「緑野くん！」

「……悪いっ！」

お人好しの背中を借りて、俺はさらに上へとジャンプする！

「――ッ！」

目の前の蜘蛛春風の表情が驚愕のそれに染まり、続いて俺に狙いを定める。

「幸は出しちゃいけない……私は幸せになっちゃいけない！あの子に酷いことをした私が幸せになるなんて許されない！！」

ここで格好いい台詞の1つも決められないから、俺は主人公になれないんだろうな。

羽が生えてるわけではないので、俺の滞空時間は僅かだ。足場も不安定だから、威力も落ちる。

勝負は一瞬。

落下の瞬間であれば、足場の悪さによるダメージの軽減は緩和できるとは思う。

その瞬間が訪れる前に、ありったけの力を拳に込める。

無論、釘バットよりは数段威力は落ちるが、何の問題もない。

グレた少年少女を叱るときは、コイツを使うものと相場が決まっている。

「いい加減目エ覚ませこの加害妄想少女がアアア!!」

これだけ優しいやつが、これだけ反省しているんだ。

何やったか知らねーけど、お前は道を踏み外してしまったのかもしないけれど。

幸せになっちゃいけないなんてことは、ないんじゃないかな。

——とか。

そんな色々を見終わつたのだろつ、幸はゆつくりと眼帯を外す。
そして細いため息を1つつくと、俺に視線を注いだ。

「……えつと」

「……………」

何も言わず、ただじつと俺を見つめる幸。

その目は何も考えていないようにも見えるし、また全てを見透かしているようにも見える。

語り部がこんなことを言っているのかと自問せざるを得ないが、見たものをどう感じるかなんて、観測者によって違っているし、観察者によって異なっているのだ。

「例えばもし」

とか、益体のないことを考えていたら、幸がいきなり声をかけてきた。

本当にいきなりだ。

結構ビビった。

「例えばもし、親友を酷く裏切った人がいたとして、そのせいで親友は遠くに逃げなくちゃならなくなったとして、裏切ったその人はそれでも許されると思う？」

……うん、まあ。

考えるまでもなく『その人』は春風なのだろうけれど、さて難しいことを聞かれたものだ。

正直なことを言えば、俺の答えは「そんなの知るか」である。

非難も批判もあるだろうが、完全な他人事なので、本音はそんなものだ。

大体俺に何を期待しているんだ？俺はついさっきお前を見捨てるという決断をした男だぞ？

これっぽっちも正しくない、間違いだらけの外れた人間だ。
そんなやつに感動の名言を求めるなよ、俺は上条 当麻じゃない
って前置きしておいただろうが。

ん？いや待て、そういやこの場にはもう1人いたじゃないか。

そうか、そっちに聞いてたんだな。それを俺ってやつは、勝手に
自分に聞かれたと思い込んで、自意識過剰も甚だしげ。やれやれ、
いらぬ恥をかいちゃったな。

「……………」

「……………」

そう考えて名も知らぬ少女を見ると、めっちゃ俺をガン見してい
た。

明らかに俺が話すのを待っている。

……………ええー。

マジでか。

つーかお前は俺が間違えてんの知ってんじゃん。何で俺？

「（だって、何て言って説得したらいいのかわからないんだもん
）」

「（アホかアア！そんなもん俺だって知らんわ！）」

「（けどあんた高校生くらいじゃない！だったらあーゆーのを説
得する方法の1つや2つ知ってるでしょう！？）」

「（高校生を買いかぶるな！知るわけねーだろ小説の主人公じゃ
あるめーし！大体高校生つーならお前だって同い年ぐらいだろう
が！）」

「（残念でした、私は小学生ですー！！）」

「（そんなにスタイルのいい小学生がいるかアアア！高校生で
もなかなかいいねーぞ、そのプロポーションのやつ！）」

「……………やっぱり、許されないよね」

見たものをどう感じるかなんて、観測者によって違っていき、
観察者によって異なっている。

幸は俺たちの沈黙をそう解釈したらしく、消え入るように呟いた。

「そんな……っ、そんなことない！」

慌て幸の解釈を否定する少女。

けれど、続く幸の言葉に言い返せず、再び黙ってしまふ。

「どうして『そんなことない』なんて言えるの？あなたは私に裏切られたあの子じゃないのに」

「だって……あんたは優しくて……」

「それでも私は裏切った。その事実、私の人格が何だったとしても覆らない」

「……………っ」

悔しそうに顔を歪める少女。その悔しさをぶつけるように俺を睨む。

なんとかしろ、ということなのだろう。

あいつに自分の幸せを肯定させろと。

そういうことなのだろう。

やれやれ、無理難題を押し付けてくれる。

この手のやつは、自分にとってプラスなことは信じない。マイナスのみが真実だと思い込み、信じ込む。そんなやつを幸せになんてできるわけがない。

本人が助かるうとしない限り……周りの助けは無意味だ。

だから俺は、助けることを諦めて、一言だけ。

「許されないと思う」

「な……っ！？」

「……………うん」

少女の目が見開かれ、幸は肅として受け止める。

少女は何か言いたげだったが、それらを言葉にできないでいるようだ。

相当混乱しているらしい少女をスルーし、俺は続ける。

幸を、春風を追い込む言葉を、紡ぎ続ける。

「大切な誰かを裏切ったなら、そのことを後悔しているのなら、お前は許されるまで許されちゃいけないし、罪に対する罰を背負わなければならないと、俺も思う」

「……うん」

今の春風にとって、自分の考えや行動を肯定する俺の言葉はむしろ救済となっているようで、幸はいつそ心地よさそうに首肯する。

「だから……」

だから俺は紡ぐ。

お前は間違っているんだと伝えるために、お前は幸せになっていいんだと伝えるために、間違った言葉を紡ぎ続ける。

「だからお前は……幸せにならなきゃ駄目なんだ」

「…………え？」

きよとんとする幸と少女。

……流れで納得してもらえるかと期待したけどやっぱり無理だった。

当たり前だ。

上条さんレベルの熱弁であつたならともかく（それでも無理だろ）、ああも脈絡がなくては吉井 明久でさえ論破でき『そ！そ！うだったのかぁー！！』ないと思っただけ、説得されている馬鹿がいた。

残念極まりないが、我が愚妹だった（言うまでもないが、上の妹のほう）。

あんなずさんな説得に感化されたうちの馬鹿は置いて、俺は脳をフル回転させる。

あの欠陥だらけの説得に説得力をもたせるための、悪知恵を巡らせる。

「幸、お前は何で幸せになっちゃいけないんだ？」

「え？ いやだから、大事な親友を裏切ったから……」

「幸せになることが後ろめたい。幸せになることに罪悪感を感じる」
首肯する幸。

「だからだよ。だからこそお前は幸せにならなきゃいけないんだ。
幸せになつて……」

「その後ろめたさを、その罪悪感を背負つて生きなければならない。
それが、お前に課せられた罰だ」

「……………！！」

2人の少女が絶句する。
まあ、当然か。

幸せになることが罰とか、あまのじゃくにも程がある。どんだけ
ひねくれているんだお前はという話だ。
しかしこのリアクションを見る限り、説得は成功したと考えてい
いだろう。

間違えまくつた説得だけど。
外れまくつた説教だけど。

「……………ここから出て……」
荷を分けてもらつどころか、更なる重荷を押し付けたようなもの
だけだ。

残念ながら、俺には正解がわからない。

何もできない俺は、不正解することしかできない。

情けないことに。

みつともないことに。

けれど。それでも。

「ここから出て……幸せになつたなら

「いつか……許してもらえるのかな？」

「本当に本当の意味で……」

「幸せに、なれるのかな？」

情けない俺の言葉を、みつともない俺の説得を、《幸》は信じている。いや、信じたいと願い、縋っている。

なんだよ。

なんだかんだ言って……やっぱり、幸せになりたいんじゃないかよ。

まあ、こいつは春風の《自身の幸せを望む》感情だしな。

きっかけがあれば、きっかけさえあれば、自分で自分を助けることのできる感情だ。

けれど。それでも。だから――

「なれるよ。絶対許してもらえし、必ず幸せになれる。健気な少女に意地悪すんのは、継母かその娘だけだぜ」

だから俺は、信じてるよ、それは必然だって。

お前は謝ったんだ。

涙の数だけ謝ったんだ。

だったら許してもらえよ。

お前は確かに、親友を裏切ったのかもしれないけれど。親友と過ごした幸せは、儚く散ってしまったかもしれないけれど。

お前らの友情は、そんなことで散ってしまうほど儚くは、きっとないだろう？

だって相手は、重度のお人好しにして極度のおせっかいなお前の、親友なのだから。

春風の話↓バッドエンドに始まるエピソード

なんかね、始まりはとある女の子の嫉妬だったらしいの。

あ、この女の子っていうのは、私の親友のみつちゃんじゃないよ？みつちゃんはあんなことする子じゃないもん！

確かに変な子だったけどね……。何が变つて聞かれたら、えーと

……チョイス？

覚えてる範囲でいえば、季節の春のことを『虫さんが起きてくる季節』って言つてたりとか、私のことをるかちゃんって呼んでたりとか……。

私が『はるかぜ』だから、真ん中からとつて『るかちゃん』だつて言つてたけど……何でよりによつてそこを選んだのか、未だにわかんないよ。

あれで本人は普通って言い張ってるんだから、筋金入りだよねえ

……え？私も対して変わらない？失礼な！

私は普通だよ！

……その『五十歩百歩』って発言の真意を、お説教混じりに聞いただしたい気持ちだけど、今はその話じゃないから我慢してあげよ。

私とみつちゃんの、終わりのお話だもんね。

そう、嫉妬。

……七つの滞在？何それ、旅行記か何かかな？

話の腰を折らないでよ！今はガリバーさんの話はしてない……つて待つて待つて！何で呆れてるの！？私が呆れられるの！？

うう……話の腰は折られるし呆れられるし、散々だよ……。呆れたいのは私のほうなのにー……。……つていいひゃいいひゃいいひゃい！にゃんへほつふえはふおひっひゃふほ！？いいひゃいいひゃ、ひゃう

えへ〜！

うう〜、ほつぺた痛い……いきなり何するのよー！……え？え！？何言ってるの！？外れないよ！？ほつぺたがとれるのはコブとりじーさんだけだよ！ちよっ……やーめーてー！

その日、みっちゃんは学校に来なかった。

その日から、みっちゃんは学校に来なかった。

前の日から、みっちゃんは転校していた。

私はその原因を知っていたし、その原因の片棒を担いだのだから、「やっぱり」とは思ったけど、同時に「良かった」とも思った。

「良かった」。これで私はみっちゃんに酷いことをしなくていいし、みっちゃんは酷いことをされないでいい。

「やっぱり」。みっちゃんは辛かったんだ。ううん、そんなの当たり前。靴の入る場所もないくらいたくさんあくいの手紙を、下駄箱に詰められていたんだから。辛くないわけがない。

この苛めには最終的に、学年全ての女の子が参加した。

もちろん、積極的に参加した子なんかほんの一握り。あとの子はつまり、脅された。言い訳みたいでなんか嫌だけど、このことだけは、言い訳させてほしい。

私も、脅されて参加した。『やらないなら、学年の子全員に無視させる』って脅しに負けて。

あの子の後ろに、縮こまった私の友達の姿を見て（親友はみっちゃんだけだけど、友達だったたくさんいた）、それは身近な脅しなんだとわかり。

あの子の怖いくらいの嫉妬に、呑み込まれた。

そう、嫉妬。

私たちのクラスに、人気者の男の子がいたんだけど、あの子はその男の子のことが好きだったらしくて。

そして、男の子がみつちゃんにちょっかいを出すのが気に入らなかったらしい。

そんなこと言われたって困るよねえ……知らないよ、そんなこと。どう考えたってみつちゃん悪くないし、というかこんなことやってるから好きになってももらえないんだよ。

……そう言えたら格好よかったのかもしれないけど、できなかった。

嫉妬に狂うあの子の後ろにいる、私の友達。

申し訳なさそうにうつむいている、私の友達。

断れば、小さく縮こまったあの子は、嫉妬の子の宣言通り、きっと私を無視する。

たぶん私と同じ、もしかしたらそれ以上の脅しを受けたあの子は、嫉妬に狂ったあの子に逆らえないんだ。

怖い。

1人になりたくない。

そんな風に思ってしまった私は、最低なことに……

親友を、1人にしてしまった。

放課後の下駄箱。

周りには誰もいない。

いるのは私と、嫉妬に狂ったあの子だけ。みつちゃんの親友だった。

た私には監視がついた。

私の手には、さっき書いた手紙が入った封筒。自分の手で入れな
さいと嫉妬の子が言う。

『誰かがこの現場を見つけてほしい』そんな風に思って、出来る
限りゆつくりと動く。

早くしてと怒られた。

みっちゃん、ごめんね。

1人にしちゃって、ごめんね。

届くはずもないごめんねを、心の中で繰り返しながら。

手紙を下駄箱の中に入れた。

春風の話↓わたしの罪と罰

あの日から。

みっちゃんが、転校してしまったあの日から。

私は手当たり次第に人助けをした。

そうすれば許してもらえと思ったから。

そうすることでしか許されなかったから。

『そんなことはない』なんて言う人は、一度自分で体験してから言っしてほしい。

望まない形で望まない裏切りをしてから言っしてほしい。

知らなければ何とで言えるんだ。

知らないから何でも言えるんだ。

助けなくちゃ。

私が助けられなかったみっちゃんの間まで、私が助けなくちゃ。

何人助ければ許してもらえるかわからないけど。

何もしないでいるよりは、許されると思うから。

そんなわけで、私は今、1人の男の子に声をかけている。

「緑野くん！一緒に帰ろー！」

緑野 淋漓。

あんまり男の子っぽい名前じゃないけど、男の子。

すごく可愛らしい顔立ちをしてるけど、男の子。……ホントに可愛いよねえ……お化粧とかしたら、私勝てないんじゃないかな。

さすがは『この人が可愛いランキング』第三位（誰がつけてるんだろう……）だよ。私の順位？ふっふっふっ、実は私もトップ10に入っているですよ！

やー、これが今の私のちよつとした自慢なんだよねえ。だって校内の可愛い人10人に選ばれたんだもん！……具体的な順位は言わないけどね。緑野くんより下なのがバレちゃうし。

べ、別に私が緑野くんより可愛くないとかじゃないと思うんだよ。だって上位3人全員男子だし！えーと、ほら！私の友達が言ってたあれだよ『ギャップモエ』ってやつだよ！意味知らないけど！

友達に『モエって何？』って聞いたたら『あんたにはまだ早い』って言つて、教えてくれなかったんだよねえ。えっちい意味なのかな？

「……おーい春風、どうした？帰るんじゃないのか？」

「え？あ、うん。緑野くんは可愛いよ」

「いきなり何の話だ！？俺は可愛くなんかねえ！」
力強く否定する緑野くん。

友達によると、見た目に対しての一人称の背伸び感や、こーいうつんけんしたところがいいらしいから、緑野くんの努力は完全に裏目に出てると思うんだけど……。

「ったく……でも何で一緒に帰ろうなんて言い出したんだ？」

そうだった、本題はそっちだった。

「そーだよ！にーちゃんはおたしと一緒に帰るんだよ！」

大好きなお兄ちゃんとの下校時間を邪魔されて、ぐみちゃんおかんむり。

緑野くんは私を有名人って言うけど、かくいう緑野くんも、ぐみちゃんとの関係がよく噂されるんだよね。

「妹があれだけべったりなのに嫌がらないのも、あそこまで露骨な好意に気付かないのもあり得ないよ。あの2人は既に兄妹の垣根を越えて付き合ってるんじゃないかな」って私の友達も言ってたし…… 最初聞いたときは、正直ちよつときめいちゃったよ。

友達が止めるのも聞かずぐみちゃんに「ぐみちゃんってお兄ちゃんと付き合ってるの？」って確認したら、「そんな簡単にいくかバカー！にーちゃんは渡さないかんね！」って、泣きながらどこか行っちゃった記憶がつい昨日のことのようだよ。ていうか昨日のことだよ。

……うん、また話が逸れちゃった。緑野くんの質問は「何で一緒に帰ろうなんて言い出したか」だったね。

当然理由はあるけど、それを言っただけで警戒されちゃうとやりにくいからね。長い人助け生活の経験は伊達じゃないよ！

「友達が一緒に帰るのに、理由なんかないよ！」

胸を張って言うともたやらしい目で見られると思ったから、ガツツポーズ。

あの食い付き方は冗談なんだろうし、まあ、男の子ならそういうのに興味を示す方が健全だって話は聞くけど…… やらしい目で見られるのはやっぱりだよ。

「友達って…… 朝のときもそう言っていたけれど、俺はいつの間に友達になってたんだ？」

呆れたようにぼやく緑野くん。

うん、自分で言っというてあれだけど、私もわかんない。

「安心して！私も記憶にないよ！」

「余計不安になった！」

「友達って、なるうって決めてなるものじゃない…… いつの間になってるものなんだよ！」

「1つ前のセリフがなければ心に響いたのに！」

しょうがないじゃん、思い付いたのがついさっきなんだよ！

「というわけで、一緒に帰ろ！」

「何が『というわけ』なのかがわからない！」

「まあいいじゃん、一緒に帰るくらい。緑野くんだって女の子に興味津々なんだから、悪い話ではないですよ？」

自分をエサにするようなことを言ってしまった。

いつも周りの人に注意されるけど、こーいう向こう見ずなげんどーは控えないとなあ……これじゃ私がえっち子みたいだよ……。

「確かにそうだな。うん、その通りだ。よし、一緒に帰ろう」
食い付いた！

身の危険を感じるほどに食い付いた！

どうしよう、緑野くんを助ける代償に私が貞操の大ピンチ！

「だーめー！！にーちゃんはあたしと一緒に帰るのー！」

お兄ちゃんと2人きりの時間を邪魔されたくないぐみちゃんが、
ただっ子みたいに私を拒絶する。

……うん、正直私もそうしたいけど……そうしないと何されるかわかんないけど、ここで退くわけにはいかないんだよ！ここで退いたら、私がただのえっち子で終わっちゃうんだよ！

「3人で一緒に帰るっていう選択肢もあると思うんだけど……それもだめなの？」

「だめだめだめー！！にーちゃんも何か言ってよ！」

私にお兄ちゃんを盗られちゃうと思ったのか、必死に拒むぐみちゃん。

可愛い妹にこんなに慕ってもらえて、緑野くんは幸せ者だねえ。

「俺は別に構わないけど……何がそんなに嫌なんだ？」

代わりにぐみちゃんが不幸せっぽい！

でもぐみちゃんはこんな緑野くんでも大好きなんだから、不幸せっていうのは違うかな？こーいうの何て言うんだっけ……不憫？

びつくりするほどニブチンなお兄ちゃんを涙目で睨んだぐみちゃん
は、

「にーちゃんのバカーー!!」

って叫んで、消えちゃった。って消えちゃった!?

「み、緑野くん!どうしよう、ぐみちゃんが消えちゃった!」「あー、大丈夫だよ。座標をずらして変化を解いただけだから、今は俺の制服の中にいる」

緑野くんの言葉は半分近くわかんなかったけど(ザヒョーってなんだろう、何かのリアクション?)、つまりぐみちゃんは緑野くんの制服の中にいるってことらしい。とりあえずひと安心。

「……緑野くんを好きになる女の子は大変だねえ」

自分の気持ちを伝えるだけでこんなに大変なんだから、そこから先はもつともおーっと大変なんだろうなあ……。

「へ?何だよ急に?何で今の流れからそんな結論が出てくるんだ?」

「……ニブチン」

「? ???」

大変だねえぐみちゃんも……。

私が緑野くんと下校するのには、ちゃんと目的があるんだよ?それはねえ、緑野くんから感じる困ったさんオーラの原因を探ること!

長い人助け生活が、私に悩み事を抱えてる人を雰囲気で見分ける力をくれたのだ!って友達に言ったら『それはただの経験則じゃない?』って言われた。けーけんそくが何かわかんないけど。

緑野くんは上手に隠してるつもりかもだけど、私の目は誤魔化せないよ!勉強はできないけど、人助けさせたらプロですよプロ!さりげなく悩みを聞き出すとか朝飯前ですよ!

みっちゃんへの贖罪で始めた人助けだったけど、これが意外と私の性に合ってたみたいだね、今ではほとんど生き甲斐だよ。

人助けが贖罪じゃなくなった今、私は何をすれば許してもらえんだろう……そんなことと、緑野くんからどうやって悩みを聞き出そうかを考えてたら、下駄箱のところに着い……

「……………」

ああ、そっか。

これがあつたつけ。

人助けが贖罪じゃなくなっても、私がみっちゃんへの手紙を代わりに受けるっていう購いが残ってたよ。良かった良かった。

あの子も酷いこと考えるよねえ、みっちゃんるときもこうだったよ。

ラブレターみたいな見た目は、受け取らずに捨てられたときに『人のラブレターを捨てた酷い奴』っていう大義名分を得るためのものだった。

望まなかったとはいえ、同じことやってた私にはタネがバレてるのに。芸がないなあ。

もつとも、だからといってあの子が書いたものを受け取るなんてあり得ないけど。

だから、どんな裏があろうと、こんなものはばーい。

「ちよつと待てエエエー!!」

「うん？どうかしたの、緑野くん」

まるで信じられない光景を見たような顔をしてるけど。

「どうって…今の、は…」

「あはは、心配してくれるの？優しいね、ありがとー。でも大丈夫だよ」

全く、みっちゃんは優し過ぎるよ。わたしがこんな目にあってるのは自業自得、身から出た錆なのに、自分を裏切ったわたしを心配してくれるなんて。「これは罪で、わたしが背負うべき罰なんだよ。だからへいき」

わたしはみつちゃんを裏切った。

そんなわたしが、みつちゃんへの苛めを肩代わりできるなんて、むしろ夢のようだよ。みつちゃんを助けるチャンスが、再び巡ってきたんだから。

「今度こそ、わたしが助けるからね」

不安そうな顔のみつちゃんにそう言っで、わたしは家にかえりました。

あ。

緑野さんと帰る約束、すっぱかしちゃった。

春風の話 ↓ Happy Birth Day

「落ち着いて聞いてね、春風さん」

「う……うん？どうしたの、黒兎くん？」

お昼休みに友達とお弁当（今日は少し奮発した、ちょっと高級な昆布だよ！）を食べていたら、急に黒兎くんが私に声をかけてきた。

ホントに急に。

まるで、ついさっき私にいきなり用事が出来たみたいな突然さだった。

告白か告白かと色めき立つ私の友達（からかわないですよ……）には目もくれず、黒兎くんは真剣な表情で私に——告白する。

「君は、妖怪変化が始まっています」

「……………え？」

……………何それ？ホント？ドッキリとかじゃなくて？

……………じゃないよねえ、黒兎くん真剣そのものだもん。衝撃の告白だよ。

妖怪変化かあ………テレビではよく見るけど、まさか私が遭うことになるなんて……。

「そんなものだよ。妖怪変化は今や交通事故より身近な事故なんだから。まあ事故よりは病気のほうが近いかもしれないけどね」

事故と違って、対処法があるし。

そんな風に言って、黒兎くんは懷から一枚のお札を取り出した。お札には、なんか面白い線で面白い模様が書いてある。なんて言うんだっけ、そう符術！あれで使うお札のイメージとそっくりのお札だった。

「じゃあ、ちょっと失礼するよ」

そう言つて、私のおでこにお札を貼る黒兎くん。なんだっけ、中国にこんな妖怪がいた気がするよ……。

私のおでこにお札を貼ったまま、何か呪文みたいな言葉を唱える黒兎くん。それと同時に、おでこのお札が優しく光り、温もりが私を包む。……なんかわかんないけど、泣きそうになるよ、これ。

1分くらいかな、その状態が続いて、お札が光らなくなった頃に、黒兎くんは私のおでこからお札をはがして一息ついた。

「ふう……っ、これで終わりだよ」

「あ……うん。ありがとね、黒兎くん」

「お礼を言うのはむしろ僕だよ。春風さんが協力的なおかげで、対処も滞りなく施せたし」

その言い方だと、協力的じゃない人がいるみたいになっちゃわない？

「それじゃ対処はこれで終わりだけど、負荷を受けて心が弱っちゃってるから、しばらくは心に負担がかかるようなことしちゃダメだよ」

「はい」

「具体的には、他人に関わらないようにすること。だから当然、春風さんの過剰な親切も当分お休みね」

「ええ……！？」

そんなの、余計心に負担だよ！おーぼーだよ！待遇の改善をよーきゅーするよ！

「見知らぬ他人と関わるってことは、春風さんが思う以上に心に負荷がかかることなんだ。心の能力『繋がる力』を使うってことだからね。RPGでも、魔法を使えばMPが減るでしょう？MPが0になったら、春風さんの心は妖怪変化に抗えなくなつて堕ちてしまうんだから。だからくれぐれも、心に負荷をかけないようにしてね」

そう言つて黒兎くんは、緑野くんたちのほうに戻っていく。机の上を見るとお昼の途中っぽく見えるけど、まさか食事中に私の妖怪変化が発覚したのかな？

実は伶俐ちゃんに指摘されて気付いたとかなのかも。なーんて、そんなわけないよね。黒兎くんだってプロなんだから、何か理由があるんだよ。

結局その後は特に何もなく、友達とお昼ご飯を食べたり話したりして、お昼休みは平和に過ぎていった。

「ただいまー」

学校が終わって、家につく。

リビングに顔を出して、家事をしているお母さんに帰宅の挨拶をすると、とても楽しそうに『部屋に行ってみなさい』って言うてきた。何なんだろう……？

考えながら階段を登って、2階の私の部屋へ。ドアを開けて入ると、勉強机の上に1通の封筒が置いてあった。

何だろうと思って見てみたら、そこには見慣れた筆跡で私の名前とうちの住所が書いてある。

「……………」

どこで見た字だったかがすぐに思い出せなくて、手に取って裏をしてみる――

そこには、みっちゃんの名前が、書いてあった。

「嘘……何で……!?!」

みっちゃんが手紙をくれた……？あれだけ酷いことをした私に、手紙をくれた？何で……何が、封筒の中の手紙には何が書かれてるんだろう……？私は……許して、もらえたのかな？

――そんなわけないでしょ？書いてあんのはきつと、裏切り者への

恨み言よ――

「ッ！？誰……！？今の、誰なの！？」

頭の中に直接響くような声が聞こえる……まさか、これが妖怪変化！？

――あつは！まあーそーなるのかにやー？私の記憶が正しいなら、わたしは世間一般で言うところの妖怪変化だけど……その呼び方だと長いし、可愛くないわよねえ。私が何か考えておいてよ！――嫌……ッ！私から出てって！

――えー？わたしは私の妹みたいなもんなのよ？それを出ていけだなんて、お姉ちゃんひどーい！やっぱ、親友を裏切るような悪い子だったんだねえ――

「悪い……子……？」

――うんうん！助けられたはずの親友を見捨てて裏切って、終いにや他人をその親友の代替品みたいに助けてさ？こりゃーもー取り返しのつかない悪い子だね！なまはげも呆れるレベルだよ！――

「違う……！私は……わたしは……！」

――そう思いたいってだけの話でしょ？違うっつーなら何が違うのか具体的に言ってご覧？片っ端から論破してあげるし、確かに違うってわたしが思ったら……――

「『ごめんなさい』って謝って、お姉ちゃんの悪い子認定を撤回してあげるよ！」

――違う……違うもん……！わた、わたし、は……――

「ふーん、これが私の体かあ……。さっすがわたしのお姉ちゃん！すっごく素敵で可愛らしいよ！」

――違う……違う……違う……！――

「あーもー、いつまでもイジイジグズグズうつさいなあ！もう過ぎたことなんだから、いーかげん吹っ切れなよ！」

つつても、お姉ちゃん（なんかいいなあ、この呼び方）が本当に吹っ切れちゃったら、わたしは消滅しちゃうと思うけど。言ってみれば、わたしはお姉ちゃんの『後悔』そのものだからねえ。

改めて、お姉ちゃんから借りた（ぶんどったという説もある）体を見る。

豊満ではないけど、全体的に健康的な肉付きをしている。肌のつやとも相まって、見てるだけでその触り心地の良さを体感できそうだ。

「全く、こんな可愛らしい体を前にして胸しか見ないなんて……緑野くんはわかってないねえ」

わたしだったら、とりあえず襲って全身を撫で回すよ！ってこれ、犯罪なんだっけ？うぐう……人間めんどくさいなあ……。

まあお姉ちゃんの体のプニプニ感の後で堪能するとして、まずは体を馴染ますための試運転に行こうか。

せっかくだし、お母さんに挨拶してから行こうと。

春風の話↓暗い・くらい・クライ

「んー！空が青い！空気がうまい！緑が眩しー！」

お母さんに行つてきますの挨拶を済ませて（わたしと私の変化には気付かなかった）家を出たわたしは、大きく伸びをして爽快感到身を浸す。妖怪変化っぽくないと言われたって知らない、わたしは今酸素を堪能してるんだ！

まあ言い訳を一つするなら、わたしは私のストレスの塊だからね。どんな方法でもいいから、ストレスを発散したいんだよ！

「……………」

なぜか頭が気になって確認してみたけど、サラサラのセミロングの髪だけで、猫耳は生えてなかった。

……我ながら意味がわからない。何で猫耳？

「まあいいや、それよりも……っと」

辺りを見回しても、人の姿も怪異の影も見当たらない。うーん、困ったなあ……これじゃストレス発散出来ないよ。

「しょーがない、少し場所を移しますか！」

——違うもん……わたしはみっちゃんに酷いことしたけど、それは心からのことじゃなくて……——

「……………」

お姉ちゃんがこうなったのは、かなりの割合でわたしのせいとはいえ、こつも長タイジイジされると気が滅入る。

あーあ、こんなことならお姉ちゃんの体から飛び出して顕現したかったなあ。そしたら、お姉ちゃんのプニプニ感ももっと満喫できたのに。

イジイジするお姉ちゃんに若干うんざりしながら移動してしばらく

くすると、ちょうど良さげなおもちやを見つけた。

「買い物帰りなのだろう、右肩からエコバッグを下げた、二十代男性のような風貌の怪異だ。」

「ふうーん、九十九神……かな？人の姿をしてるなんて、珍しいねえ」

「いや、お姉ちゃんの友達には九十九神の女の子がいる（ どう見ても向こうはそう思っただけだ、お姉ちゃんがそう言い張るので妹のわたしはそれを信じるだけなのです。お姉ちゃんの名誉のために注釈しておく、『言い張る』って言うのは自分に対してのことで、言い換えれば『思い込んで』いたってだけ。お姉ちゃんが緑野くんをかける前からわたしは潜在的にいたから、それを聞いていたのですよ（ から、体感的にはちつとも珍しくないけど。」

「さーて、それじゃ少し構ってもーらおっと」

そう呟いて、全身を闇でコーティングする。お姉ちゃんのプニプニボディを隠しちゃうのは凄くもったいないけど、顔を見られるわけにはいかないからね。

顔を見せないのは、通り魔の基本だよ！

「ッ！？何者です!？」

「ありや、かわされちゃった。完璧な不意打ちだと思ったんだけどなあ。」

「……………」

「気にしすぎかもだけど、こいつがレコーダーの九十九神とかだったら、声を発するわけにはいかない。なので、沈黙を返事としておく。」

「…………この不安定な妖気……妖怪変化ですか。どなたか存じませんが、御愁傷様です。こんな酷い姿になられて……」

「うっさいバカほっとけアホ。」

これは犯人を特定させないためだっつの！でなきゃ誰がお姉ちゃんのプニプニボディにこんなもん纏うか！うちのお姉ちゃんはねえ、脱いだらすごいのよ！

——もつと他の言い回しはなかったの！？その言い方だと、なんか私があつちい子みたいじゃない！——

さっきまでイジイジしてたお姉ちゃんが突っ込んでくれた。

普通に超嬉しい。

「とにかく、これは私の手に余りますね……まずは陰陽師に一報を……」

入れさせるかああー！！

九十九神の通報を阻止すべく、全力でドロップキックを放つ！

「ぐはっ！？」

電話に意識をとられていたからだろうか、わたしのドロップキックはすんなり九十九神のお腹に命中した。

いよっしゃ、このままボコッちゃお。

間髪入れずに連続して拳を叩き込む。悪意と敵意と殺意、やり場の無い怒りに似た感情を、隠すことなく目の前の九十九神に浴びせかける。

嫌だ。怖い。憎い。辛い。何も無い。

とりとめもまとまりもなく、わたしの中でのたうちまわるマイナスを全力でぶつける。

「っぐ……！が……あっ！」

呻く以外は何もせず（いや、厳密に言えば、右手の買い物袋を庇ってるせいで何も出来てないっぽいけど。……んなもんよりまず自分を守りなさいよ）、わたしに殴られるままに殴られる九十九神。そういえばさっき『これは私の手に余る』とか言ってたし、戦うタイプの怪異じゃないのかも。

お姉ちゃんのストレスが苗床とはいえ、わたしは私だ。無抵抗の相手……というか抵抗する手段さえ持たない相手を一方的に叩きのめすことに抵抗を覚える程度の良心はある。

「ぐあつ!？」

最後に思いつき蹴って、九十九神を吹っ飛ばすことで距離をとる。かなりぼこぼこにしちゃったから、しばらくは立てないだ「あつ」ろうに、たまたま通りかかったトラックが追い打ちをかける。

平たく言えば轢かれた。

あのダメージ量はヤバいわね……。下手したら人の姿を保てなくなるんじゃないかしら。

トラックの運転手が、慌てた様子で車から降りる。見つかったら面倒だ。巻き込まれる前に逃げよつと。

——こらあつ! 戻りなさい、どこ行くの!? あの人がああなったのは私たちのせいなんだから、ちゃんと陰陽師に連絡して、到着を待つ間は手当てをしないと……

親切バカのお姉ちゃんが何か言ってるけど、当然無視。んな親切なことしてたら、そのまま滅されるし。

——もうやめてええええええ!——

お姉ちゃんの悲鳴を幕引きに、目の前のゴロツキへの攻撃を中止する。こんな他人に迷惑をかけるしか能のない奴らに何をしようと、誰も文句は言わないと思うけど……。

——そんなわけないでしょう!? 彼らにも家族や友達がいるんだよ! 彼らがゴロツキなのだって、色々あって自分は悪い子なんだって勘違いしちやっただけで! こんなことをしていい理由になんかならないよ……!——

「大抵の人は色々あって何かしら抱えてると思うけどねえ……」

全く、これがただの偽善だったら良かったのに。親切バカなお姉ちゃんは、それが正しいと信じて疑わない。

事実、お姉ちゃんの言うことは正しいんだろう。わたしがボコしたのは迷惑の象徴みたいな人間だったけど、他人に暴力を振るうと

ころを見たわけではない。

ただ迷惑だっただけ。

だからお姉ちゃんの言うこと正しい。正し過ぎるという間違いを、綺麗過ぎるという過ちをおかしている。

こういう連中は、見てくれのかつこよさや上っ面の強さに惹かれて曳かれた二セモノだ。そのくせ自分の言動を自由だとか個性だとか、意味も知らないくせにそれっぽい単語を並べて正当化し、他の誰より自分がその偽りの正しさに騙される。

不完全なこの世界には、間違うことでしか正せない間違いがありふれている。

もつとも、自分の正しさを信じて疑わないという意味ではお姉ちゃんも同じだけど。グレルベクトルが真逆ってだけで。考えてみれば、周りを見無視した問答無用な親切は、ゴロツキの迷惑行為とそっくりかもしれない。

お姉ちゃん間違ってる。

その結果として生まれたわたしには、それを正す義務がある。

まあ、わたしには間違うことしか出来ないけどね。

「さてと……」

空を見れば、もう日が沈みかけている。この時間なら、伶俐ちゃんの補習も終わってるだろう。

「お姉ちゃん……自分が正しいことをしてきたって、今でもそう言える？」

——……？う、うん。私は、間違ってる——

「じゃあ、よく見ててね。お姉ちゃんの正しさが生んだ歪みが、ど

んな悲劇をもたらすか」

——…何のこと……！？これ以上誰を傷付けるつもりなの！？——
お姉ちゃんの質問を無視して跳躍し、すぐそばの電柱の上に乗る。
答えなくつても、すぐにわかることだしね。

「…あのなぐみ、お前子どもの頃ならまだしもこの歳になってまで兄の腕にぶら下がるな。重いし歩きにくい」

「…え？だめなのですか？」

「ちよつと待て伶俐、何でお前まで空いてるほうの腕を猛禽類のような目で狙っているんだ」

日もすっかり沈み、辺りの家々から美味しそうな匂いが漂い始めた頃に、わたしは標的を見つけた。

わざわざここでバトルパートに入るメリットはないので、殺気と妖気を押し殺してチャンスを待つ。

——だめ！お願い、もうやめて！それよりほら、お姉ちゃんとしりとりしよ？私からね、しりとり『り』から……——

平和過ぎるお姉ちゃんの思考回路にコケて、街灯から落ちそうになる。

……お姉ちゃんのナチュラルボーンボケでコケて登場とか嫌過ぎる……。恥ずかしさでわたしが殺される。

——り……！『リンカー』……——

そしてお約束。

まあ、やるんじゃないかと思ってたから、特にリアクションもなく流し……

——…『ン』を！『暗殺した青年』！——

「うわぁっ!？」

「……っ!！」

「んなっ……何だぁ!？」

姉のナチュラルボーンボケに耐えかねて落ちた妖怪変化です！とは、さすがに言わなかったけど。

よりによって何で暗殺者のほうをチョイスするの！？普通『乗ってた車』とかだよねぇ！？しかも結局『ん』で終わってるし！

幸い四つん這いの体勢で落ちたために、緑野くんたちは『いきなり降ってきた何か』と認識してくれたようでひどく混乱した様子だ。照れを誤魔化す意味でも、緑野くんの混乱が落ち着く前に――！

――だめえええ！――

「ッ！？」

「――ッ――！」

急に全身が水の中にいるかのような抵抗に包まれ、わたしの動きが鈍る。そのせいで、緑野くんを狙って放った一撃は虚しくも空振りし、夜の虚空に吸い込まれる。

――どうして……！？どうしてこんな酷いことするの！？――

わたしの理不尽な行いを悲しみ、当然の疑問をぶつけてくる私。ここで憤らないのは美しいことだと思うけど、友達を攻撃されて怒れないのはお姉ちゃんの欠点であり欠陥だ。

――わたしは何も悪くないよ？わたしは私の悪意として、当然のこ
とをしたただけだもん――

声には出さずに念じて返す。心配のし過ぎだとは思っけど、万が一にも『声で正体がバレた』みたいな事態は避けたいからねえ。

バレちゃったら学校行けなくなっちゃうもん。

――その悪意を我慢したことだって私の意志だよ！私は、こんなこ
としたくないんだよ！――

――だったら何で、さっきわたしが見知らぬ誰かをボコボコにした
ときも、今のこれみたいに邪魔しなかったの？――

――……え？――

お姉ちゃんは綺麗過ぎて、美し過ぎる。

あるいは無知過ぎて、無垢過ぎる。

人間のなかにある濁った部分は、漫画や小説の中だけのものだと思うっている。

自分はそういうものとは無縁なままで、清く正しくやってきたと思っっている。

それじゃダメなんだよ、お姉ちゃん。

正しさには感情を挟む余地が無い。

盲目的に正しさを貫いたお姉ちゃんは、自分がどれだけの自分を殺していたか知らないでしょう？

それじゃダメなんだよ。

それを知らないから、わたしがこうして自己主張を始めちゃうんだよ。

「何こいつ…災害型怪異!？」

「姉さん、落ち着いてよく見てください。でないと私は姉さんをダメな子呼ばわりしなくてはなりません」

「…なんか妹からの風あたりが厳しい気がするよう…」

わたしは私が正しくあるため私に殺された私の成れの果て。

けどだからわたしお姉ちゃんを恨んでいるかといえば、そんなことは全然無い。むしろ誇らしいくらいだ。

「この不安定な妖気、闇を纏った人のような姿…妖怪変化の症状と酷似しています」

だからこそ知ってほしい。自分を殺し続けることの意味を。

建前と理屈を並べて他人を傷つける妹を見て、わかってほしい。正しい正しさのために犠牲にきたわたしたちを見てほしい。

……まあ、そのための自己主張としては少し乱暴だけど、駄々をこねる子どもってそんなもんだよ。安心してとは言えないけど、わたしたちってお姉ちゃんの友達にそこまで酷いことはしな「つまり…」
「あー、なるほど!この人春風さんか!」いつもりだったけど予定

変更、殺害決行。

でも何で……！？何でわたしの正体がバレたの！？

闇の纏い方が甘かった？どこかで無用心に喋ってた？それとも、さっきの攻撃モーションだけで見抜いたとも言うの！？

「何でってそりゃ、あれだけ露骨に伏線張ってたら誰でも分かるよ」

「お前そんな根拠どころか違和感とさえ言えないようなことであいつの正体を断定したのか！？」

ただの漫画脳だった！

スペック低いなあぐみちゃん……。まあそれでも殺害は決行するけどね。

怪異にとって何より大切なことは『認識される』こと。自分の命を持たない怪異は、人から認識してもらわないと存在できない。

そんな曖昧な形でしか存在できない怪異は、その本質もあやふやだ。周りが『こいつはこういう怪異』と決めつけて認識すれば、認識を頼りに存在する怪異は当然その認識に引きずられてそうになってしまう。

そしてぐみちゃんは今、黒塗りの妖怪変化を『春風さん』だと認識した。

ぐみちゃんは怪異だから、その認識にわたしが引きずられることはない。怪異は怪異の認識には左右されない。だってお互い『存在しないもの』なわけだし。

けど、ぐみちゃんが『こいつは春風 薫だ』って主張し続けられ、周りの人間の認識も変化するだろう。例えば、緑野くん。

危険の芽は早いとこ摘んでおかないと……。わたしは別に、お姉ちゃんを墮としたいわけじゃなくて、お姉ちゃんのストレスを発散したいだけの健全な怪異なんだから！

……やたら頭が気になって確認してみたけど、お姉ちゃんのサラ

サラなセミロングの髪以外は何も生えてなかった。だからわたしは何を危惧してるのよ……。

それより今はこの3人だよ。『この妖怪変化は春風 薫かもしれない』という認識が芽生えた以上、事件（悪いことやってる自覚はちゃんとあるんだよ）が表面化したときに『かもしれない』が『違う』にランクアップしちゃうし。

残念だけど、その認識は命もろとも壊させてもらおうよ。

まずは一番ちよろそうな緑野くんを狙って、勢いよく飛び上がる！つもりだったけど、また全身が液状の鉛の中にいるかのように重くなる。そのせいで威力と速度が殺されたわたしの攻撃は、難なくかわされてしまった。

~~~~~ッ！！邪魔しないでよ、お姉ちゃん！——

——邪魔するよ！緑野くんは私の友達なんだから！友達が危ない目に遭ってるのに何もしないほど、私は悪い子じゃないよ！——

——お姉ちゃんのわからず屋！——

——妹ちゃんのトーヘンボク！——

なんか新たな時代を築けそうな呼ばれ方された（↑姉バカ）！お姉ちゃんの妹ちゃん呼ばわりについて喜ぶのは後回しして（だってこれお姉ちゃんがわたしを『妹』として認識してくれたってことなんだよ！？）、まずはこの拘束を解かないと、緑野くんにさえ攻撃が当たらない。なんかお喋りしながら避けてるし、さつきからイライラしっぱなしなんだよねえ。ストレスを発散するために生まれた怪異なのに……。

「っ！？」

異変。

わたしの内側から何かが……誰かが這い出てくるような感覚。

——お姉ちゃん……の、体……！か・え・し・て・よー！！——

お姉ちゃんが、わたしを押さえつけて私に戻ろうとしている――  
――！？

「う……うう……っ！」

「お！？喋った！春風さんが喋ったぞにーちゃん！」

――……何で……！？何でお姉ちゃんは周りにばかり優しくするの  
！？何でわたしのことは見てくれないの！？――

恨んでなんかいない。清く正しいお姉ちゃんを誇りに思っている  
っていうのも嘘じゃない。正しさのためにわたしが殺されることに  
も疑問はない。

だけど、たまにはわたしを見てほしい。

たまにでいいから『頑張ったね』って誉めてほしい。

たまにでいいから『辛かったね』って慰めてほしい。

恨んでなんかいない。誇りにも偽りはない。正しさのために殺さ  
れることにも疑問はないけれど。

お姉ちゃんが、わたしを見てくれないこと。

それだけがわたしの不満で。

「ああああアアアああアアア――！」

――……っ――！妹………………――

「ついきません……闇が馴染んできています。このままでは陰陽師に  
通報して滅してもらうしかなくなります！」

お姉ちゃんに、優しく頭を撫でてほしい。

それだけが、わたしの切なる願いです。

こうしてわたしは閉幕し、そうして私は開幕した

「幸は出しちゃいけない……わたしは幸せになっちゃいけない！あの子に酷いことをしたわたしが幸せになるなんて許されない！」

ハクちゃんのマイナス感情が、記憶とともに流れ込んでくる。あの子の思いが、痛いほどに伝わってくる……。

自分を否定することでしか安らげなくなった歪なわたしに……緑野くんの言葉と、拳が降ってきた。

「いい加減目エ覚ませこの加害妄想少女がアアア！！」

頭に響く強い衝撃。

それを最後に、ハクちゃんの記憶は途絶え、私は今に戻ってくる。加害妄想——。もう10年目になる私の罪の意識を、その一言で切り捨てた男の子を見る。

「……えつと」

困惑した表情を浮かべる緑野くん。まったく、困惑したいのは私のほうだよ。あんなこと言われたら、私も幸せになつていいのかなって勘違いしちゃうじゃない。罪の意識を忘れちゃうかもしれないじゃない。

それはだめなんだよ。

きちんと購わないと、私はみつちゃんに顔向けできないんだよ。

「例えばもし」

だから、聞いてみる。

だけど、聞いてしまう。

僅かな期待を払うために、微かな期待にすぎるように。

「例えばもし、親友を酷く裏切った人がいたとして、そのせいで親友は遠くに逃げなくちゃならなくなつたとして、裏切ったその人は

それでも許されると思う?」

答えは——返ってこなかった。

緑野くんもどなたかさんも、相談するみたいにひそひそと話し合うだけで、私の質問には答えてくれなかった。

「……やっぱり、許されないよね」

「そんな……っ、そんなことない!」

ちよつとびっくり。まさか知らない女の子からフォローが入るとは……。ていうか私、この子のこと知らないんだけど誰なんだろう? 緑野くんの友達なのかな。

「どうして『そんなことない』なんて言えるの? あなたは私に裏切られたあの子じゃないのに」

「だって……あんたは優しくて……」

「それでも私は裏切った。その事実、私の人格が何だったとしても覆らない」

「……………」

悔しげな表情を見せたあと、睨むように緑野くんを見る女の子。何とかしろってことなんだろうけど……どうしてこんなに必死なんだろう? 人のこと言えないけど、この子にとって私は勝手にぐれちやった知らない人なんだから、何もここまで一生懸命になることないのに……。

緑野くんは、困ったような表情（いや実際に困ってるんだろうけど）を浮かべたあと、私と向き合って、一言。

「許されないと思う」

「な……っ!？」

「……うん」

緑野くんの言葉には遠慮がない。初対面のときにそれはわかって

たけど、こういう場面では結構キツいなあ……。まあでも、根拠のない慰めよりはずっといいけど。

「大切な誰かを裏切ったなら、そのことを後悔しているのなら、お前は許されるまで許されちゃいけないし、罪に対する罰を背負わなければならないと、俺も思う」

「……うん」

そうだよ。だから私は、間違っていないよね。

「だから……」

だから私は、この檻から出ちゃいけないんだよね――。

「だからお前は……幸せにならなきゃ駄目なんだ」

「……え？」

そ……そうだった……のかな？

え？でもだって……ええ？？なんか話が繋がっていない気がするんだけど……？緑野くん、ひよつとして何も考えないで喋ってる？

私もそんなに頭良くないけど、その繋げ方がおかしいことくらいはわか『そ！そうだったのかぁー！』らないのぐみちゃん！？ひよつとしてお兄ちゃんの言うことには絶対服従な感じの妹ちゃんなの！？だめだよその生き方は！危険過ぎるよ！リスクーシスターぐみちゃんだよ！

「幸、お前は何で幸せになっちゃいけないんだ？」

「え？」

今は私のことよりぐみちゃんだよ！妹ちゃんの間違いを正してあげるのもお兄ちゃんの役目だよ！

「いやだから、大事な親友を裏切ったから……」

でもまずは質問に答えを返す。相手の質問を無視する人は意地悪おばさんだからね！

「幸せになることが後ろめたい。幸せになることに罪悪感を感じる」  
うなずいてお返事。

「だからだよ。だからこそお前は幸せにならなきゃいけないんだ。幸せになつて……」

「その後ろめたさを、その罪悪感を背負つて生きなければならない。それが、お前に課せられた罰だ」

「……………！！」

冷水の中に投げ入れられた気分だった。

「そつか……………じゃあ私、変に気負わなくてよかったんだね」

幸せになることさえ罰なんだつたら……………それはもう、生きること自体が罰みたいなものだもんね。

「……………あんたねえ！！いくら何でも酷過ぎよ！そんな風に言われて相手がどう思うか考えないわけ！？」

まるで自分のことのように怒る女の子。ちょっと前までは、その親切は私に向いちゃいけないものだと思っていたのに、今は庇ってもらえることがただただ嬉しい。

女の子の怒りに対して緑野くんは、両手を上げて投げやりに言い放つ。

「じゃあ、お前はお前の幸せを願う人のために幸せにならなければならぬとかでもいいや」

「……………あんた、私たちをバカにしてんの？」

女の子の怒りのボルテージがぐんぐん上がっていく。外から（檻の中だけ）見ていても、それがはつきりわかる。今にも飛びかかりそうだよ。

「ちよつ、喧嘩はだめ「幸助は黙つてて」

幸助って何！？なんかうつかりさんみたいな気配のする名前だよ！

「答えなさい。どういつつもりであんなこと言ったの？」

『返答次第ではただじゃおかない』ってセリフが聞こえてきそうな気迫。……当事者じゃないはずの私も怯えきっております。

緑野くんは少し間を置いてから、女の子の質問（尋問？）に、  
答えを示す。

「いや、正直理由は何でもいいんだよ。俺は、春風が幸せでいければそれでいい」

……………。

何か告白された！？

え、え、え！？聞き間違いかな！？もしくは私の感覚がおかしいのかな！？そのどちらでもないならたぶん、今すぐく献身的な愛の告白をされたよ！？

「えとあのそのちよつとあれごめん少し待って、気持ちは嬉しいけどそのあの手には答えが出せないっていうかえとあれ」

「……？すまん、ほとんど何を言っているわからないんだが」

緑野くんの告白のせいだよっ！っていうか何で緑野くんはそんなに落ち着いていられるの！？

『酷いよにーちゃん！春風さんに告白するつもりはないって言うてたのに！！』

空中に浮かぶ窓の外からぐみちゃん猛抗議。大好きなお兄ちゃんが目の前であんなこと言っただから当然だけど……。

「へ？告白……？」

ただの天然さんだった！

「酷いよ緑野くん！私の気持ちを弄んだのね！？」

「リアルにそのセリフ言うやつ初めて見た！」

何が悪いのかわかってない緑野くんは、暢気に突っ込み気取りだよ。人にぬか喜びさせておいてまったく、本気で怒っちゃうよ？実はすごく嬉しかったのに……。

『マスター、先ほどのセリフを思い返して復唱してみてください』

「さっきのセリフ……？春風が幸せならそれでいいってやつか？」

何でそこだけを抜き出すの！どれだけ私を弄べば気が済むの！？

『はい、その言い方ですと、『春風さんの幸せ以外はいらない』と言っているように聞こえてしまいますので大変妬ましい……羨ましいです』

隠しきれないよ伶俐ちゃん！本音が忘年会してるよ（意味不

明）！

「……………。ばっ、違うよ！何言ってるのいや違うよ何言ってるの！？違うよバカ違うよ！」

あ、気がついた。でも今の緑野くんにはバカって言われたくないかも。

「『春風が幸せならそれでいい』とかどんだけ一途な奴だよいや違うけどね！？本っ当駄目だなー俺！マジで駄目だ！何で国語が好きなのにこつも文章力低いんだろつな俺はマジで駄目だ！ぐあああつ恥ずかしい恥ずかしい！今なら恥ずかしさで死ぬそうだむしろ殺してくれ！何かかっこいいセリフ決めようとして外す方がまだマシだ！かっこいいセリフ決めようとして告白が出てくる意味が全くわからない！もう嫌だトラウマ確定だ黒歴史更新だ！忘れる俺なかったことにしろ俺！あんな恥ずかしい記憶を背負って生きるなんて俺には無理だ！」

緑野くんにとつてもかなり恥ずかしかったらしく、顔を真っ赤にして一気にまくし立てる。でも、いくら恥ずかしいからつてそこまですることないじゃない……私の受けた初告白でもあるんだから、もっと丁寧に扱つてよ！

「とにかく！お前の幸せを願ってる人間がここに2人いるんだ！それを無視して幸せから逃げるなんてさせねえからな！！」

顔は真っ赤だし、目はちょっと潤んでるしで、最高に決まらない画だったけど。いまいち決まらないこの人の言葉が、どうにも締まらないこの人の叫びが……私の時間を、動かした。

「……ここから出て……」

時間が流れ出す。

心が動き出す。

長い間止まったままだった針が、軋みながらも新しい時間を刻もうとして動き出す。

「ここから出て……幸せになつたなら

いつか……許してもらえるのかな？」

涙が流れ出す。

心が溢れ出す。

私に殺され続けた本音が、濁流のように私の意識を呑み込んでいく。

「本当に本当の意味で……」

「幸せに、なれるのかな？」

——そっか……これが、あの子の……

「なれるよ。絶対許してもらえるし、必ず幸せになれる。健気な少女に意地悪すんのは、継母かその娘だけだぜ」

……やっぱり、決まらないなあ。

意地悪な継母って、シンデレラのこと言ってるのかな？でも、私はシンデレラって感じじゃないよねえ……どっちかって言ったら継母側なんだよ。

今もまだ泣いているシンデレラは、私じゃなくてあの子なんだよ。

「……私、ここから出るよ」

たった一言。

その一言で檻は空気に融けて消え、私の世界は少し広がった。

助けに行こう。

私に殺され続けたあの子を。

意地悪するのは、もう終わり。

あの子を助けることから、私を始めよう。

そんなわけで、幸がメンバーに加わった俺たちは最初のダンジョンを抜け、再びワールドマップに出ていた。

ゲームの中なので屋内も屋外も大して変わらないのだけど、やっぱり空が見えると気分がいい。さっきまで暗くて閉鎖的な場所にあった反動もあって、とても晴れやかな気持ちになれる。

「……晴れやかな気持ちに、ねえ……」

「うるさい黙れ何も言うな」

ジト目で含みのある呟きをしているのは、未だに名前のわからない誰かだ。わからないならさっさと聞けよという指摘はもっともだが、ここまでずっとその話題に触れてこなかったせいでなんとなくその……聞きにくいのだ。

「まあ、あれが無ければ私も伸びの1つもして外の空気を満喫するんだけど……」

そう言っただけ俺たちの行く手に目を向ける未知少女。そこにそびえ立つ禍々しい雰囲気之城が、俺たちの気分を盛り下げている原因だ。いかにもラストダンジョンですって感じの空気を醸し出しているというか、一言で言えば魔王之城っぽい。

『2つ目で最終ダンジョンなら、最初のダンジョンいらなかったんじゃないかな……』

『幸さんの救出イベントだって、お城の地下牢とかでやれますもんね』

「やめろ……今さらそういうことを言うな……」

確かにこつとも早く最終ダンジョン（推定）に到着すると、そういう気分にはなるけど……そこは仕方ないだろ？

俺たちの力の及ぶところじゃねーし。

「スピーディーでいいじゃない！もぐもぐ言っただけ早く行くよ！」

「私たち別に何も食べてないんだけど……」

『ぶつぶつ』が正解な。

「っ！か何でさっきまで引きこもりだった幸が一番張りきっているのだろう。新学期でも迎えたか？」

「私は自分の幸せを求める感情で……悪く言えば『我が儘』だからね。気が変わっちゃったんだよ」

困ったような笑顔を浮かべながらそう言った後、憑き物が落ちたように迷いのない瞳を城に向け、あの春の日差しのような笑顔で言葉を紡ぐ。

「私は、幸せになりたい。みっちゃんや、みんなと一緒に」

——頭悪いねえ。不良さんデビューした子が、簡単に許されるわけないじゃん——

「なっ……何だ今の……！？」

唐突に、頭に直接響くような声と背筋も凍るような敵意が俺たちを包む。続いて、焦りを内包した怜悧のノイズ混じりの声が聞こえてくる。

『まずい……っ！強大な負の感情によるジャミングによって、私とマスターとのリンクが断たれつつあります！』

「は……！？それって結構ヤバくねーか！？」

長ったらしい理屈は忘れたけど、俺が这个世界で動けるのって怜悧の能力なんだろ！？つまり怜悧とのリンクってやつが切れたら俺は……文字通り身動きが取れなくなる！

「そこは大丈夫だよ！緑野くんが私の心を具現化したこの世界で自由に動けなかったのは、私の心が緑野くんの侵入を嫌がってたからだからね！今は私が心入許可を出せるから、動く分には現実と変わ

らないよ！」

『じゃあ……ひょっとしてあたし、いらない子！？』

表でぐみが衝撃を受けているが、行動の自由以上に戦闘行動の最適化が出来なくなるのがやばい。

戦いについてはど素人の俺がこれまで戦ってこれたのは、伶俐の能力が俺の乏しい戦闘経験と残念な運動神経をカバーしてくれていたからだ。

それがなくなってしまえば、当然俺は戦力外の足手まといだ！

『とにかく、こちら……も再ア……を試………スタ………で、と………』

「……伶俐！？おい、伶俐！」

マジかよ……！？伶俐との通信が途切れたってことは、俺は今丸腰ってことだろ！？やべーって、まさかこのままボス戦突入！？

「ちよつと、エア友達と話してる場合じゃないでしょ！」

正体不明少女が、慌てる俺に集中を促す。

……ていうかこいつ、本当に伶俐たちの声が聞こえてないのか？  
今までの感じから察するに、春風の感情シリーズには聞こえてたっぽいんだが……。

「何これ……景色が変わっていく！？」

幸の声で我に返る。そうだ、目下の異常事態はそつちだ。

空を、地面を、空間を。

テーブルにこぼした水みたいに、別の景色が呑み込んでいく。

爽快な青空は、瞬く間に閉鎖的な天井に変わっていった。……いや、最初の洞窟より高いから、言うほど閉鎖的でもないのだが。

「……城の、入り口？」

天井の高いホールと、2つに別れた階段。俺の目に映ったその2つが、俺にこの場所をそう判断させた。

「まったく、私はほんとーに昔から樂觀的な暢気さんだよねえ。死

ねばいいのに」

「ッッッ！」「ッ」

3人同時に、声のしたほうを見る。

俺たちの遥か上、天窓からホールを照らす光の中を、1つの人影が舞うように落ちてくる。そしてそのまま、耳障りな金属音とともに、緩やかに着地した。

「……おーちゃん……」

幸が、おそらくは眼前の感情の名前を呟く。

それを聞いておーちゃんと呼ばれた感情は柔らかい微笑みをこちらに向けると、うやうやしく名乗りをあげた。

「初めまして、『自己嫌悪』のおーちゃんです。大したおもてなしも出来ませんので、どうかそのままお帰り下さい」

怖いやつだと思った。

怖くて、気味の悪いやつだと思った。

服からも腕からも足からも顔からも、まるで自らを切るかのように歪な諸刃の剣が生えている。特に顔を含めた右上半身からは、そこが群生地であるかの如く。

それでいて、そんな異常を抱えた上で、あいつは常に柔らかく微笑んでいるのだ。

「悪いけど、私たちは帰らないわ。この子の幸せを邪魔するやつをやっつけに来たんだから！」

そう言って、叩くように幸の肩に手を置く名前がわからない少女。

当の幸は困惑した様子だ。

「だったら……ちよこつと痛いけど、我慢してねっ」

そう言っておーちゃんにはっこり笑うと、ものすごい速さでこっちに突っ込んで来た！

「うきやああああああ！？」

まあ、あれだ。

完全に巻き添えですよ。さっきの幸の様子を見る限り、こつちが正しくて向こうが間違っているみたいな簡単な話じゃねーみたいだし。

「言って解らない頭の悪い子は、斬って刻んで微塵切りっ」

「やってみなさいよ……！あんたからによきによき生えてるその悪趣味な剣を、一本ずつ丁寧にへし折ってやるわ！！」

そんなこつちの心境を無視して少年マンガなバトルパートに突入する2人。あいつらひょつとしてノリだけで行動してるんじゃないだろうか。

……あれ？

そついえば俺、何で戦ってるんだ？

いや、そりやもちろん春風の妖怪変化を治すためだ。それを忘れてたわけじゃない。

ただどうなんだろう、妖怪変化ってマイナス感情を殴り倒せば治るような単純なものなのか？

伶俐は『感情は倒しても死なない、眠るだけ』だと言っていた。つまり、何度マイナス感情を倒しても何度でもマイナス感情は蘇るってことだ。

だったらもしかして、俺はまるっきり無駄なことをしているんじゃないか？

やないか……？

「緑野くん！」

幸の声で我に帰り、意識を切り替える。そうだ、まずは目の前の事態をなんとか解決しないと……。

いやだから、なんとかって何だよ。

何をすれば解決したと言えるんだ？

「緑野くん、どうしたの！？ばーつとしてる場合じゃないよ、早くなんとかしないと！」

「そうは言っても、俺は春風の妖怪変化を治しに来ただけで、あいつを倒しに来たわけじゃないし……」

何より、なんとかするための力が今の俺にはない。伶俐とのリンクが復旧しない限り、俺はありふれた並大抵の一般人でしかないのだから。

「そんなの関係ないよ！目の前で喧嘩してる人がいるんだから、仲裁するのは当然でしょ！」

出た、不退転の親切神！

何で春風の一部なだけの感情なのにそんな春風っぽいんだよ！親切心はあいつの感情にまで染み付いてやがんのか！？

「お前あれを仲裁する気か！？止めとけて、ミンチになるぞ！」  
片や歪な剣でドレスアップされた少女、片や二丁拳銃を乱射する少女。

あの間に入ったらどうなるかなんて、何も知らない子牛でさえ解るだろ！

「うん、そうだね……。私はおーちゃんを説得するから、緑野くんはあっちの子をお願い！」

「俺の話聞いてた！？」

危ねえつつつたよな！？

「聞いてたけど、そんなのは喧嘩の仲裁をしない理由にはならないよ！」

「充分過ぎるだろ！むしろ『いのちだいじに』以上の理由があるのか！？」

「親切が引き金で地球が滅亡しちゃうときとか」

「ハードル高えよ！いつ遭遇するんだよそんな場面！」

「つかそれ以外なら断念しないってことなのだろうか。デンジャ―な親切心だ……」。

「……手伝ってくれないの？」

胸の前で手を組み、上目遣いでそう尋ねてくる幸。通常の説得では効果無しと判断して、色香で俺を惑わす作戦に出たか！

くそ……騙されないぞ俺は！

「……そっか。手伝ってくれないんだ……」

「……あれ？やけにあっさり退いたな……。こいつは春風の一部だから、親切心も一部だけ、とか？」

「『私が幸せならそれでいい』って言う「今それ関係ないだろ！？」」

マジかよこいつ、人の黒歴史掘り起こしてきやがった！！  
せっかくその部分は切り取ってなかったことにしたのに！

「……恥ずかしいのは分かるけど、黒歴史呼ばわりは酷いよ。私だって、告白されたの初めてだったのに……」

「いやお前はしょっちゅうラブレターもらってただろ」

「……え？もらってない……はず、だよ？」

「……ああー」

そっぴや、手紙をダストシュートした時の春風さん、様子が変わったもんな。

どんな背景があるのか知らないけど、春風の目には、あの手紙はラブレターとして写ってなかったってことか？

「……まさか、私の捨ててた手紙って、本当にラブレターだったの？」

「………まあ、うん」

「やらかしたあー!!」

叫びながら『やらかした』感を全身で表現する春風さん。

女子的には、そのポーズも『やらかした』部類に入るんじゃないでしょうか……？

「嘘でしょあれ全部ラブレター！？ってそれはさすがに自意識過剰過ぎだよな……」「いや全部だと思うけど」うーそーだーよ！だって私百通近く捨てたよ！？絶対後半の九十通は呪いの手紙だよ！黒いラブレターだよ！」

……百通で。

本当にギャグみたいにモテンのな……まあ後半は歪んだ願望の込められた手紙だったわけだから、確かに黒いラブレターと呼ぶにふさわしいけど……。

ていうか女子高生、黒いラブレター知ってんの？

「うああどうしよう……とても酷いことをしてしまったよ、春風さんのアイデンティティー大暴落だよ！早く謝りに行かないと、私の悪女認識が広まっちゃうよ！そうになったら、私の親切を受け取ってもらえなくなっちゃう！」

……最初に気にするとはそこかよ……。

ていうかお前の親切って、受け取り拒否不可って設定じゃなかったっけ？

「お願い緑野くん、力を貸して！早く謝りに行かないと、私の今後のボランティア活動に響いちゃう！」

「モチベーション上がりにくいわ!!」

お前のボランティア事情なんか知らねえよ!

今までがやり過ぎだったんだ、これを期に少し自粛しろ!

「そんな……! 私に死ねって言うてるの!?!」

「言ってねエエエエエエよ!! お前にとって親切行為は最早生きる  
ことと同義なのか!?!」

「わかった、手伝ってくれたらちゅーしてあげるから!」

「お前それでいいのか!?! その取引は本末転倒な感が充滿している  
ぞ!」

俺の周りはリスクな女子ばかりだ……。

「わかった、手伝ってくれたら私の胸見ていいから!」

「俺がよくねエエエよ!! 何でさっきから自分の体を取引材料に使  
ってんの!?!」

その手段はおよそ親切をする人間のそれじゃないからな!?

「嘘……!?! だって緑野くん、食い入るように私の胸見てたのに……  
……!」

「何のことだかワカラナイ。事実の捏造、ヨクナイ。」

白々しく全力でとぼける。

正直二つ返事でOKしたいくらいの好条件だけど(賛同できないという人は一度見てみればいい。胸に限らず、いつそ感動さえ覚えるほどに春風の体型は完成しているのだ)、その条件で動く奴だと思われたらたまったものじゃない。

また逆に、この条件なら人が動く春風に思われるのもヤバイ。

親切の為なら手段を選ばないというリスクさが発覚した以上、  
春風にその事実を悟られるのは売春の斡旋と大差ない!

「うう……わかったよ。ちょ、ちょっと恥ずかしいけど、少しなら  
触ってもいいよ!」

「うがアアアアア!!」

「ちよっ、緑野くん!? どうして急に頭を壁にぶつけたすの!？」

「とりあえず黙れ! お前は金輪際喋るな!!」

やっぱり春風は、自分の持つ武器の強力さを自覚すべきだ。

こいつに『触っていい』なんて言われたら、男子に限らず女子さえも理性を失う恐れがある!

「こ、この条件でも駄目なの!? 緑野くんは一体、私をどうしたいのよ!？」

「お前がそういうことを言ってるうちは手伝わねーよ!」

こいつは周りの善性を信用し過ぎだ! 悪意や憎悪が漫画や小説の中だけのものだとも思ってたんじゃないだろうか。

春風の世間離れた親切神ぶりは、裏を返せば世間知らずなことなのかもしれない。

「……じゃあさ」

そんなことを考えていたら、春風が再び口を開いた。おいおい、俺はさっき、お前は金輪際喋るなと言った筈だぜ。

また春風が自分を売り物にするようなことを言ったら、そう返すつもりだったけど。

春風は人付き合いの距離感を無視して俺に顔を近づけ、柔らかく微笑みながら、呟いた。

「商店街にさ、美味しいケーキ屋さんがあるんだ。……手伝わてくれたら、そのケーキを奢ってあげるから」

全部終わったら、一緒に食べに行こ?

頬を桜色に染めた春風は、上目遣いにそう提案した。

「……まあ、その条件なら、手伝わてやらなくも、ない」

つい咄嗟に目を反らし、そんな回りくどい返事をしてしまう。

そんな俺を見て春風は、呆れたような、がっかりしたような表情を浮かべて顔を引き、いつもの調子を取り戻す。

「じゃあ、私はおーちゃんを止めるから、緑野くんはあっちの女の子をお願い！」

「いやいやいや待てエエエ！手伝うと決めたからこそ待て！その作戦には見直しが必要だ！」

「……………話を聞こうじゃない」

出鼻をくじかれた不満を包み隠さず顔に書きなぐり、実に嫌そうに先を促す春風さん。

いやいや、俺が最初に手伝いを断った理由は『危ないから』だよ？

「危険を省みないのは結構だけど、自分を省みないのは駄目だ。人に親切にすることは、自分をないがしろにする理由にしちやいけない」

「そんなこと言っただのんびりしてたら、二人がもつと傷付け傷付き合うだけだよ！」

まあ、その通りだ。

だからのんびりするつもりは俺にもない。

安全策が見つからなければ強行策に出ることも――。

いや、この場合むしろ、強行策こそが安全策なんじゃないか？

「二人同時に不意打ちを仕掛けよう。あいつらは今周りが見えてないから、横やりを入れればひとまずこの場は収められるはずだ」

「暴力は駄目だよ」

正論で返された！

「ていうかその方法だと、喧嘩の相手が私達に変わるだけじゃない？」

正論で追撃される。

親切神の異名は、やはり伊達じゃない。

「不意打ちっつーか、拳骨だよ拳骨。拳骨から説教のコンボに繋げるんだ。喧嘩した子供を叱る時の王道だろ？」

攻撃した時のあいつらの怒りをうまくかわせれば、その流れで会話の主導権を握れるはず。

『その後』どうなるか、どうすればいいかまでは、俺にはわからないけど。

喧嘩の仲裁なら、それでなんとかなるはずだ。

「うん……そうだね。私もそれでいいと思う」

春風からの反対意見は無し。

仲裁方法は拳骨コンボに決定した。

「じゃあ、私はおーちゃんを叱るから、緑野くんはあっちの女の子をお願い」

「……了解」

こんなのは、問題の先送りでしかないけれど。

とりあえず、まずは目の前の喧嘩を仲裁しよう。

新たな疑問を棚上げに、俺の最終決戦が始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4821w/>

---

RPG始めました

2012年1月12日07時46分発行